



富士

1

柿沼日明 著

日蓮大聖人御伝

富士

1

序

日蓮大聖人伝富士の作者大東院日明^贈上人事柿沼廣澄師は昨年の末十二月十三日に遷化せられた。

富士は永年大日蓮誌に小説として連載されて居ったがその内容は大聖人の御伝記として史実に照し、又大聖人の御書を中心とし尚ほ宗教の真隨を以て力作された真実伝とも云うべきである。

今回我が法華講に於て此の富士を五巻の本にまとめて出版することになった。

私が此の序を書くに当って野村光照君に依頼して、古来よりの大聖人の伝記と名のつく本の数を調べた所、大聖人伝記の最古といわれる本宗の御伝土代を初め最近

の湊邦三氏の日蓮大聖人にいたるまでその数およそ二百十数籍にも及んだ。その内柿沼師が所持していた本の数は三十五、六種もあつた。

故に柿沼師が此れ等多くの大聖人の伝記本を熟読し自分の見識をもって此れを纏め、大聖人の御書を柱として作り上げた日蓮大聖人伝富士は小説と言ひ条真実伝として我等は讃仰して然るべきであらう。

又日淳上人の序言は日蓮大聖人の御当体と御出現の意義を明確にし、本宗の教義を短文の内に示されておるのである。

本書は本宗信徒の教学の指針となることを見のがしてはならない。

昭和四十九年五月十六日

大石寺住日達

序 言

釈尊は一代五十年の説教の中で法華經に説くところを仏教の至極とし、此の經典を、眞實にして最第一となされており、その法華經の中に於て、釈尊の入滅後二千年を経過した末法の世に眞の仏法である妙法蓮華經を以て一切の衆生を救うべく上行菩薩という方を召出して妙法を付嘱せられておりますが、此の經文からいえば必ず末法唯今の時に上行菩薩が出現しなければならぬのであります。若し出現しないならば釈尊の經説は虚妄になるのであります。そこで法華經に説かれてあるところの上行菩薩が末法に出現しての御行動を鏡として、その人を尋ねますと日蓮大聖人がその人に当たるのであります。それは大聖人の一代の御行動が寸分を違わず合致しておるからであります。それ故、此の動かすことのできない事實を以つて、日蓮大聖人は末法の衆生に對して日蓮は上行菩薩の再誕であると教えられたのであります。大聖人は顛仏未來記の中で、「然る間若し日蓮なくんば仏語は虚妄と成らん」と仰せられております。此れは大聖人が上行菩

薩であらせられ、末法に出現し給うたので釈尊の予証がはじめて真実となつたとのことであります。時を隔てること二千有余年に於て、恰も符節を合せた此の事實はただ事ではなく、不思議と申すほかはありません。これこそ法華經に説かれる如来の秘密、神通の力でありまして、即ち久遠の仏の寿命の不思議なる力用で、何人も疑う余地のない事実であります。

而して大聖人が上行菩薩の再誕であらせられる以上末法のための大聖人御一人のために説かせられた経説であつて、即ち釈尊が末法の衆生に対して大聖人が仏であらせられること、その建立の仏法こそ最正深秘であつて此の仏法によつてこそ仏道を得ることができると予証遊ばされたのであります。大聖人は法華取要抄の中で法華經は誰人のために説けるや、末法の日蓮のためなりと仰せられておりますが、仰いで信じなければならぬことでもあります。

然らば上行菩薩とは如何なる方であらせられるかといえ、法華經によれば、釈尊が久遠に仏道を成ぜられた時に第一番に弟子となられ、其後法性の淵底、寂光土に住し給ひしが、法華經涌出品の時、大地の下より涌出し給ひ、釈尊の久遠を証せられたのであります。それより神力品囑累品の時に至つて、妙法蓮華經の付囑を受けられたのであります。ここに此の菩薩の久遠に於ける御姿を拝しますと仏道に於ける本因妙の位に居し給ひ、衆生に下種をされる体勢をとつておられるのであります。此の本因妙の位に居し給ふことは、久遠無作の三身の如来にあらせられることを御示しなさるのであります。仏の因を行じ、仏の果を成ずる、此れが本因本果であります。

共に仏であります。(此れには因果俱時、因果不二等種々の法門がありますが此処には略します)

法華經の方便品には諸法の実相を十如是を以つて説かれ、之れを天台大師は十界十如一念三千を以つて開明されておりますがその教理の至要は仏界が九界(衆生)に具わり、九界が仏界に具わることにあります。法華經の前半迹門に於ては此れを空間的、理性的に具わることが説いておられますが本門に於ては之を時間的、事象的に説かれております。即ち本門に上行菩薩が出現せられたのは久遠を証するとともに、釈尊の因位をお明かし遊ばされたのでありまして、その因位はまた上行菩薩のことであらせられます。大聖人は開目抄に「九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に具はりて真の十界互具百界千如一念三千なるべし。」また「一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり。竜樹天親知つてしかもいまだひろいださず、但我が天台智者のみこれだけをいだけり。」と仰せられて、壽量品は十界互具を説かれたのであることを指摘遊ばされております。即ち釈尊は仏界、上行菩薩は九界でありまして木因、本果を表するのであります。此の上から上行菩薩が久遠の無作三身の如来にましますことを拝すべきであります。

かような次第で、上行菩薩は久遠の本因妙下種益の仏でありますから、その再誕であらせられる日蓮大聖人はとりもなおさず久遠本因妙下種の仏であらせられることは申すまでもないことであります。大聖人は「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を南無

妙法蓮華經というなり。寿量品の事の三大事とは是れなり。」と仰せられております。

此処に注意すべきは日蓮大聖人は上行菩薩の再誕であらせられると云って、大聖人よりも上行菩薩を拝する人がありますが、末法の御化導のために出現遊ばされた方は大聖人であります。上行菩薩は大聖人の過去世の御振舞であります。それ故大聖人の尊貴を領解し奉れば最早上行菩薩を考へることはいらぬのであります。

大聖人は以上の如き内觀の御内証の上に御一代の御行動を展開遊ばされておりますから、その御奉蹟を拝するには是非共此のことを心に於て拝することが肝要と思ひます。また之れを逆にいつて御奉蹟を拝さなければ大聖人の教義は領解できないし、従つて法華經も解らなしといふべきであります。

今回本宗の柿沼広澄師が大聖人の御伝記を書き下ろされて上梓することになりましたので、私にその序文をと所望されたが著者の意中を察するに大聖人の教義を了解するには必ず御伝記を知らなければならぬといふので此の挙に出たものと思ひます。之れは常に布教に精進されておる著者の尊い体験からであると思ひますが全く同感であります。但御伝記を読まれるには大聖人の御内証を心において拝すべきで、また御伝記を読むことは御内証を拝す第一歩であると思ひます。そこでいささか不似合ではないかと思はれるようなことではありますが以上を記して序言と致す次第であります。

昭和二十九年

御大会之月

東京都墨田河畔常泉寺に於て

堀米日淳

識

小説
富
士
第一卷・目次

| | |
|---------|----|
| 武蔵野の富士 | 一 |
| かたびらの富士 | 五 |
| 富士を指さす | 一一 |
| 仏法即世法 | 一七 |
| 山法師 | 二三 |
| 鼠 | 二九 |
| 学僧 | 四一 |
| 学友 | 四一 |
| 仏になる道 | 四七 |
| 矢文 | 五三 |
| 大講堂 | 五九 |
| 一 | 五九 |

| | | |
|---------|----|-----|
| | 二 | 二 |
| | 三 | 六八 |
| 仏を売る人々 | 三 | 七三 |
| 四明嶽の月 | 四 | 七九 |
| 旭の森 | 五 | 八五 |
| 清澄山の第一声 | 六 | 九一 |
| 連長破門さる | 七 | 九七 |
| 初の受難 | 八 | 一〇三 |
| 小港の教化 | 九 | 一〇九 |
| 聖人鎌倉へ行く | 一〇 | 一一七 |
| 名越の庵室 | 一一 | 一二三 |
| | 一二 | 一二三 |
| | 一三 | 一二八 |
| | 一四 | 一三三 |

| | | |
|--------|-----|-----|
| 小町の辻 | 一 | 一三九 |
| 二 | 一四三 | |
| 三 | 一四七 | |
| 四条金吾 | 一 | 一五三 |
| 二 | 一五七 | |
| 天災 | 一 | 一六五 |
| 岩本の実相寺 | 一 | 一六九 |
| 二 | 一七五 | |
| 三 | 一七八 | |
| 師弟のちぎり | 一 | 一八三 |
| 立正安国論 | 一 | 一八九 |

武蔵野の富士

春

武蔵野の春である。

房総の深山清澄寺に数年とじこもった蓮長法師にとつては、これはまことに目あたらしい風景であつた。そこには亭々とそびえる老杉もなく巨樟もない、茫々たる草原のみである。六尺豊かな体軀をもつ青年僧蓮長より高いものはなに一つ生えてはいない、一面の草原。

清澄寺の深山の風景もたしかによかつた、毎日毎日自分より大きなものを見ていると、時とすると自分自身が大きな樹肌をゆるやかにのはつてゆく蟻の如く小さく思える時すらあつた。ところが今この武蔵野の中に身を置く時、自分よりは大きなものは何一つ見えない。始めて今この果てしない大草原に佇立して、偉大な自己をみつげ出したような心持がするのだ。経文はすべて釈迦の説かれたものということは、何人も否定はしない、しかるにその經典を朝夕に誦誦する僧達か、何故釈迦を崇めずして阿弥陀仏を礼拝し大日如来を供養するのか、これ疑問の一つ、またそ

の釈迦といえども、經文を説かれたが故に、仏になつたのではなく、仏になつたが故に人々を教化し利益するがために經文を説かれたのであろう。釈迦の言々何々が經文になつたが故に、經文は八万といわれ六万巻といわれてもあえて不思議とはしない。しかし仏が仏になられた教がある筈である。釈迦が仏になられた法がある筈である。この法は八万や六万ある筈がない。釈迦が釈迦となられた法や教は一つしかない筈である。人の本心に二つある訳がなく、家に二人の主人がないのと同様仏の心も一つしかないのが、ものの道理である。釈迦が自分の心をとかれた経が必ずなければならぬ。しからばその經文は果して如何なる經文であろうか、これも疑問の一つである。これらの疑問を清澄寺の先輩である淨頭房や義淨房に問うたことがあつた。

「何故俱舍宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、真言宗、天台宗近くは禪宗、淨土宗などと言う宗旨が沢山あるのでしょうか」

「それはなあ、經文が沢山あるが故に八宗九宗とある訳よ」こともなげに答えた。

蓮長法師はその答えから自分の疑問が生れておるので、すかさずに、

「經文が沢山あるが故に宗旨がわかれたとはいわれるが、その經文は誰が説かれたか、この世に出現して經文を説かれた方は釈迦一仏のみである。しからば諸宗の説く所は一仏の所説のみ、その一仏を忘れて諸宗を崇める理由は何か、ましてこの釈迦一仏を却つてひくしとして他仏をたかしとする宗旨すらございます。これ不思議の一つ、又諸宗の諸仏は如何なる法を修行して仏にな

られたか」

と問うた時二人の先輩は顔を見合わして答えなかった。

「今にわかる、今にわかる。仏道修行のむずかしさはそこじゃ蓮長」

こういわれたのは師匠の道善御房であった。しかしその答えは励ましの言葉になつても解決は出てこない。

この研究心に富んだ蓮長法師のききたく思つたのは、当時の都鎌倉に今流行中の新しい仏教である念仏と禪宗の極理であつた。

この極理をきわめたならば、日頃の疑問が解決するかもわからない。こう思いたつた時、数年間育つた干光山清澄寺のさしも広い境内も、小さな鳥籠のように思えてきた。この鳥籠を破つて翼を張る荒鷲の如く武蔵野をゆくのが蓮長法師の今の姿である。めざすは無論鎌倉の都、草を踏み草を越えて行く、偉風堂々の蓮長法師、思はず、はたと足をとどめた。

春霞がいつの間に晴れたか、茫々たる武蔵野の果てに、一連の屏風の如く箱根秩父の連山がある。

しかもその山々を遥かにみおろして大いなる富士がそりたっている。この雄々せまらざる富士を望んだ時、果てしなく続いて大地の広大さをも誇るが如き武蔵野も、単なる一草原にすぎなかった。

そこをゆく自己も草原の一風物となりはてて、
旅ゆく一介の僧の如くに思えた。

かたびらの富士

「まあまあ火におあたり、夜は冷えてくるで……時にどちらからみえたかな、なにっ、房州の千光山からか、あそこは不思議法師が開かれた。親爺はものしりだと……知らなくてどうする。こうして街道に家をもつておれば、旅の人を泊めるのは法師、お前が始めてではないわ、あしたの晩もまたお前のような坊さんをとめるかもわからない。宿銭はいらんそのかわりぢや、仏様のお話をたんまり聞かせなさい、宿銭の代りになあ。わしは旅の人を泊めるのが大好きぢや、そのかわり、旅の人から諸国の出来事を聴く、宿銭をもらうつもりで、それになあ、このかたびらの里から鎌倉まではもうわずかな道のり、みたところ、法師、お前は脚が達者そうぢや、一刻もあれば鎌倉までは大丈夫、安心して泊まんない、明日の朝ゆつくり立つても昼前には鎌倉へつくぢやろう、して何処の寺にゆかれる……」

何に何にっ、どこの寺へ行くかわからんと、これは驚いた。死人ですら、行く先きは阿弥陀さまと近頃はとんときまっておる世の中に、生きておる坊さんが、行く先きがわからんとはこれは

これは驚いた。わしのところは鎌倉へのいわば入り口、だから宿を借りる人は大抵が、このわしに鎌倉の様子を訊き、尋ね場所をきくんぢやが、お前さんのように行く先きがわからん人は始めて泊めた。近頃面白いぞ。して年齢はおいくつぢや……。

十八か、ほう、これは余り大きいので二十五、六才にみた。いやいや年の若い時は、ふけてみえるのがよいのぢや、行く先の寺がわからんとは、何しに鎌倉へゆかれる……：：：仏教の研究に鎌倉へ、これはまた驚いた。今更仏教を研究なさつてどうするつもりぢや、からだは大きいが考えは、まだまだ若いとこの親爺はみたぞ、わしはなあ人の話をきくのが大好物、人を泊めては宿銭がわりに話をきく、それが楽しみでいろいろな人の宿をするから、こうやって炉辺の火をかこんで、幾人かの坊様の話も拝聴したで、仏様の話も多少は心得ておるつもりぢや、なあご坊、今鎌倉でもつばらの流行は浄土の教え、ありがたい阿弥陀さまの教えじや、これには研究なぞというものは今全くだらんと話だぞ。仏教の研究なぞは仏さまがとつくの昔に御親切にも充分して下さつておるのじやよ。だからもう研究なぞしておるときではないわ。それに短い命で、沢山ある経文を全部読むだけでも命か一つや二つじゃ足りっこはない。やめなさい、なまじつかな研究なら。ええ、それよりはなあ、いま流行の浄土宗に身を入れなさい。そして執権職にとりいることぢやよ、日本国中に寺という寺は多数あるが、お坊さんの建てた寺は一軒もない、みなお上がたててくれた寺ばかりでないか。此処をよく考えてみなさい、この方面の研究が先ず肝要。いま鎌

倉の執権北条泰時殿は大の仏教信者ぢや、善光寺にどえらい五重塔を供養するかと思えば、一切經五千卷を園城寺に奉納したり、近く鎌倉では、佐介ヶ谷に蓮華寺を創立して法然上人の嫡孫とかをお迎えするとのごうせいな話ではないか、幕府も鎌倉に都を開いても、まだまだこれからじや、寺も益々建てて都の威厳をつけようと思っておるわい、お上にとりいることが肝要……。えっ、寺など建ててつもりは毛頭ない、これはまた驚ろいた、では、なんのためにお坊さんになられた……。なんとなんと

「仏にならんと思うばかりなり……」

仏にならんと思うばかり今生の祈りなし」と言われるか、これはまた一段と驚くよりあきればてた。年寄りだと思つて、余りなぶりなさるな。誰が仏さまになろうと思つて出家した坊さんかおるものか、坊主になるのは、せつぱつまつての借錢のがれか、よくつて罪ほろぼしかのいづれかだけよ。それが仏になろうのが今生の大願と本気で言われるか、ご坊気が違つてはおちんかいな。仏様はたつた一人しかおらんぞ、阿弥陀さまじや、これが皆を救つてくれるのじや、何人もの人を殺ろし壇之浦ではご幼帝に弓を引いた熊谷直実殿でさえ、一遍の弥陀の称号を唱えるだけで極楽往生疑いなしと法然上人より印可を受けたというではないか。仏法の極意は後生の往生を願うこと、仏になるうなぞとは仏様に対して全く申訳けがない、もつたないことを言うものではないぞ法師よ。よくきけ、此処は房州の片

田舎とは違う。鎌倉の外にいてもこの位のことは知っておる。ましてや、鎌倉の人々もつとつと利発だ、仏になろうと思つて坊さまになつたなぞうっかり口外なざるなよ。それより、鎌倉はまだまだ草創の地、うまくとりたてられて、寺の一軒でも建立しよう、こう発願して明朝出發しなさい。みたところ、あつばれな法師じゃ、第一押出しがよいわ。ははは……私も禅をやつておつたが、近頃では阿弥陀さまばかり、あまり婆々がやかましく言うので、この間鎌倉の小町で、阿弥陀さまの絵像を買つてきたが、お釈迦さまの木像は今の子供達の玩具になりさがつておるわ、これも末法とか言うて、お釈迦さまのご利益がなくなつた時が来たそう。その道のお坊さんが言うのじゃから本当のことだろう。それになあ本当にお釈迦さまのご利益があるものならば、人がそうはさせせんわ、玩具にさせたこの爺々や婆々の眼でもつぶれる筈なのにそんなこともない……。

いくつも宗旨があるのを不思議だと思わぬかと言われるか、お坊さまが自分の得手不得手でそれを興行するからよ。禅が得手なら禅宗の興行、浄土が得手なら浄土宗で興行という具合になあ、たとえばさあ十三力国にまたがる富士山じゃ、武州の富士もあれば相州の富士もある、此処かたびらの里からみれば、かたびらの富士と人は言う、富士は一つでもみる人の場所それぞれに名が違ふじやないか、仏はたつた一つじゃがみる所が違ふからじゃ、どうじゃ納得か、法師、名前はまだきかなかつたが、何んと言われる……蓮長か……近頃面白い法師じゃ、わしは人の話

をきくのが大好物、もっと火にあたれ、まだ早い、ゆつくり語りなさい」

富士を指さす

「おうい！」

誰かが呼ぶような気がする、ふりかえってみたが人影らしいものはみえない。道があると言え
ばあるが、無いと言えは無いとも言える。夏草が茂るに任かせた武蔵野の原である。

広大な武蔵野を渡りゆく自分の小さな姿が、はつきり脳裡にえがき出されて、なにか心もとな
い、それが、人が呼ぶように思わせるから耳なのかも知れない。

足音に驚いて膝にとびつく虫にさえ、なにか話しかけたいような気がしていたのだ。

「待った、待った」

がさがさと夏草を押し分けて、一、二、三間先きの道端に飛び出したものがある。

蓮長法師は「おう」と思わず脚をとめた。

「脚の早いお方ぢやなあ、わしは今朝からあんたを追いかけていたのじゃ。房州へ帰る若い法師
が、今さつき出掛けたと今朝の宿場できいたものぢやから、御同業のよしみで道づれになろう

と、跡を追いかけていたんぢやが、やっと近道をして今追いついた」

言いながら汗をふきふき道につつ立つたのは、六十年輩の僧侶であった。

「さようでしたか、私も誰方か呼ぶように思いましたが人影もみえず、人恋しさのから耳かと、自分をあざけりながら歩いておりました」

「今朝から呼びつづけで喉が痛いわ、さあさあ先きを急ぐ、話は歩きながらでもできる。ともに参ろう」

呼びとめておいて、自分が先きに立って歩き出した。

「……時にあなたは鎌倉におられたか」

「はい」

蓮長法師は静かに答えた。

「どの位いおられた」

「はい、ちょうど四か年程おりました」

「では光明寺殿の御法話を聴聞せられたかなあ」

「さよう、度々拝聴しました」

「それは結構なことじゃ、わしは有難とうて有難とうて……わしもなあ房州うまれの者ぢや、生れ故郷にこれから帰って阿弥陀様の教えを罪亡ぼしに弘めようとの念願を立てた。あんたも房州

と聞いたが、して何処へゆかれる」

「師匠のおられる、房州清澄山へ帰るものでございます」

「四か年の鎌倉滞在、念仏の教も充分に会得せられたろう、どうじゃなあ」

「会得と言う程のことありませんが、ほぼ極めましたつもりでおります」

「共々有難いことぢや」

「しかし……」

蓮長法師はここで言葉をきると、きつぱり言い放った。

「ご坊のお考えとは、とんと異なります」

「えっ」

つれの僧侶はちよつと立ち止まったが、歩き出して

「どう違ふんじや」

「さよう、念仏の教えも一応の理がおりますが不審にたえぬは、あれ程極樂往生を説きながら臨終にあたつての狂乱の相、遠くは開祖とも言うべき善導和尚の柳樹の縊死、善慧、隆観、聖光、薩生、南無、真光寺、一宗の長者達の臨終の悪瘡重病はいかなるものかと深く思いました」

「ううむ」

怒つたような顔色をみせたが、年長の貫祿をみせて連れの僧侶は、

「それから、」

と穏やかに先きをうながした。

「よつて往生とは、一体いかがなことから疑問をもつようになり、鎌倉遊学四か年殆んど寺々の法話を聴聞するよりは、鶴ヶ岡の八幡宮寺の経蔵に通つて、一切経を讀んでおりました。しかるに法華経を讀んで始めて往生の真意を会得しました」

「なんと会得せられた」

「浄土に往生して成仏をする説は権経の配立觀経の権説也と会得しました」

「わしにはちよつとむずかしいわ、もつと易しく言えんかい、若い時は、えてしてむずかしい言葉を使つて、相手を煙にまきたがるもの、風態は僧形でも、南無阿弥陀仏の名称しか知らんわしぢや」

「御謙遜で恐れ入りさすが、この土に生れた以上は、自分の身を仏になるべき因とみて、この土に往生すべきである、と、経文より教わりました。法華経には今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子とありますから、この国土に生ずるものを口にしてこの身を養う我が身は、これこの国土とひとつもの、その国土はわがものであると仏は言われておりますから私達は等しく仏の子、今更どこに浄土を求めましょうや」

「若い若い、御坊はいくつぢや、二十一歳か……さもあらん、苦勞が足りんわ。二十一歳といえ

ば、御坊が九つの時と思う、寛喜二年の大飢饉より未曾有の米の値上り、翌る年には、全く食糧欠乏して、わしどもは草を粉にして食べておったぞ」

連れの僧は、ふいに道端のよもぎのくきを折ると、その葉をかみながら言葉をつづけた。

「この草などは人が争って採る食べ物ぢやったよ、親が子のものを奪い、子が親のものを盗み食う、それが三年もつづきおった。この地獄の世がどうして浄土であろうか、かてて加えて御坊の十二の時の天福元年にはあの天変地天、ここ二、三年は少しは落着いたが、何時また修羅地獄の世の中に変わるかも知れん。どうしてどうしてこんな世の中が浄土であろうか」

「では……本来浄土であるべきこの土が何故修羅地獄の相を呈したか、その原因を考えられたことがありますか……本来仏の所有であるべきこの土に生を受けながらその仏の正意を踏みにじって、我意を通そうとすればこそ飢饉もあろう、天変地天、疫病もありましょう。あれをこらんなさい」

夏草茂る彼方に屹立する雄大な富士を指した蓮長法師は、

「この土が浄土のしるしはあれ、あそこにあります」

言いきったその横顔には確信のほどが、はつきりとみえていた。



仏法即世法

「父上、執権北条泰時殿のご他界をいかがお考えになれますか」

「さればさあ、世に不思議なこともあればあるもの」

父といわれた、貫名次郎重忠はこう答えると、しばらく感慨無量の態であった。

時は仁治三年の十一月初旬。ところは房州小湊の浜辺。四か年の鎌倉遊学をおわった蓮長房は、清澄寺の師匠道善房の御許に帰ったが、一日の暇をいただいて今日は自分の生家をたずねると四か年の見聞を父に告げるのだった。

次郎重忠、今はこの浜辺の漁師に身をやつしてはおるがもとをただせば、由緒のある武士、とかく話が政道向きにわたるのもやむを得ない。仁治三年六月十五日、執権職北条泰時他界、蓮長房は当時鎌倉にあつて、世上の噂を親しく耳にしていた。未曾有の大逆事件承久の変は子供の時から日夜父から聞かされておったので、その一方の立役者北条泰時の死について、父に意見を求めてみたのである。

「しかもご他界に、六月十五日の日を選ぶとは、泰時殿も思い当たることがあろう。蓮長殿の生れた年の二十二年前の六月十五日こそは、泰時殿が東海道、東山道、北陸道の軍勢合せて十九万の総大将として、三上皇を御敵とみ泰つて、堂々京都に進軍したその日ではないか。不思議なことよ。こんな片田舎に住んでおつても四年前、後鳥羽法皇が隠岐の島に崩御せられてからその御怨霊の祟りがあると、鎌倉では専らの評判だと聞いておるが、どうぢや」

「さようでございます。崩御以前には後鳥羽法皇か隠岐の島よりお還りになったと屢々流言があり、また先日新院（順徳天皇）が崩御せられるまでは、これまた佐渡ヶ島を脱出せられたとの風評、屢々鎌倉にあつて、物情騒然たるものがありました。脱出還幸の望みも、もはや詮ない今日では、これまでに輪をかけて、御怨霊の流説しきりでございます」

「無理もないこと、後鳥羽法皇崩御せられた年の十二月には承久の乱に将たる三浦義村の急死、翌る年の正月には十万余騎の華々しい大将にてありし執権連署の北条時房の他界、後鳥羽法皇御怨霊の流説はまだまだ当分はやまぬであらう」

「蓮長もこのことにつき仏の教えを奉ずるものとして、日夜肝胆をくだいておりますが、これら諸將の死は還著於本人として当然なこととは考えますが、気の毒なのは一般の庶民でございます。承久三年、北条義時三上皇を御流罪という和国未曾有の重大事件より、今年仁治三年に至る二十二年間、鎌倉に大地震のあること都合五回、即ち嘉祿二年八月一日と九月一日、寛喜二年閏正

月、一昨年仁治元年二月、昨年四月三日には大逆浪さえ加わつて鶴岡八幡の拜殿はうちこわされた仕末でございます。しかして京、鎌倉に大暴風雨のあること総数九回、未曾有の飢饉疫病は数え上げるだけでも十指に余りますれば、殆ど隔年毎と申しても差支えがありません。世上においては、これはみな、御鳥羽院の御怨霊とのみ申しておりますが、禍はそのようなものでなく、もつともつと深かいところに根ざしておるものと考えます」

「そうなくてはならぬ、思えば一天万乗の大君とお生れになつた安徳天皇は、元暦二年春三月西海のもくずと成り果て申し、承久の年には三上皇の御遠島、

「啼けばきくきけば都の恋しさに此の里すぎよ山ほととぎす」

と御製あらせられた順徳帝は先日御崩御遊ばさられた。佐渡の真野には今なお時鳥は啼かぬといふではないか、時鳥ですら皇恩の鴻大なるを知るといふに、陪臣たる北条泰時一人の意志によつて、二十二年の長きにわたつて、北海の孤島に天子様を幽閉申し上げるとは何たる逆罪……」

「父上、しかもその泰時は今年正月四条天皇崩御の直後、佐渡の順徳帝の御心痛を、せめて京都の方々は慰めんものと、順徳帝の皇子忠成王を御位につけようとした摂政以下の申出を断然蹴つて、承久の変には御関係なかつたとの理由により、土御門帝の皇子邦仁王（後嵯峨天皇）に御踐祚を申し出でたとのこと。その使者秋田義景が使いの途中よりわざわざ帰つて、

「もしすでに京都のお計らいにて順徳院の宮つかせ給いたらばいかがあるべき」

と伺えば、

「このこと申し落したり、和殿をのぼるはかようのこのため、いみじくも問うたり、何条件細あるまじよし、さることあらば、おろしまいらすべし」

と下知したと申します。王法もすでに尽きぬというべきでありましょう」

「蓮長殿、そなたを出家させようと、十二の年の天福元年五月十二日、千光山清澄寺に登ったあの一里半の山道で、そなたは、

「父上、この善日磨はきつとえらい坊様になつてみせます」といつた時

「えらい坊様にならなくてもよい、ただ日本一の正しい人になりなさい、そして、父にはわからぬが、安徳帝の崩御、承久の変以来の此等世法の誤りは、如何なるところよりよつて来たかをただしなさい」

というたのを忘れてはおるまい……」

「はい、蓮長そのお言葉を今もつて身に体しております。世間の濁乱は人の心より来たり、人の心はその信ずる教えの是非によると近頃思っております。人とは天地靈妙の至極でございますれば、この至極皆狂えばこそ天変も地天もあるのが道理でございます。しかして仏の教はこれまた天地を貫く極理でございます。この極理をもつてこそ始めて、此等天変地天の由つて来たる由

縁、王法衰微の根源も尋ねることが出来ようかと存じます。しかるに仏の教えが八宗も九宗もあるは、天地至極の法理が狂っておる証拠でございます。鎌倉遊学四か年ほぼ念仏を極めたと思えます。この上は仏教の最高学府たる叡山に登ってこの仏法を顛倒せしめたものは誰か、仏の正意はいずれにあるかを極めて、この近年の災の根本を究めたいと思っております」

山法師

「近頃山に登った蓮長とかいう田舎坊主は、おぬしのことか」

「いかにも拙僧だが」

「うわさにたがわず、すばらしいからだをしてくさるわ、学僧などにはもつたないしろ物ぢや」

こういいながら、蓮長の体軀を、なめまわすように見まわしたのは、当時叡山において名うての荒法師弁盛その人であった。

みれば、その輩下らしいのが、みるもいかめしい叡山独特の山法師姿で、大杉の木立の下にたむろして、こつちを見ながら、にやにやと笑っておる。

弁盛は腰の一刀を軽くたたくと、言葉が続けた。

「いまだき、学僧を志すのは、身体のひよわい公卿育ちが座主をめあての仕事ぢや、その座主も、近頃は親王か関白の息子しかねれんときまった世の中、お主のような田舎坊主、いくら学問を励もうとも、その出世は高が知れている、みれば天晴れ堂々たる偉丈夫、おぬしの手はなあ、

筆を握ぎる手ではない。劔を執る腕じゃがどうだ、返答をうけたまわろう」

にこにこ笑って聞いていた蓮長法師、臆する色もなく答えた。

「おことわり申そう、もはや俊範上人の講義が始まる時刻、失礼……」

この声をきくと、今まで大杉の根もとにおった五六人の山法師は、ばらばらっと大講堂に通ずる路をふさいでしまった。それをみた弁盛、

「待て待て」

と声をかけて、

「もとの処で休んでおれ、俺が独りで料理してみせてやるから」

杉木立の間から洩れる日の光が、長刀の穂先きにきらきらと光ったが、輩下の山法師、一言もなくもとの位置に戻った。矢庭に、一人の山法師が、うおつと犬のように吠えて飛び上ったかと思つと、数尺上の杉の大枝が、ぱつぱつと蓮長法師の足許におちてきた。

「みられたか蓮長、あの長刀はなあ、返答如何では、何時おぬしの首にくるかも分らんのだや、宗源俊範の試験を受けただけではこの山にはおられんのだ。かくいう叡山荒法師の統領たる東塔の住人弁盛房の印可を受けねば、一日たりともこの山には安閑たり得ぬ。東塔千八百十三人西塔七百十七人横川四百七十人、叡山の大衆三千人の命をあづかりおるのがこの弁盛ぢや、いくら学問をするというても、山の霞を食って生きておるわけではあるまい。飯も食おう、酒も呑もう、

十八代良源和尚わが山を復興して伝教大師の再来とか言われた方ぢやが、山の奴等が病気になるのは、霧の深いこの山で酒を呑まんからぢやと言われて五辛は入るべからずぢやが、酒は登るべしと言われた。もののわかつたお方ぢや。だがその薬酒を運び、合戦の度ごとに必ずねらわれる山徒三千人の命の綱たる米蔵を守護するのは、何びとの役目だと思ふか、かく言う弁盛の采配だと思わぬか」

「その理は在山の掟としてたしかに承け給わり承知致しておる、よつて蓮長も順序を経て、そこもとへご挨拶に参りましたが、たしか坂本へ下つて留守とのこと」

「さればさあ、今日この道に出ばつて俺が直々の挨拶へまいつたのじや。どうじや堅苦しい学問をやめて、俺のもとにこられんのかのう」

「仔細あつて遙々房州の片田舎より、この山へ登つたもの、どうていお言葉に従うわけにはまいりません」

「よいわよいわ。まあ俺が話をきけ、血湧き肉おどつて、どうてい経机の前などに座つておられようか。その六尺豊かな体軀をして。そもそも正暦四年より今年寛言元年に至る三百五十年間のわが山と三井園城寺との合戦を聞こうならばだ。本日このようないかめしい姿をしておるのも伊達や酔興ではないわ、明日こそは山門の衆徒が忘れてはならぬ三月の十六日じや。百年前の康治元年のこの日こそ三井の衆徒が吾が叡山の東塔西塔の房舎四十余宇及び丈六堂に火を放つて焼き

打ちしおつた日ぢや。だがなお、それよりさかのぼる、六十一年前の永保元年六月九日、今なおわが山に残る先師の手柄話によるならば、山門の衆徒は三井寺に暴れに暴れて余す所がなかつたという。その日園城寺をおそつて御願所十五か所、堂宇七十九所、塔三基、鐘楼六か所、経蔵十五か所、神社四か所、僧房六百二十一か所、舎宅一千四百九十三宇を焼き討ちしたと伝おつておる。しかるに九月十三日園城寺の衆徒は、その報復を試みんとし、決死隊三百人が密かにわが山に登つて火を放たんとした。これを事前に捕えたわれ等が先師達は、悉くこれらを捕えて殺傷し、わが山にことなきを得たのじや、みよ、あの谷底には今もつて、ちよつと地を掘れば、当時の舍利頭がうようよとところがつてくるわ。

さて、園城寺衆徒のその報復を手をこまねいて待つは愚なりとしたわが山の衆徒は、再びそれより進み討つて、九月十五日園城寺へ攻めいつて、またもや堂院二十か所、経蔵五か所、神社九か所、僧房一百八十三か所、舎宅数千等を焼き払つて余すところなかつたという。保安二年にまたまた園城寺を焼き払つたが、二十一年後の康治元年の明日の日はわが山が始めて不覺をとつて四十余宇を灰燼に帰した日だ。だがその仕返しはちようど二十一年後の長寛元年六月九日、四度園城寺を焼き払い、健保二年五度これを焼いて、その芽をつまんだが、本年はちようどそれより三十一年目、敵も合戦の準備がとつたであらうと察する。ましてや明日は三月十六日、園城寺衆徒がわが山をおそつてたつた一度の勝を得た日じや。いつなん時、不意の夜襲をかけてく

るかも知れんのじゃ、今宵から明日の朝迄、われ等は山の要所要所をかためて康治元年の悲惨をとりかえさぬつもり、このような時だ、蓮長とか、仏飯をはんだからには力をかされい」

鼠

「やあつ、鼠、鼠だ」

驚きの声が急に起つた。

蓮長と弁盛の立話を、五、六間はなれた、大杉の樹立の下で、今まで聞いておつた山法師の口々からでた言葉である。

どこから来たのか、五、六十匹の野鼠が山法師達の足許に迫つたのを、踏みつぶそうと、逆らつたのが悪かつたのか、数に勢を得ている鼠は、山法師達のからだに、急にかけて登つたものとみえる。

「おのれつ」とか「糞つ」と口々に罵しつて、鼠に登られた五六人の山法師達は騒ぎ廻つておるが、傍からみると、ものにつかれて踊つておるようにはかみえない、あさましい恰好であつた。

持つておるものが長刀だけに、少しも役にたたず、さりとして、からつと捨てるわけにもいかず、手の施こしようがない。幸いに頭巾を被つておるので坊主頭をかじられる心配はないが、気

持が悪くてちつとして居れない、互に騒ぎ立てるから、却つて鼠が暴ばれる結果となり、甲から乙へ、乙から丙へと、鼠が飛び移るので騒ぎはいよいよ大きくなり、鼻でもかまれたのか「痛い痛い」と叡山の荒法師にふさわしくない悲鳴をあげる奴がでてきた。

蓮長はこの悲鳴をきくと思わず、

「あつはつは、あつはつは~~~~」

と高声に笑つてしまった。

「こら、蓮長、何がおかしい」

自分でもあさましい恰好と思つておるところを、そばから笑われたので、怒り心頭に発した荒法師、ネズミにはかなわないが、蓮長ならばと、二人程長刀を振り上げたのがいた。ネズミは面白がつて長刀の柄を渡り始め行きづまると、逆戻りをして手許に走り出したので大言にも似あわず、

「わあつ」

と声をあげながら、長刀をほうり出してしまった。「馬鹿者つ」ほんの瞬間の出来事なので今まで、蓮長とともに此等の有様を眺めていた弁盛の口許から発した大喝である。「みんな動くな、仏像にでもなった気持で、じつとしておれ、眼をつぶれ、眼を」と言いながら、弁盛は腰の一刀をさつと抜き放つと、つつつと、騒ぎ立てる荒法師の側に進んだとみえたが、

「えいつ」

掛声諸とも、一人の山法師の肩に登ったネズミの首を見事に刎ねた。これは相当な使い手に相違ない。足許にばあつと落ちたネズミの死骸に驚いた山法師、思わず眼をあけてしまった。

「眼をつぶれ、さもないとネズミの首と一緒に、うぬらの首がすつ飛ぶぞ」

言うが早い、隣の山法師の頭に飛び乗ったネズミを、気合も入れずに、すうつと払った。血しぶきをふいてネズミが飛ぶ。

弁盛の刀風をきいて、ネズミよりはこの方が余つ程恐ろしいので、五、六人の山法師、其の場に羅漢さんのようにぢつと動かず、堅く両眼をむすんでしまった。あわて出したのはネズミの方である。二、三匹してやられると、石か仏像になりきった山法師をみすてて、一勢に谷の方へと走り出したが、とまどいした五、六匹のネズミが急に蓮長の足許にせまってきた。

蓮長は素早く腰をかめると足許にせまったネズミをひよいと掴むようにみえたが、どうしたことか、ネズミは急におとなしくなつて、命でも請うように、ちゅうちゅうと鳴きながら、蓮長の足許にうづくまつてしまった。まるでネズミと遊んでおるようである。……今は、眼をあけて、啞然として山法師達はこのさまをみているだけだ。ネズミの血などで大事な腰の一刀を汚した弁盛、恥ずかしくなつたか、あわてて血も拭ぐわずに、刀をおさめた時、杉の小枝に逃れていたネズミであつたらうか最後の一匹がほつとした弁盛の頭の上にふつてきた。

「うわっ」

と声を上げた弁盛、先刻の大言壮語に似ず、正しく醜体である。声とともによろめいたので、そのネズミは蓮長の肩に飛びおりだ。軽くそれを押えた蓮長は、

「叡山三千人の衆徒の総大将たる弁盛殿のおつむに足をかけるとは、お前の命はないぞ、さあさあかくれておれ」

そういつて、そのネズミをやさしく懐中に入れて、立上りながら弁盛の顔を見た。

「あつ！」と驚いた弁盛、暫く輩下の山法師と同化して、口もきけなかった。

「弁盛殿、この山ではネズミは頼豪の生れかわりといわれて、みんなからの憎まれものでしたなあ、可哀そうに」

といつて、蓮長は静かに笑っていた。

叡山でネズミが頼豪の生れ代りといわれるのは「源平盛衰記」等に載せてある話で、白河天皇の時、叡山の宿敵たは三井園城寺の実相房頼豪が、天皇の後に皇子がなかったので、恩賞は望み次第という御命により皇子御誕生を祈禱した。験あつて皇子御誕生に及んだが、頼豪は園城寺の年来の宿願たる戒壇の建立を望んだ。しかるに長歴年間より白河帝の御代に至る三十六年間、四度も勅命をもつて園城寺の戒壇建立を許されたが、常に武力をもつて叡山はこれをこぼんだ。よつて白河帝も、頼豪の望みは到頭不可能と諭された。頼豪は綸言を汗の喩えをもつてこれをきか

ず、御誕生の皇子を祈り殺さんと答へ、終に憤死して、死後大鼠となり数千万の鼠族を率いて、叡山の聖經を噛み破ったと言う。

蓮長の不思議な動作に驚ろいた弁盛、きまりの悪いのをてれかくして、

「蓮長殿、天晴れな手練をみたぞ、叡山と園城寺の合戦はもとをただせば法論より起きたこと、貴公その胆力をもつて一山法論の総大将となられい、山のかためはわれ等の役目ぢや、俊範上人の講義もおつつけ始まる時刻、こらつ、道をあげぬか、蓮長殿の邪魔になるわ」

弁盛の山法師を叱る声に、蓮長の足許のネズミは何時の間にか、皆逃げていた。

学 僧

静かな夜である。

夜鳥が渡つてゆくのか、怪奇な声が、比叡の峰々にこだましてゆく。経机を前に端然として座した蓮長は、灯の火をみつめながら、脳裡に去来するものを追うてみるのであった。

叡山三千人の僧侶の内に真に仏道を志すものは、果して何人あるであろうか。

伝教大師がこの山を鎮護国家の道場として、根木中堂を建立せられたのは、桓武天皇が奈良の都を、京都にうつされた六年前の延暦七年、大師二十二歳の時といわれておる。ご本尊には等身の薬師如来を自らきざんで、根木中堂に安置せられ信仰のしるしとして、自ら火を打って、永劫不滅の燈明を献せられて、

「明らけく後の仏の御世までも、光り伝えよ法のともしび」

と詠ぜられたと伝えられている。その燈明は寛元元年の今年に至る四百五十五年の間、一度も消えることなく、今も中堂の真中に輝やいて、静かに油をすすっているのである。非情の器物は昔

に変わることなく往時を伝えておるが、人の心はその昔に似るべくもなく、こうも変り果てるものであろうか。

桓武天皇より「東大寺、興福寺は七宗を弘むと雖も鎮護国家の名は叡嶽の靈窟にあり」と言われ、入唐求法した伝教大師は、延暦二十四年遂に天台法華宗をこの山に創立し、滅後六年の天長四年五月大乘戒壇院が勅造せられて、大師の誓願は満足せられ、叡山の威光天下を圧するの觀があつた。これに対抗した弘法大師は伝教の滅後一年目の弘仁十四年正月十九日に羅生門の左大寺を授けられ嵯峨天皇より教王護国寺の勅願を賜つた、これ今の東寺である。これは高野山が京都を去ること遠く、玉体安穩、鎮護国家の祈禱を捧げるのに不便であつたから特に京都にその寺を賜わり、東寺の長者として弘法大師を招いたのであつた。

叡山のみが桓武天皇のお言葉の如く長く長く鎮護国家の道場であらうと、こい願つておつたのに、伝教滅後一年にして、洛中にも鎮後国家の道場が出来たのである。叡山の門徒は必ずや悲憤にくれたに相違ない。そこで前述の如く天長四年に、大乘の戒律は叡山において受くべしという戒壇院の建立が勅命せられて、叡山門徒大いに仏教界に鼻を高くしたのだが、その鼻は天長七年弘法大師が「十住心論」を著述してくじきさつたのである。弘法大師はその著書において、眞言こそ鎮護国家の秘法である。法華經には鎮護国家の理論はあるが、鎮護国家を祈禱する所の実際の修法がないではないかと、天台法華宗を下したのである。暗に大乘戒壇院も否定せられ、叡山

の威光一時に消えたかの観があった。

ここにおいて、第三祖円仁慈覚大師は、真言の秘法を支那より伝えて、当時流行の祈禱仏教を興行しなければ叡山は滅亡の外なしとみて承和五年（伝教滅後十六年）より同十四年に至る十年間、支那に留学して真言を伝え、傍ら禪念仏等も受け来つて、今後なにが仏教界に流行しようと、さしつかえないような慎重な態度をとつたのである。ついで第五祖円珍（智証）も仁寿元年より仁寿三年に至る三年間、支那に渡つて真言を伝えてきたので、弘法大師の東寺のみが真言を誇ることが出来なくなり、逆に叡山の真言の方が、弘法の真言より三十年程新しいという魅力も加わつて、かえつて東寺の真言を圧倒せん程の気概であつた。かくて円仁、円珍の二人の努力は、弘法大師に対抗して、叡山の勢力は挽回したが、後日の争いの種を蒔いていつたのである。この二人の滅後九十年、天元四年になると、円珍即ち智証の門徒は、叡山における円仁即ち慈覚門徒の行政人事における横暴の非をならして、ついに山をくだり、円珍が賜つた三井の園城寺を本拠としてたてこもり、堂々と比叡山上における慈覚門徒の失敗をなじり、暴力をもつてもこれを打倒せんとしたのであつた。よつて時の座主十八代の良源は、愛山護法と称して兵士を養ない、ここに山法師の暴力団が生れたのであつた。当然園城寺方も対抗上荒法師を養成した。かくて、蓮長法師が叡山に登つた仁治三年に至る三百年間、互に鎬をけずつて打ちつ討たれたつの大合戦は五十六回余に及んでおつたのである。

「あのくたら三みやく三菩提の仏たち、わが立つそまに冥加あらしめ給へ」

と伝教は有名な歌を詠じて比叡山に延暦寺を創立せられたが小世は末世の故か、三みやく三菩提の仏たちの威光は全くおとろえて、これを守るものは山法師の刀杖であり長刀であった。

法華経、仁王経、金光明経を鎮護国家の三部として毎日転読して満山をくるわした読経の声は、すでに昔のことですぐに代わるものは、三井園城寺の襲撃を恐れて、日夜そなえる山法師の剣術の声であった。叡山は、最早単なる寺院ではなかった。座主は一方の雄将であった。洛中に一度合戦があれば、その勝敗は叡山が決定する程の勢力をもっていた。源平の争乱、承久の変にも与って力あるものがあつたのである。叡山三千人の衆徒と普通に言うが、それはあく迄も平時のことで、一度号令を下げば二万の衆徒が山上に蝟集するという一大兵力団であつた。

白河法皇をして「鴨川の水、賽の目、叡山の衆徒」と、意の如くならぬものに数えさせたのは、今以つて誰も知る話である。

鎌倉は幕府が出来ると、北条の執権職は、代々なんとかして、この叡山の勢力を、そがんものとして考へて叡山の宿敵たる三井園城寺を後援し始めたので、叡山の衆徒は自衛上益々武力を蓄積し剣道に励まねばならなかつたのである。

この環境において、仏道を志ざして修行するものは、山法師よりも、もつともつと胆力がいり勇気が必要であつた。青白い学僧の部屋に、般若湯に顔を真赤にした山法師が乱入して、経巻を

書籍をふみにじる乱暴狼籍をはたらくのは、毎夜のこと、決して珍らしくない風景であった。

みよ。蓮長の端然として経机に座したその後ろ姿には、寸分のすきもないではないか。鎌倉遊学四か年、殆んど鶴が岡八幡宮寺の一切経蔵にとじこもり、遂に法華経を見いだし、法華経こそ仏の正意なりと秘かに確信して、その法華経八軸を地中に埋めて創建されたといわれる天台法華宗の叡山に、百五十里の道程を経て、登り来たってみれば、最早やそこは寺でもなく仏教の最高学府でもなく、目夜剣撃のひびきが聞える所となっていた。

伝教大師の精神は何処にあるのであろうか。法華経によつてたてられた、この天台法華宗の叡山の乱脈、これは一体何を意味するのか。

仏の正意は法華経にないのか、あるのか。

.....

蓮長の想念にかかわることなく、叡山の夜は静かに更けてゆくのであった。

学 友

「蓮長殿、このようなことを伺うのは、ちと恥かしいことですが、きかしては下さいますまいか」

こう訊いたのは浄念という学僧であった。俊範上人の講義が終つての帰り路である。

「私は朝夕の勤行に近頃一こう熱がはいらんで困つておるのですよ」

「ほう、それは坊主としては大変なことですなあ、武士で言えば君に忠義が出来ませんと言うのと同じことですから。いや、ゆつくり訊かせて貰いましょう」

質問を面白く感じたか蓮長は「あれに腰かけましょう」と山路のかたわらの小さな岩を指さした。

岩に腰かけると、よく晴れた陽差しに琵琶湖が一目にみえる。坂本の宿は足許にみえるが伊吹山の麓に迫る大湖の対岸は、空に浮かんでおるのではないかと疑がわれる程であった。

「経文の意味もわからず、ただお経をあげておる時は、なんとも思いませんでしたが、少し意味

がわかりかけたと思ったら却って疑問が出てきたのです。一つ解決していただきたいのです。こんなことは、俊範上人なぞにきけませんよ、頭からこなされてしまいますから」

「で、田舎坊主の蓮長ならばという所ですか」

蓮長は微笑を浮かべていた。

「とんでもない、拙僧は真面目なつもりでおるんですから。実は、何時でしたか中堂で読経をしておった時、ふつと、頭に浮かんできたのです。根本中堂の御本尊は吾が叡山の開山伝教大師御自作の薬師如来です。御本尊には毛頭不足はない、有難いものですが、それに対して南無阿弥陀仏と唱えるのは如何なものでしょうか。御本尊と口に唱える所とが一致しておらないで果して御利益が成ぜられましょうか。つまり質問ですが」

「つまらない質問ではありませんぞ、恐らくこれを解決したら、全仏教の解決が出てくるかもわかりません」

「そうですか、そういわれると嬉しいですよ。実はそこに考えついて、あたりを見廻わすと不思議なことばかりです。わが天台宗では法華経に説く所の観音さまを大変ありがたりますが、その観音さまを拜むのに南無阿弥陀仏と唱えておがんでおります。これなぞもおかしな話だと思えます。わが宗ばかりではありません。禅宗ではお釈迦さまを祭つて南無阿弥陀仏と唱えておる。いずれの宗旨もみんな本尊と称名とが全く違つております。これはまちがつておるのではな

いでしようか。どうしてまた、こんなことが平気で行われておるのでしようか」

「それは一言にして尽せば本尊を主として考えないで自分の心を主として考えるからそういう過ちがあるのではないでしようか」

「もつとやさしくいって下さ」

「救ってくれる仏を中心にして、ものを考えず、救われる自分の気持のみにとらわれるから、そういう間違いが平気で行われているのですよ。禪家はその極端な例です。見性成仏で、自分の心に仏を見出し、自分が成仏するというたてまえをとりますから、おがむ本尊はお釈迦さまであるうと下駄の歯であるうと一向にさしつかえがない。本尊も經典も悟る迄の手段ということになつて絶対これではなければいけないぞと強要しないのですから、これなどは徹底していますから悪い所も善い所もはつきりしていて却つてよくわかりますが、最も仕末の悪いのは、仏法の道理を転倒させておるのがあります。これが一番いけない。即ち阿弥陀仏が、この世の中にお釈迦様と生れてきて、一切のお経を説いたのであるというんですから、とんでもない人騒がせの話です。馬をみて鹿という方がまだよい位です。仏の経文の何処をたずねてもそのようなことのないのは、御自分の弥陀三部経を読んだつてわかる筈です」

「なる程、そういうものですか、では、どういう訳でそんな説が流行したり、間違いが出てきたのでしょうか」

「それには、いろいろの原因がありますが、先づ最初にあげねばならんのは、日本の仏教のひろまり方についての大きな疑問です。

さて、私の説いた教は經典として日本へ全部渡つてきておる即ち一切經です。これ以外には私の教えはないことはわかつております。經典は死物ではありません。經卷のある処に仏は生きております。日本にも釈尊が現に来ておられて、われわれが經典をひもとく時、そこにわれわれに向つて説法をきかせてくれておるのです。この私の説法を求めてわれわれはきかねばなりません。しかるにこの説法に耳をふさいで、今流行しておる宗旨はなんだろうと、東奔西走しておるのが僧侶ではないでしょうか。仏教のため万里の波濤を渡つて支那へ行く、その求法心は認めますが、支那に行つたとて、日本にある一切經と異なつた一切經がおる訳ではありません。入唐求法という言葉がありますが、求法とは一体どんなことでしたか、支那に行つたら真言が流行しておつたから日本へ真言を伝えた。念仏が盛んであつたからそれを和国へ招来した。その次に出掛けて行つたら真言も念仏もすたれて禪宗が一大流行であつたから、これこれとばかり喜んで日本へ持ち帰つてきた。これが従来日本へ仏教が流行した原因です。果してそれでよいのでしょうか。私の説に耳をふさいで、人師論師の説をきいてそれを仏説なりと興行する。これこそ大きな過ちの根本です。

支那の或る人などは三七日断食をして、満願の日に経藏にふらつく足で這入り込み、盲ら滅法

にお経をつかみ出してきて、これが仏の正意なりとして一宗を開いた人があるくらいです」

「本当ですか」

「本当ですとも、つかみ出したお経が弥陀の三部経だったので、大いにそれから念仏を流行させたのです」

「ふむ……それで宗旨が開けるのならば、まだまだ宗旨の数は少くない位ですなあ、八万の法蔵という位ですから、八万の宗旨があってもよい訳ですねえ、それでは、まだまだ坊主が足りませんよ、一人一宗ですか」

「兩人とも思わず叡山の木立をゆるがす程の哄笑を続けるのだった。

仏になる道

鳶が輪をえがいて足許を廻つておる。

叡山の山路、小岩に腰掛けた、蓮長と浄念との話はずきない。

「宗旨が沢山ある理屈はそれでわかつたとして、仏様がごちやごちやと沢山あることについて、どうお考えになりますか」

と浄念が話をつづけた。

「仏様がたくさんあるのは立派な根拠があるのですが、一番悪いことは、おがむ方が、自分のひくい心持を主にして、すき勝手に仏像をえらび出しするのが、色々な混乱をよび起しておる原因ですよ。わしは不動様のどんなものにも屈しない、あの形貌が気に入ったとか、わたしは観音様のあのやさしさが好きだとか、みな自分の心持を主にしておがむのがいけないのです。仏様を愛玩品にしておる。観音や不動をおがむ場合は、非常にひくい自分勝手な欲望をもととしておがんでいると言うてもさしつかえがない。ですから、不動様をおがむ人は観音様をみとめない、観音

に熱心な人は不動様を全然ありがたがらない。互に相手を否定しあっております。そして、観音にも不動にも心を動かさない人からみれば、両方ともなんらの価値がないということになります。こうなると、また、なんにも信じない人というのもいてよい訳になります」

「その話の調子では、無宗教の人達を仏教がそだてておるような理窟になりますなあ、これは面白い論だ、無宗教の徒を仏教が養成するというのが言い過ぎならば、すくなくとも、無仏の徒を僧侶が肯定することになりますよ、それでは坊主は商売になりませんぞ」

「まあまあ論は後にして、先ずお聞きなさい。三百年にもわたる叡山と山下園城寺の兵器をとつてまでの闘争をなんとみますか、叡山はわが山の仏を尊しとなして園城寺の仏を下す、園城の僧徒は、叡山の寺塔すべてを焼払つても、敢て仏罰を恐れぬ、互いに相手を否定しあつておる。こうなると、これに関係のない人は、無宗教に安住するのは当然の理ではありませんか。僅かに道念のある僧侶が山をおりて、自分の意にあつた経文、自分の愛玩する仏像によつて、各自勝手に宗派をたてておる」

「なる程、法然上人は九年間、栄西禪師は十四年間、親鸞上人は十九年間と、みな長い間、この叡山で修行せられたが、三人とも山をおりて一宗を立てられております。叡山にはもはや伽藍のみあつて、仏の正意は山法師にふみつぶされてしまったのでしうか」

「さりとて、山をおりて、宗旨を立てておる人達が、仏の正意に適うものとも思われません」

「それは何故ですか」

「仏の正意が、そういくつもある筈がないからです、仏の正意はただ一つだけだと思います。天には一日、国には一人の王ときまつておるではありませんか。」

一体、仏様とは如何なるものでしょうか、仏はなんによつて仏になられたのか、仏は仏をおがんだだけで仏様にはなっていない。

仏の教えをきき、それを悟り、それを実行せられた方が、仏になったのです。だから仏様はいくらでもおる訳です。三世十方の諸仏と言う位沢山の仏様がおられますが、これはおられるのが当然です。おられなければ却つて不思議と言わねばなりません。仏の教の実行者ですから、沢山おるのが当然です。しかしながら、その諸仏の行動所説は、仏になつてからは異なる所もあるでしょうが、仏になるといふ教については、等しく同じでなければなりません。即ち一つの法があつて、それを悟つた人々が仏になつた。仏様の教だけ法があるのではありません。諸仏は縁による法のあらわれ方であります。この一法こそ、仏の正意です。

現在日本の仏教は、その法を悟り実行した、いろいろな仏様達を飾りたてておがんでおるにすぎません。

ご馳走をたべた人の話をきいていても腹は一杯になりません。仏になる道は、仏の歩いてきた道を、あるく以外にはないはずですが、しかしながら誰もその道を歩かないで、諸仏成仏道の見聞

記たる経文を暗誦しておるにすぎません。故に一仏を得れば、徒らに他仏を否定する、せまい量見になります。諸仏をあらしめた、その法を私達は会得すべきだと思ひます」

「なんとまた変つた考え方でしよう、私などはお経の読み方を習うだけで、そんな話は聞いたことも、考えたこともありません」

「淨念殿、この叡山に住んでいて、そんな低い考え方をもつてはいけませんぞ、雲は足許に湧き、鳥は脚下をまおつておるのではありませんか」

みれば夜気がせまつてきたのか、比叡の谷々からは霧が生きものの如く湧き上がってくる。ねぐらに帰る鳥の群であろうか、銀盤のような琵琶湖の上に黒い影をとどめている。まことに脚下の景観は悠々たるものがあつた。

「この山上に居る間は私達は上を望み見なければなりません。それが修行ですよ、出来上つた金びかの仏様をおがんでいただけでは、到底成仏を期す訳にはいきません、仏になるべき秘法を会得して、自らも仏にならなければ、下化衆生なぞ思いもありません。

出来上つた金びかの仏様を飾りたてて、さあさあおがみなさいと商錢をかせぐのが、近頃の新興仏教ですよ、おがんだだけ、賽錢を上げただけでは成仏はしませんぞ。要は実行ですよ、おかしなもので、賽錢を上げたりおがんだりだけしておる人が、何時の間にかその教えを実行しておるような錯覚を起してしまうのですよ。そのような人が一杯になつた時は仏教が亡びる時です。

在家もお経廻りをするこまめな坊さんだけを珍重して、こつこつと勉強し、求道にもえる僧侶をありがたがらない、これでは仏教はおしまいです。なぜ、このような時代になったのか、浄念殿、貴殿は大集経を読んだことがありますか」

「そのような名前のお経など読んだことはありません、どう言うお経ですか」

「それを読むと、何故今のような時代がきたか、その理由がはっきりとわかりますよ、この今の時代こそ釈尊が予言をしておいた時代なのです」

矢 文

「大変だ……大変だぞ」

声をかぎりに、ど鳴りながら山路を駈けておりてきた人がある。

今迄、話に夢中であつた蓮長と浄念は、思わず路の小岩から立上つた。

「何事だ、騒々しい」

浄念もど鳴り返えした。

「これだ……」と言いながら、下人は一本の矢を浄念の眼の前につき出した。

みれば、矢には文らしいものが結びつけてある。浄念が、あわてて、結び文を手にとつてみると、なる程容易ならざる文面が書かれてある。

「浄念殿、何事ですか」

蓮長が落着いた口調で傍から訊ねた。

「山下園城寺よりの果し状です。近々叡山の寺塔を焼き払って仏恩を報ぜんとす。しかれば仏の

大慈悲を持つてあらかじめ事前に之を通告するという、人を馬鹿にした矢文です」

「して、これを何処で手に入れたのか」

蓮長は下人に尋ねた。

「それがさあ、処もあるうに、根本中堂の入り口の柱に突きささっておりますので」

「ええっ！」浄念の顔色が思わず変った。待つていましたとばかりに、下人は言葉が続けた。

「それだけではありませんぞ、大講堂の柱にも矢文がありました。この堂近く炎上すべしと、それを持つた者は、東塔をふれ廻っております。あれ、あの声をききなさい」

そう言われて、耳をすませば、なにやら騒がしい声が、谷を渡つて聞えてくる。おそらく、その矢文を持つて、東塔をふれ歩いておる喧騒であるらしい。

「どれ浄念殿、その矢文をみせなさい」

蓮長は浄念から矢文を受けとると、じいっと一覽したが、

「さあつ、早く行け」と下人に命令をした。矢だけをもつた下人は、もどかしそうに、

「その文を下せえ」と手を出した。

「これは、お前にやる訳にはゆかぬ」

「でも、その証拠がなければ、ふれ廻つても、なんにもなりません。早く返して下せえ、急ぎますだ」

「何んと言つても、これはやれぬぞ」

「ええっ！」下人の顔は急に青くなつた。

「あんたは何んと言つて名前前の坊さんだ、名を言え、生意気なあつ」

「蓮長という者ぢやが。」

……わあつと言つて、路の木立を揺がすような声が起つて、二、三十人の山法師が長刀を手にして、地響き立てながら駈け下りて来た。たそがれ時の山道にきらめく、長刀の光芒は、身をひきしめられるような殺気がみなぎっている。

「こりや、下人、何を愚図々々しておる。いそげ、いそげ」

と先頭に立つた山法師の一人が、大声にどなりつけた。

「でも……」

下人は蓮長の手にした文を、恨めしげに眺めていた。

「蓮長つ、何故の邪魔だてだ。仔細によつては宥赦はせぬぞ、あの声が聞こえぬか、東塔はすでに合戦の用意が出来上つたとみえる」

先程迄は人の喧騒のみであつたが、今はお手のものの、鐘や太鼓を打ち鳴らして、合図をしておるとみえ、東塔の峰は、耳を聳せんばかりの騒がしさである。それにひきかえて、蓮長が下人の行手をふさいだので、西塔の峰々は静かに襲いせまる夜気に包まれて、もの音一つしないので

あつた。

「われ等は何にを措いても、いの一に、米蔵を守護する僧達だ。言わば一山の精鋭、道をふさぐと為にならぬぞ、汝等学僧も、早々に舞い戻つて、仏像の守護にでもあたれ。今宵、園城寺よりわが山に夜討ちをかけるとの矢文があつたのだ」

「先ず先ず落着かれよ」

蓮長の口調には少し皮肉な調子があつた。

「山法師達は、口を開けば園城寺の合戦のと、毎度言われるが、してこの合戦は誰がひき起すのか」

「言わずと知れた、園城寺の奴ばらだ」

気負い立つた山法師が異口同音に叫びたてた。

「そうとも限らぬぞ」

と蓮長はきつぱり言つた。

「なんだと」

「たわけっ」

「気ばし狂つたか」

怒り狂つた山法師が、蓮長に投げつけた言葉である。

「名物の山法師も、事がなければ、その威かめしい格好で、叡山をわが物顔に、押し歩く訳にもゆくまい、そこで態々、人騒がせをする愚人もたまには出てこよう、平穩無事が続けば、貴僧達が侮どる、口舌の徒の学僧達に頭が上らぬ、そこでたくらむんじや、わからぬか、この道理が……今でもこれをほうっておけば、一山をあげての合戦の準備、準備が出来上れば、勢の赴く所手をこまぬいて討たれるのをいさぎよしとせず、軍勢を山下にくり出して、今宵にも園城寺へ、当山より夜討ちをかけるであろうが、蓮長この叡山にある限りはその愚拳は敢えてさせぬぞ……まあまあ暫く聴かれい。貴僧達は経巻を手に持つひまもなく刀剣を握ぎるのを誇つて、われこそ叡山を守る者だと自負しておられるが果してそうか。請う一考せられよ。山を降りて、京の街の人々をみたまえ。天台法華宗の話に耳を傾けるものは一人もなく、今や、念仏や禅宗が、人の心を奪つておるではないか、その時にあたつて、仏飯をはみながら、法衣を着しながら、わが法義を研鑽するでもなくいたずらにわが山を尊しとし、伽藍の壮大を誇り、これを護持するのに刀杖弓箭をこととするのは如何なものであろうか」

一群の山犬の呻り声のような無気味な声を上げて、山法師達は、じりじりつと蓮長をとり巻いていた。すすきの穂にとりかこまれた石地蔵のように、蓮長の周囲には山法師の長刀がきらめいていた。

「これは幸い、もつともつと蓮長の近くによられたがよい。よく御覽ぜよ、この矢文の紙はな

あ、叡山独特の山法師が、谷川で手すきの紙じや、園城寺の僧徒が叡山の手すきの紙を用いて矢文をするかしないか、ようく考えてことを運ぶがよい。その仔細は、先程の下人が知ってる筈、あの下人を糺明してみるがよい」

「居ない、居ない」

山法師達は、あわてて四辺を探がし始めた。

山道の遙か下の方に、下人の嘲い声か、山彦か、

「うわっ……はっはっ」

と聞えていた。それとも夜鴉であろうか……。

大講堂

一

聴講生三百人といわれる俊範上人の講義が終った直後の叡山の犬講堂の中は、今までの静けさを破つて、急に騒然たるものがあつた。

「ああ、上人の講義もよいが、退屈だよ、毎日毎日科文の筆写だけじゃ、くさくさする」
「馬鹿なことを言うな、老僧がわれわれをあかすまいと、しやれなぞ使つての講義振りありがた
いと思わぬか」

まだ講義の写し残りを、筆記しておるらしく、机に向つておるのがどなり返えた。

「お主のような紙魚の徒輩は黙つておれ、大体が仏の教えは生きておる人間を相手にしての教えの筈じゃ、だから聴いておつて面白いのが当然だ、それが眠くなつても一向に面白くはない。これは誰の罪か知つておるか、それはなあ、お主のような学者という徒輩が、科文や科註などとい

う厄介なものをでっち上げ、経文にもないようなむずかしい熟字を考案してわれわれを苦しめるとともに一向に興味のないものにしてしまったんだ。経文よりも解釈の方がむずかしいというへんてこなことが、平気で横行しておるんだぞ」

講義を終了した俊範上人が大講堂から姿を消すが早いのか、いの一歩に、筆硯をかたづけ始めた学僧の一人が、大講堂の天井にこだまするような声で言い放った。

「はは……面白い理窟もあるもんじゃな」と、筆記の整理をしておる他の学僧がそれに応じた。

「そんな怠け坊主は大乗の器物ではないぞ、由緒あるこの叡山の講堂の席が汚れるわ、そんな坊主は小乗の經典でも読んでおれ、自坊に寝ころんで四分律でも読んだがよい。面白い經典ならいくらでもあるわ、しかしそれはなあ、子供にきかせるお伽噺だ。大人になっても、黙っておとぎばなしが聞いておれるか……まあ智能の問題じゃなあ、高い智性を磨くには高遠な哲理がいるのじゃ、自己の智性の低さを忘却して、深遠な哲理を嘲笑する、それが伝統を誇る叡山の学僧がとるべき態度か……」

「相変らず悟ったようなことをぬかす……東塔の学僧弁達一問ゆくぞ」

弁達と自ら名乗った学僧はきつと大講堂の一座を睨み廻わした。これは、常々俊範上人の講義が七六か敷いと、講義が終わる度毎にど鳴り散らしておる学僧であった。

「よろしい、西塔の学僧信海返答をいたそう、何んなりと問え」

稲妻のような殺気が、大講堂のうちを圧した。筆硯を書籍の上に載せて、机の上を整理した信海が、やおら弁達の顔をにらみつけた。

大講堂三百人の学僧達も今は銘々の私語をやめて、弁達、信海の一問一答に耳を傾むけ始めた。静まった四辺の中に、今は仏前の燈明のみが、いそがしくまたたいている。

「仏の教は誰が為にあるのか、先づ答えよ」

「一切衆生の為……」

「ようし、その一切衆生は皆高き智性を有するか」

「無論、智性は等しからず、高きも低きもあるわ」

「しからば、たつた今、高き智性を磨くためには、深遠なる哲理を要するとの貴公の言葉は、矛盾だぞ」

「何故、言葉自体には矛盾は毛頭ない」

「言葉には無い、しかし一切衆生と関連させれば、大きな矛盾が生れてくるぞ、智者は少なく愚者は多いのが一切衆生だ。仏の教が深遠なる哲理とすれば、少数の智者のみ救って、大多数の愚者は救われない道理ではないか、仏の教えは、そんなへんばなものか、信海どうじゃ……」

「弁達、叡山の樹木はもとから大木か……否、叡山には大木と小木と、いづれが多いか、如何ん……」

「勿論、小木が多い」

「小木は大木にならんものかなあ」

「論題の的をはずして、何を聞きおるか、信海参つたと言え」

「小木は天の三光風雨、山の生氣によつて、何時となく大木となる。小木は小木に何時迄もどまるものではない、大木になることが樹木本来の念願であり、生命の赴む処だ。天の三光山の嵐気よりいえば、みな等しく山の樹木であつて、いずれの処に樹木の大小があろう、即ち、仏の慈眼よりみれば智者も愚者もないわ、聖愚ともに救おうとするところに深遠なる哲理が要るのじや、智者を智者として救い愚者を愚者とたばらかして救おうとするならば、左程むずかしいことは要らぬ。この有智無智ともにあるのが一切衆生であり、その一切衆生をみな等しく救おうとするところに、大乘の深遠なる哲理が存在するのだ、どうじや、弁達参つたと言え……」

どつという、きよう笑が学僧の口から上つた。それは弁達参つたといえという修海の口調が、先刻の弁達の口調をまねたので思わず一同が笑つたのであるが、弁達は己の所論が笑われたものと誤解して、かつとなつて一段と大きな声でど鳴り上げた。

「大乘の深遠なる哲理などと、思い上つた気持でおるから、この叡山独りとり残されて行くのじや。信海、汝の居る西塔では京の街が見えんから、そんなのん気なことを言っておられるのだ。四明嶽に立つて、夜の京の街の灯を一度眺めてみるがいい。其処には、人が生きておるんだぞ、

金が欲しい、食い物が欲しい、女が欲しい、という人間がうようよ生きておるんだぞ。誰も智者になろうなどと願うものは其処には一人もおらんのだ。その中に立って汝のいう所の高遠な仏教の哲理という奴を説いてみる、誰が耳を傾けるか、恐らく一人もおるまい。叡山の山頂に諸法実相を観じて、一心三觀の月をみておると自惚れておる坊主などは、京の街では一日でも生かしておいてくれぬ生きた人間が棲んでおるのだ。汝の頭の裡には、所謂、昔の高徳の僧侶、昔の学者、そんな連中の言葉だけが一杯に詰っていて、何にかと言えば、その連中の言葉を借用して威厳をつけたような、珍文漢文の法門をまくしたてておるが、それでは生きた人間は救えぬのだ、死んでしまった人の言葉のみで生きた人間が救えるとも思っておるのか。みよ、みよ、われわれが叡山のみを仏教の最高の学府として誇っておる時、京の街では、天台法華宗をくさす念仏が、真言が、禪が、今流行しておるではないか。高遠な哲理などは、誰も必要としていない。手っ取り早い利益を願う真言宗、どんな悪いことをしても、一ぺん南無阿弥陀仏と唱えれば、極楽往生疑いなしという安易な念仏が、一切は空だ執着をはなれよという簡単な禪宗が今流行しておるのではないか、この状態をなんとみるのだ。これらの新興宗教の流行は、わね等叡山の学僧には、何ら関係のないことと断言するか、わが叡山の掟、研鏡十二年の目的は死んだ学者の言葉を記憶することか、生きた人間を濟度することか、どうだ、どうだ

弁達の声のみが大講堂に鳴り響いていた。

「弁達殿、貴僧の所論仲々に面白い、ついでには少しばかり尋ねたいが如何」

三百人の学僧を前にして大講堂に人無きが如く滔々と述べたてていた東塔の学僧弁達は、意氣正に当るべからざるの態である。

「無論のことよ、名を名乗つてから問われよつ」

「西塔の学僧蓮長、質問ではないが、示教を願う、先刻の論中に、われ等叡山の学僧連が山頂に一心三觀の月を觀じておると自惚れておる時、京、鎌倉にては真言、禪、念仏が大流行といわれたが、これを是と見るか非となすか」

「是もなく非もないわ、はやるものはやるだけよ」

「はっはっはあ……」

「なにを嘲う、無礼な奴」

怒り心頭に発した弁達、蓮長と名乗った学僧の顔を睨みつけた。

「その言葉、是非はわからぬというに似ておるので思わず失笑した。許るされよ。では、それらの教を信ずるや否や、そのご返答を伺いたい」

「信も不信もない。弁達のいう所は、天台法華宗をくだすこれらの宗旨が、日本六十六か国に充滿しておる、これに対して、叡山三千人の僧が、山上より拱手傍觀しておるのを歎いておるのじや、蓮長、わかったか」

「わからぬ」

「えつ？」

「わからぬぞ、貴僧の心中まことに解せぬ、貴僧なんのために仏飯をはんでおる。只々慨歎して、それに対して是非を論ぜず信不信も表明されぬとは、まことに道念あるに似て実は全く道心なし。すでに天台大師は法華玄義に「經文と合せば録して之を用いよ。文無く義無くんば信受すべからず」といい、開山伝教大師は法華秀句に「仏説によつて口伝を信ずるなかれ」といわれて、われ等が信不信の尺度を示されておる。また、是もなく非もないわと、うそぶいて、仏法に是非を論ぜぬとあれば、何故わが叡山の開山伝教大師が、高雄寺において、桓武天皇の御前に、三論、法相、華嚴、俱舍、成実、律の南都六宗の学者を平伏せしめて、わが叡山に大乘円頓の戒壇を建立せしめたか、如何。延暦寺円頓の戒壇こそは、仏滅後一千八百余年の長い間、印度支那一閩浮提になき靈山の八戒、日本国に始まるものである。故に伝教大師はその功を論ずれば竜樹天親にもこえ天台妙樂にも勝ぐれたる大師である。わが叡山は三塔十六谷の廣大を以つて誇るにも非ず、僧徒三千人の数をもつて他に望むにも非ず、これひとえに伝教大師が仏法の是非を正し

て、現に大乘の戒壇を建立したるが故である。しかるにこの山に住んでその末輩が仏法の是非も表明出来ず、信不信もいわれぬとは、ちと受けとり難い所論ではないか、弁達殿」

さすがの弁達も核心をつかれて、その場にへなへなと着座した。三百人の学僧は蓮長の道理ある言葉に暫し肅然たるものがあり、蓮長独り大講堂の裡に悠然と佇立していた。

「蓮長、質問」

「応う」

「東塔の学僧浄念」

名乗つて隅から座を立つたものがおる。

「貴僧のいうが如き一閻浮提第一戒壇所在のこの叡山が、何故今は昔日の面影を失い、京、鎌倉の人心より離れて、伽藍の壮大と山の曠大のみを僅かに誇らねばならぬのか、天台法華宗を念禪真言の徒輩が卑やしむ理窟は、何処より来たつたのか、所以如何に」

「城主城を破ぶるの譬がある。叡山衰微の根元は、今流行の三宗の力に非ずして、実は遠く叡山の座主それ自身が招来させたのだ」

蓮長のこの言葉は、一座を動揺させるに充分なものがあつた。

「暫く静かにきかれよ。叡山の第三祖慈覚大師は、弘法大師の真言興行の隆盛をみて、つらつら思うようは、伝教大師は唐にあること僅か一年なれば、真言を研究するの暇がなかつたのであ

ると秘かに思い、自分は唐にあること十か年、ついに真言宗は天台宗に勝れたりとの邪念を抱いて帰朝せられた。しかして伝教大師の建立せられた此の延暦寺中に、態々総持院を別に建立せられて、大目如来を本尊とせられたことは列座諸公の知るところであろう。この御本尊を前にして、善無畏三蔵の大日経の解釈にもとずき、金剛頂経の解釈七卷、蘇悉地経の解釈七卷を著述し、伝教大師が仏説によつて法華経第一也としたのに対し、これは私の意を以つて、他人の経文の解釈にもとずいて真言を第一なりとし法華経とは天地雲泥也とせられたのである。しかるに慈覚大師はこの論定を私の意ではなく、善無畏三蔵の大日経の釈に依れるもの也と思われたが、なお二宗の勝劣に不審があつたのであろうか。自分の著述を大日如来の御仏前に奉納して七日七夜祈請を営んだが、満願の夜、日輪を自ら弓を執つて射るにその箭日輪に當つて日輪転動すと夢をみて、この著述深く仏意に適うも也と覚悟して、後世伝うべしと大いに真言宗を弘めたのであつて、今日日本国に真言大流行の端をつくつたのである。しかしながら列座の諸公、よく聴かれよ

蓮長一段と声を大にして論を続けた。

「この夢によつて慈覚大師は真言は法華に勝るとされたが、内典五千七千余卷、外典三千余卷の中に、日を射ると夢をみて吉夢也とする証拠があるのであろうか。昔印度にては阿闍世大王は日の落ちるを夢にみて仏の入滅を知り、支那においては、殷の肘王は常に日を射てわが身を滅ぼ

し、また本朝においては神武天皇御東征のみぎりの故事を思えば足りる、日本国とは天照大神の日天にまします故である。日輪を射る夢が果たして吉夢であろうか。この道理を学僧三百人の中に破するもの一人でもあるであろうか……」

三

「蓮長つだまれっ」

三百人の学僧、黙念としてさしも広い大講堂、人無きが如くであつたが、突然怒気を含んだ声が爆発した。

「だまれだまれだまれ、汝がいう如く、先師慈覚大師の日輪を射るといふ夢はたとえ凶夢なりとしても、慈覚大師は直々に伝教大師にあい奉つて、相伝を受けた尊いお方である。しかるに汝は四百余年の後に生れて勿体なくも慈覚大師を云々する資格がおるか」

「……ならば尋ねるぞ。慈覚大師の口伝真実ならば、伝教大師の御釈は無用と言うか。汝は経文をすてて四依の菩薩につくと断言するか、父母の譲り状をすてて口伝を用うべきか否や」

名も名乗らず、ただうっ憤晴らしに放つた一言とみえ、蓮長の反問に答える声はなかった。

「かくて慈覚大師は法華に勝るとして、この叡山に真言宗を許されたのである。弘法の門下が真

言宗は法華經に勝ると立てたならば、わが叡山こそ強敵であつたらうになんたることか、座主自身が叡山三千人の僧侶の口をふさいで、仏教にもよらず、又開山伝教大師の積にもよらず凶夢を根元にして、真言は法華經に勝ると立てられたのである。而してその後を受けて四祖となつた智証大師は、慈覚大師の論を更に進め、即ち慈覚が理同事別の論を進めて理同事勝を主張し、はつきりと真言宗は天台宗に勝ると論断されて、今の三井寺に天台喜言を創立せられたのである。思うに、念禅真言等の三宗が、印度、支那、朝鮮なぞの余国において弘まるならば、敢て不思議とはこの蓮長もせぬ。しかるに此等の三宗が今堂々と流行しておると、諸兄等は騒ぎ立てて今日この大講堂の論義を湧きたたせたが、既に諸兄も先刻承知の如く、開山伝教大師が南都六宗の僧侶を、法華經の最爲第一の經文をもつて、これを帰伏せしめて以来、わが叡山は日本仏法の中心となつたのである。故に、わが叡山の僧侶達が賛成しない限り、念仏も喜言も禅宗も、わが日本国に弘まる道理がないのである。しかるに上一人より下万民に至るまで、真言宗は天台宗に勝ぐれたり、と思わしめたものは、なんぞはからん、叡山の慈智両大師ではなかつたか、論破いかに：つぎに禅宗流行の根元心悲しいかな、またこの叡山にあるではないか、即ち、叡山第一の古徳安然和尚は、教時浄論に、第一真言、第二禅宗、第三天台法華宗、第四華嚴宗等々と書かれた。叡山以外の処よりこの論が出たのであれば、何人も一顧の価値を認めないであつたらうが、いやしくも仏法の中心地仏教の最高学府たる叡山の先輩と仰がれる人が、宣言、禅が法華經よりすぐ

れたりと認めたのである、禪宗が日本国に充滿するも道理ではないか……」

「待てつ蓮長、汝は気安くもわが叡山の先師慈覚大師、智証大師、古徳安然和尚の故事を引いて、人もなげにこれを論難す。僧の本分にもとるぞ、先師先輩に対する礼を失しておるわい。畢竟汝が信の足らざる証拠じゃ。学問の道場たるこの大講堂の裡じゃから、自由な言論も暫く許さう、だが学を励むもよいが、僧の本領たる信を忘れるな」

「如何にも、信こそわれ等の根本、仏に對する信こそ蓮長をして斯く言わしむるということを知らぬか。しからば貴僧は慈覚大師、智証大師、安然和尚は釈迦多宝十方の諸仏より勝れたりとするか、どうじゃ。いま日本国王より民一人にいたるまで、仏の御子であろう。その仏最後のご遺言に、法に依つて人に依らざれと戒められておる。法華經を第一となすは法によるのであつて、蓮長の言葉ではないわ、開山伝教大師も、その御遺戒を守つて、法華最第一となして、この叡山に自ら書写の法華經を埋めて一乗止観院、われ等が延暦寺を建立せられたのである。慈智両大師安然和尚を、開山伝教大師よりもすぐれ、釈迦多宝十方の諸仏よりも勝れりと思う道念の僧侶がこの大講堂の裡に席をしめるとは、近頃面白いことよ、名を名乗れ、大講堂論議の掟じゃ、いずれにおるか、その御僧侶」

無論名乗りを上げる程の学僧ではなかつたとみえて、蓮長の言葉のみ大講堂の裡にびんびんとこだましていた。

うす暗くなつた室内、悠然と立つ蓮長、心あるものには、開山伝教彷彿と此処に來たつて、叡山の雜亂をなげくかに思えた。

「さて、五十年この方の念仏宗の流行を学僧諸君はなんとみるか。釈迦の指を切つて弥陀の木像に変えるのが近頃寺々の流行じや。京、鎌倉は無論のこと、日本六十六か国辺土にいたるまで、弥陀三尊を祭の念仏の声のみあつて余宗は有つて無きが如き状態、この根元もあさましいかな、わが叡山よりこと起つておるではないか、叡山十九代の座主良源慈慧大師がその緒をなした。座主良源は与えて言えば慈智両大師の真言雜亂を正して教学を一変し、開山伝教大師本来の法華經中心の正系に復したとは言えるが、奪つて言えば、天台大師の真意を汲みとれず却つて念仏法門の登場を促した。即ち座主良源の弟子慧心僧都はその志をついで、往生要集を著述して、大いに念仏の義を唱えたのである。

しかるに往生要集世に現われて二百十四年後の建久九年、叡山に学んだ後輩の僧たる法然が、慧心僧都を自らの先輩として、更にその往生要集を基として選択集一卷をつくつて、浄土宗一門の要書となしたのである。これに依つて浄土宗の念仏一世を風靡し称名念仏の声は都鄙に遍ねく、余宗は拱手傍觀のていたらくではなかつたか。この時にあたつて、わが叡山の僧侶は何をしたか。仏法の道理をもつて、南都六宗の僧侶を帰伏せしめたる伝教大師のこの叡山にすむ学僧達が、邪正の対決を法然に迫ること一度もなく、今を去る十九年前の嘉録二年六月、法然の死後十

四年、叡山の威勢をもって勅を強請して、法然の墓を大谷に破却し、死骸を鴨川に流して快哉を叫び、選択集の印板を、今諸兄等が蝟集しておるこの大講堂の前において焼き捨てたのではなかったか。この暴力によって念仏は鳴りをひそめたが、耳をすませばわが叡山すら、その念仏の声が聞える。大講堂三百の学僧その声が聞えぬと言うのか」

満堂寂として声なく、蓮長の頬に、涙が、一筋二筋きらきら光っていた。

仏を売る人々

延暦二十一年二月十九日伝教大師が南都六宗の寺々の僧侶と、桓武天皇の御前に公場対決して、法華經こそ仏説中の第一の經典なりと、当時の仏教界に認めせしめ、その証拠として比叡山に大乘の戒壇を建立してここに四百有余年、今は過去のものとなった。奈良の寺々はその後どうなっておつたらうか、これを探ぐるのも無意味ではないと、叡山の学僧たる蓮長は、或る日一日の暇を得て、古都奈良に古き寺、古き仏を求めて漂然と旅立ったのである。

それは、治承四年平清盛が平重衡をして東大寺、興福寺を焼かしめたが、源頼朝が鎌倉に幕府を創設すると建久六年に東大寺を、その前年に興福寺を再建して、国内に鎌倉幕府の威力を誇示してより五十年後の、時は寛元四年の青葉の頃であった。

ここは興福寺の境内である。大きなむくの樹が亭々としてそびえておる。その樹の下で見物人を前にして説明しておる老母がある。

「治承四年の十二月、この興福寺が焼討ちになった時でございます。その時の煙が御覧なされ、

あの樹のうつろの穴にはいりまして戦さが終わった後で、生残った興福寺の坊さん達が、これを消そうと思ひまして、水を穴に入れましたが、くすぶっていて中々消えませんが、その後度々水を汲んでいれましたがどうしても消えませんが。余り面倒なのでその後は水をかけたり、かけなかったりしておりましたが、不思議なことには七十余日を経た養和元年閏二月四日という日に、ぴつたりとその煙が絶えました。ちょうどその日こそ太政入道平清盛殿が亡くなられた日でございます。入道殿は御存知の熱病、百人の人夫が追いつぎ追いつぎ比叡山の千手院より水を汲んで石の船にたたえて、その中に這入って冷やしましたが、水は湧き返って湯となればこそ、その苦痛は更にやむことなく、あたあたという声は、屋敷の門外にまで聞えたということでございます。そのあたあたという悲鳴がやんで命のなくなった時こそ、このむくの樹のうつろの煙が消えた時でございます……」

「今はこれこのとおり枝葉が繁っておりますが、なんとまあ、仏罰は恐ろしいものではございませんか」

思えば治承四年の十二月二十八日、平清盛は東大寺、興福寺の大衆が、日頃より自分の命令に従わぬのに業をにやして、平垂衡をして三万余騎の軍勢をもってこれを攻めさせたのである。

東大寺、興福寺は藤原氏の庇護によつて今日あつたのであるから、平家が政権を執つたのは心よく思つてはおらなかつた。よつて何にかにつけて平家の命令に従がわなかつた。その仔細を公

卿を勅使に立てて問えば、

「別に変った仔細はない。只々清盛という法師に逢いたくない、名前も聞きたくない」ただそれだけのことであると言う不遜な返答であった。

ここにおいて平清盛は奈良の僧達を威令をもつて屈伏せしめようと、備中の国の住人妹尾太郎兼康をして数百騎の兵を引いて奈良に下らしめたのである。

しかるに意気当るべからざる奈良の大衆は、却つてこれを殲滅して、兼康が家の子郎等の頸二十六を斬つて猿沢の池の淵に懸けた。兼康はほうほうの態で清盛の許に馳せ、面目なげに仔細を報告したのであった。

烈火の如く怒つた平清盛は、仏法も糞もあるものかと、平重衡をして三万余騎の軍勢をもつて東大寺、興福寺を焼打ちせしめた。

大仏殿に焼死したもの千七百余、興福寺にては五百余人、在々所々の坊主堂舎にて二百余人、戦場にて討死の僧侶七百余人都合一万二百余人という。重衡は切りとつた三百の西瓜頭をもつて平清盛に軍功を誇らんとしたが、その惨状は平清盛の耳にも入つておつたので、その議に及ばずということになり、穀藏院の南の堀は此等一万数百人の死骸をもつて埋め尽したという程であった。

清盛によつてこれ程までに荒廃され、春日野の草の露、魔滅の灰に色替われりといわれた東大

寺、興福寺も、頼朝が鎌倉に幕府を樹立すると、その命によって十五年後の建久六年には見事に復興したのである。

聖武天皇は自ら「三法の奴僕」と称し、華嚴法蔵の壮大さを僅かながらでもこの地上に示そうと、この大仏を創建せられたが、頼朝の両寺復興はそんな気持からではなかった。

清盛が焼打ちをしたからこれを復興修理して、鎌倉幕府の権力を世に示したまでのことである。すでに金銅の大仏には人を救うという力はなくなっていた。復興された大仏殿をみて、それに魂の救済を訴えるものとてもなかった。

人はその大仏殿の東西二十九丈南北十七丈高さ十五丈という豪壮な建築物に頼朝の威光をながめてお上の力のすばらしさを見るだけであった。頼朝の意図した所もまたそこにあった。それさえみてくれれば充分であったのである。

故に、頼朝の命によって大仏殿建立となった時、当時名声の大いにあった法然上人は大勧進を請われたがこれを態よく断つて、俊乗房重源を大勧進に自分の代りに推挙し、重源が大仏殿建立の大命を拝した。然し法然上人は重源を戒めて、

「相構へて御房大あかがねにくはれて、一大事の往生忘れるべからず」

といわれた程であるから、これをもってみても、壮嚴を誇る大仏も或る意味からいえば、単なる大あかがねにすぎず、仏教本来の目的たる人の魂を救うなどという価値は当時すでになかった

といえるのである。

蓮長は興福寺の境内を歩き、今また大仏殿の前に佇立して感慨無量なるものがあつた。

帝王が三宝の奴と自ら土下座した三国にも比類なしといわれる五丈三尺の金銅仏も、人移りもの変われば、これは天下をとつたものが、その権勢を庶民に誇示する一つの道具にすぎないではないか。またそれに甘んじて寺も生きておるのである。

南都の七大寺たる東大寺、興福寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺の寺々には古き仏を祭り古き寺の歴史を誇るが、一番大切な人の心の動きには全く無関係であつた。

参詣するものもその寺が何宗に属しておるかを知る人は少なく、それも参詣とはいえず見物と呼ぶべきであつた。

寺も見物料を生活の資としておるのである。

仏を売つて生き、仏を拝観させて生きてゆく、まことに大集経にいう五箇の五百歳中の、多造塔寺堅固時代の残物をここにみた。

「仏説に言う末法に入つて百有余年今こそ……」

蓮長の胸には言い知れぬものが去来することしきりであつた。

四明嶽の月

叡山四明嶽に、腰をおろして、月をみる一人の僧があつた。

建長五年の早春である。折から夜霧がむくむくと脚下より湧き起つて、今までみえていた京の街の灯も、みえなくなり、月光を川面にすつて、一条の銀蛇の如くみえていた鴨川のうねりもやがて、霧に消されてしまった。

みえるものとしては、天空の月一つ、月明に星さえみえぬ夜であつた。

月に対して黙想する、その僧の姿は、傍観すれば、古淡な一幅の名画と言えようが、その人の脳裡に深く立ち入ってみれば、まさに山上火を吹くの感慨があつたのだ。

二十一歳、叡山に登つてここに十二か年、その間二十五歳の寛元四年には、叡山の宿敵たる三井園城寺に留学して、その宗風をきわめたが、今にして思えば「智証の門家三井園城寺、慈覚の門家叡山と、修羅と悪竜との合戦隙なし、園城寺を焼き叡山を焼く、智証大師の本尊慈氏菩薩も

焼けぬ。慈覺大師の本尊大講堂も焼けぬ、現身に無間地獄を感じり」の所感にすぎなかつたといえよう。一度叡山に帰つたが、二十七歳寛治二年、南都に入つて三論法相の古宗の教理を探り、更に紀州高野山に登つては真言の秘法を究め、帰途には摂州天王寺に寄つて、聖徳太子の教旨を窺ひ、二度び叡山に帰つた。

叡山にあること二年、建長三年三十歳の時、再び山を下つて京洛の地、教王護国寺（今の東寺）御堂の仁和寺に入つて不審を正し、傍ら儒典、国学、書道等の各大家の門を叩いて三度叡山に帰つた。

それより二か年、叡山にあつたが論議の勇将たる学頭として、東塔、西塔、横川の三塔を押しつていた。

今四明嶽に月と対して、現在の十宗を端的に批判するならば次の如しだ。

俱舎宗は、過去の小乗教。

成実宗は、大乘小乗混合して明白なる誤りがある。

律宗は、もとは小乗教であつたが、中頃は権大乘教今は自分自身で大乘教だと錯覚しておる宗旨。

法相宗は、もとは権大乘の中の浅薄なる法門であつたが、次第に増長して、他の大乘教を打ち

破ることが出来ると思っておる、謀叛人平将門純友の如き宗旨で、下にいて上を破るものである。

三輪宗は権大乘の空の一分であるが、自分は実大乘だと自惚れておる。

華嚴宗、これは権大乘であるが、他の権大乘よりはましである。摂生関白の如きだが、法華を敵として立てる宗なる故に臣下の身をもつて、大王の位につかんとするが如きである。

浄土宗も権大乘の宗旨であるが善導、法然が、たばかりによつて、念仏をもつて末法の機に適合となし、人心のみを主にして、一代の聖教を否定するという立場をとつている。

禅宗は一切経の外に真実の法ありとなす、これは親を殺して子を用い、主を殺せる臣下を用いるが如きものである。義朝は父と弟を殺し清盛は叔父を殺す、親子、兄弟、叔父、甥の戦いという保元平治の乱に似ておる。

真言宗は道理文証にしかず。承久の乱をみれば分明である。国敵王敵となるものを降伏せしめて、命をとるといふ。十五垣の法を京洛の地の、七大寺十五大寺が修したにもかかわらず、その満願の日に、官軍は敗北し、三院はいけどられて九重は一時に焼失し、三院三国に流罪という、皇国未曾有の出来事を惹起せしめた、これ偏えに真言の罪である。

思うに此等の十宗は、仏の滅後に、天竺、支那の法師、論師が建てられた宗旨であつて、仏の自ら建てた宗旨ではない。

仏もかかる蘭菊の美を競う宗旨の起ることを予想せられたか、涅槃經の御遺言には、

「法ニ依リテ人ニ依ラザレ、義ニ依リテ語ニ依ラザレ、智ニ依リテ識ニ依ラザレ、了義經ニ依リテ不了義經ニ依ラザレ」と戒められておる。

この御遺言によつて、一切經を読むべきであり、滅後の宗見をもつて、一切經を計るべきではない。

經文を先きとして考えたる十二年間の研鑽の結果は、法華經こそ、如来出世の本懷也の一大確信であつた。

しからば、その法華經をもつて建てられたこの比叡山が何故今日のていたらくになつたのであるのかの疑問が湧く。

研鑽十二年、それも解決した。

即ち大集經には、仏滅後の時代を、正法千年、像法千年、末法万年とされて、正法千年を第一解説堅固、第二禪定堅固の二つの五百年に区分し、像法千年を第三誦誦多聞堅固、第四多造塔寺堅固の五百年あてにくぎつておる。末法は万年と規定し、その末法に入つての五百年を、第五闢諍堅固と言ふ。

堅固とは約確にして相違なしの意味であるが、釈尊の滅後、時代は實に大集經所説の如く推移した。

鎌倉に三か年、叡山に十二か年、十五か年間の研鑽の結果、法華經こそ如来出世の本懐也と確信した。その法華經の中には、法華徑が流布すべき時代すら指定されておる。

即ち薬王品に

「我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣布して断絶せしむることなかれ」とある。

後の五百歳とは、大集經に言える第五闢靜堅固の時代を指すのである。

世界史上にも類例のない四百年の長きに渡った平安朝の泰平の夢が、一朝にして破れると、保元より承久三年に至る僅か六十五年間は、これまた、世界史上に無類とも言うべき、一大闢靜動乱の世であつた。

三上皇を流罪して、天下は北条に帰し、干戈劍撃の響きは一時鳴りをひそめたが、承久の乱の翌年より今年二十二年の間、京鎌倉に大地震のあること都合四回、大風等の天変のあること十二回、疾病流行の年が十二年、洵に生あることが不思議とも言うべき世の中である。

法華經流布の時は、惡世末法とある。

伝教大師は法華流布の時を末法の始めといわれて、自身が仏滅後、一千八百余年の、多造塔寺時代に生れたことを歎かれておる。

宣べなるかな、伝教大師の教法は、僅か数年にして断絶してしまつておるのではないか。

法華經の流布すべき、第五の闢靜堅固の時代とは正しく今である。すでに仏の予言せられた末

法に入り、經文の如く法華經の流布すべき時になつておる。然るに禪宗を弘めた榮西、浄土を弘めた法然はあつても、法華經を弘めたものは何処にもない。時は正に至れりと言うべきではないか。

「おう……」

と声をかけて、その人は、海技二千七百二十三尺の、四明嶽の岩上に立ち上つた。

折柄、脚下の夜霧は天上の月もかくして、身はさながら虚空にあるが如く、天上天下ただ我一人ありの觀があつた。

その人とは、仏滅後二千百七十一年に生れたる、末法の大導師たるべき、日蓮大聖人の若き日の姿であつた。

旭の森

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

建長五年四月二十八日、

所は、房州清澄山の頂きである。この題目の一声一声に樹海の彼方、水天彷彿たる処より、今、日輪が昇って行く……。

昔釈尊は成道の砌り、三・七日間、天地法界を相手にして説法をされ、自らの悟りを開陳されたという。蓮長もまた、天地法界を対告衆として、己れが十五か年間にわたる仏法研鑽の結果を南無妙法蓮華經の七字に結要しての説法であつた。

七日間の禅定を終つた蓮長は、満願の日たる四月二十八日、まだ夜の明けざるに清澄山の頂きに登られた。

釈尊は暁の明星いずる頃に大悟徹底せられたと伝えられるが、その明星が次第に影うすれて、水天一髪の処に、日輪の片影をみる時、清澄山上、朗々たる題目の声が、しずもる樹々の小枝に響き渡つたのである。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

蓮長の題目がこの日輪を昇らせてゆくか……。

日輪が、六尺三寸堂々たる体軀の蓮長の口を開かせたのか……。

それはいずれでもよい。

「日蓮を恋しく思わば、日輪を拝ませ給え、時折影を映すべく候」

とは蓮長が後年の述懐である。

日輪と蓮長、彼此区別なく混然一体たるの境地であつたのだ。

みよ！

今は水平線上に、その円体を現わした日輪は、円周の静に反比例して、その中心は、たぎり立ち、湧き立ちおどり狂うかのごとき、灼熱の球体である。蓮長の唱うる題目もまた然り……満山

を圧して、朗々たる清涼の響きこそもつが、これを唱うる蓮長の胸裡に一度直入してみれば、やはり、たぎり立ち、湧き立ち、おどろ狂うの動的な境地であつた。

仏滅後、二千二百二年の今日、四月二十八日こそ、仏が予言せられた法華經にいうところの、「斯の人」が、世間に法を説くの第一日であつたのである。

『斯の人世間に行じて

よく衆生の闇を滅す』

とは法華經神力品の掲文である。仏滅後二千二百二年の間、何千何万の僧侶がこの法華經を読んだことであろうか。だが、だれ一人この二行の掲文を、否「斯の人」というたつた二字を読み得なかつたのである。

僅かに天台伝教の両大師が、法華經は末世において流布するであろうと予言されておる。だが然し、「斯の人」とは如何なる人であるかは知り得なかつた。

両大師が末法に於ける、法華經流布の予言も、奪つて言えば、学説でもなく、法華經の説である。その説をそのまま説明したに過ぎないのである。

今の蓮長の気持から言えば、天台大師も伝教大師も最早頼みにならぬ、驚天動地の境地に到達して叫ぶ処の、それは、

南無妙法蓮華經

であった。

「このこと日蓮たしかに、教主釈尊よりまのあたり、靈鷲山において面授口決せり」と言う、天台伝教迦葉阿難等を遙かに飛躍しての境地において唱える、

南無妙法蓮華経

であった。

実行の面において言うならば、天台も伝教も亦八宗十宗の祖師方も、およそ仏道に志した何千萬の人々が未だ曾て歩まざる、茨の道をゆかねばならぬのであった。「日本国に此を知れる者日蓮一人なり、これを一言も申し出すならば、父母兄弟師匠に国主の王難必ずきたるべし」と覚悟して唱える。悲痛なる

南無妙法蓮華経

である。

おもえば、天福元年五月十二日、蓮長は当時十二歳、善日麿と称して稚子髻姿のいといしい児童であった。父親に伴われて、千光山清澄寺に、出家得度しようとして山に登る道すがら、

「父上、善日麿はうんと勉強して、うんとえらい坊様になりますぞ」

と言った時、父親の貴名次郎重忠が、善日麿を諭した言葉があった。

「善日麿よ、よう聴いて忘れてはならぬぞ、日本にはえらい人は沢山おるのだ。又歴史上にもえ

らいと言われる人々は、数えきれぬ程おる。たが、正しいと言われる人、正しいと言われた人は、まだ一人もおらんのだ。だから、磨は、えらい人になろうなぞとは心掛てはならない、ただただ正しい人になれ、日本第一の正しい人と、人にも言われ、自らも言える人になることを心掛ければならない」と言われたことがあった。

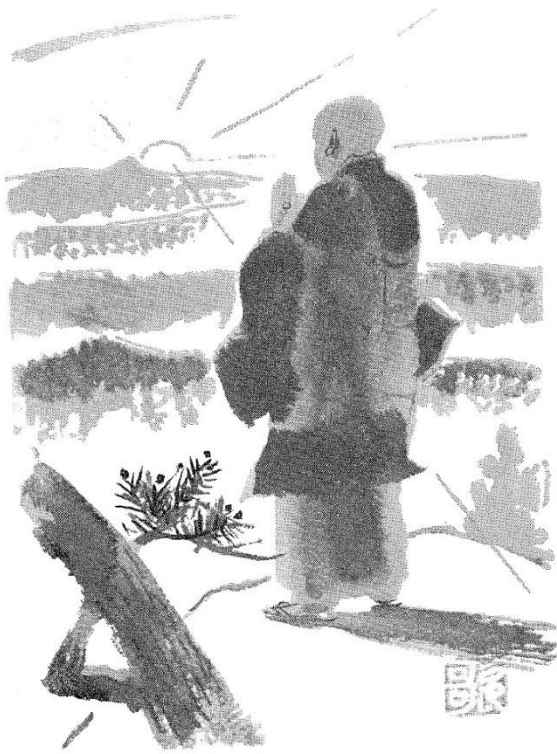
正しい人。正しい人。

今この正しい人に蓮長はなつたのである。しかして仏法における最も正しい叫び声は、

南無妙法蓮華経

より外にはなかつたのである。だが然しこの正しい人が行くべき道は「但日蓮一人許りこのことを知りぬ、ありのままに申すならば死罪となるべし、たとい死罪は免るとも流罪は疑いなかるべし」と言う苦難の道であつたのである。

大洋の一線上より出て虚空にかかること四五寸の日輪は、あの海よりおどり出る時の真紅の色を、平静の白熱に戻して、今は万物育成の母なる静かな姿に変わっていた。題目を唱えること数十遍、清澄山頂を下る蓮長の姿は、凡眼には何等変化心ないが、実は、「末法に於て仏とは凡夫なり」の確信を胸中に秘しておるのであった。



兄弟子の浄頭房、義浄房は、待っていたこの説法の座に列して、にんやりと会心の笑みを含んでいた。

何を言ひ出すかと緊張している、浄円房、円密房、円智房、実成房等々の先輩の顔。地頭の東条左衛門尉景信が従者四、五名を引きつけて厳然として着座している。山の麓の旦徒も、自分達の寺から地頭様さえ、わざわざ聴聞にくるような、立派な坊さまを出したことを誇るような顔付であった。

莊重な経文の読誦が終わると、ものやわらかい蓮長法師の声が続いた。

「十二か年もの長い間、この山を留守に致しましたので、私をお見忘れになった方もあるかも知れませんが、私が蓮長でございます。師匠道善御房並びに一山の諸先師諸先輩の御理解または、地頭東条左衛門尉殿以下檀徒の方々の並々ならぬ御後援によりまして、叡山十二か年の学生としての生活をつつがなく終了いたし、今般このなつかしい千光山清澄寺に帰山致した次第でございます。

都の生活は、ここ房州の日々毎日とは大いに異なりまして、珍らしい土産話も多々ございますが、そのような話は一切この講座では遠慮いたしました。鎌倉に三か年、叡山に十二か年、計十五か年間、何を学び何を感得したかを、御報告いたすことが、皆様の一方ならぬ御厚意に対する御報恩と思つて者でございます。

さて先刻拝読致しましたのは法華經寿命品の首文でございますが、何故本日この寿命品を拝読いたしたか、また「汝等あきらかにきけ如来の秘密神通の力を」と拝読せざるを得なかつたかを申し上げれば、ここに十五年間研鑽の結果を御報告いたすも同然なのであります。

私こと十二歳にして善日曆としてこの清澄山に登り十六歳の時、道善御房より、是生房蓮長と名を賜つて出家得度致しましたが、その頃より一つの疑問を持ち始めました。その疑問は年を経るに従つて成長し、いろいろと山内の先師先輩に問いたしましたが解決いたしません。「年をかされればおのずと会得する」これが皆様一様の答でありましたが、それでは自分で納得いたすことができませぬので、先ず始めに鎌倉遊学三か年のお許しを得て勉強いたし、更に十二か年、皆様の御後援を得て叡山に遊学いたし、その間、園城寺、東寺、高野山、四天王寺等々に学んで今日に至つたのであります。

では、その疑問を解決し得たかと、皆様は反問いたすであります。蓮長ござかしきことを申すようであります。胸中に不安を持してこの講座に登り、脳裡に疑問を蔵して経文を誦する者ではありません。では、蓮長をしてこれ程までに苦しめた疑問というものは一体何んであつたでしょうか。

釈迦一代の教えにもかかわらず天台真言禅念仏等々、十指に余る宗旨宗派が、皆われを是とし彼れを非とするの不思議さでありました。仏教に志してこれを疑問とせざれば外に疑問はありま

せん。

これは何故かと各々の宗派宗旨を悉くたどりました処が、一つの共通な原因を探ぐりあてたのです。

それは各宗の祖師といわれる方々が、御自分の意見をもって經文を拝読しておるのであります。これによつて宗旨宗派を建てておるのであります。宗旨宗派の奥底をきわめましても、それはその宗の祖師元祖の心持であつて、仏の真意ではないと会得いたしましたので、改めて一切經に私心を去り公平の心をもつて、仏様の説法の順序に従つてこれを漸次に研鑽いたしました。

しかるに法華經の開經である、無量義經に
「種々の法を説くに方便力を以てす。四十余年未だ眞実を顕わさず」とありました。

この經文を皆様はどう思いますか、釈尊は三十成道以来七十二歳にしてこの無量義經を説いておられます。

してみれば、とりもなおさずこの無量義經以前の經文は聴衆の耳をこやすための方便の教、眞実に至るの仮りの教、即権門の教であるということになります。では何故そのような方便の教えを態々設けたのか、理由は仏様がはつきり断言されております。

「説く時、いまだ至らざる故なり」

と方便品にあります。そして、

「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」

と同じ方便品で言われております。

ではその無上道とは何か、凡べての人々が仏になるの道であります。

凡そ仏教を信ずる者の目的はこの成仏にあります。これ以外は枝葉末節でありますから、仏も方便の教と言われたのであります。法華経こそ無上成仏を談ずる唯一の經典也と仏が言われてるのであります。

これはいずれの宗旨の祖師方も否定することの出来ぬ仏御自身のお言葉であります。しかるに現実はどうでありますか。この仏説と天地水火の相違なのであります」

蓮長破門さる

「……斯くの如く法華経は釈尊が自ら仏説中の極説也と言われておりますが、何故この經典が現在まで弘まらなかつたかを御一同は不思議に思うであります。それには次の如き理由があるのでございます。三世を見通すのが仏様であります。されば釈尊は御自分の滅後の時代がどう変遷してゆくかを、とくと御存知でありました。正法千年、像法千年、末法万年とみられたのが、釈尊の滅後における時代観でありました。正法の時代には小乗の教が行われ、像法の時代には権大乘の教法が流布する、最後の末法の時代には、実大乘のみ行われる。これが釈尊の遺訓であり、又教法流布の順序次第であります。しかるに今は末法に入つて二百二年であります。従つて小乗の教や権大乘の教はその利益を失つて、実大乘のみ流布する時であります。実大乘とはそも如何なる教を言うか、勿論法華経であります。釈尊滅後の仏教の大学匠である南岳大師、天台大師、伝教大師も、この教法流布の次第を充分に御承知でありましたのでわが身が末法の時代に生まれなかつたことを歎かれるとともに、この末法の時代を甚だ恋しく思われておつたのであり

ます。天台大師が遠霽妙道と言われたその妙道とは、実大乘たる法華經の流布を言われたのであり、伝教大師が末法甚だ近きにありと言われたりは、法華經の流布すべき末法の始めを恋慕されてのお言葉であります。

法華經の譬喩品には「若し人信ぜずしてこの經を毀誇せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、その人命終して阿鼻獄に入らん」と、はつきりありますが、この經文をもって世相をみるならばまさに皆墮地獄の教のみであります。

即ち、法然上人は弥陀の三部經を唯一無上の教えとして他の經文をなげ捨てよ、ほうり出せよとさえ断言せられております。榮西禪師が教外別伝を口にしてこの法華經を毀誇すれば、弘法大師は法華經をもって仏の戯れの言葉としてこれを輕侮せられておるのであります。

しかしながら、諸仏菩薩は何を修行し、何の力によつて成仏せられたかと申しますならば、皆なその過去において法華經を修行し、法華經の功德によつて仏となり菩薩となられたのであります。

故に、阿弥陀仏の活動力も大日如来のはたらきも、觀世音菩薩の救済力も、一切諸仏諸經諸菩薩の力と用とは、法華經の力であり、南無妙法蓮華經の力用であります。

この根本を忘却して、如何に各宗蘭菊の美を競うとも、ただただ人心を迷惑するのみであつて、成仏得道などは思いもよらぬことであります。

外世間を眺むれば、斯くの如く雑乱その極に達しておりますが、一度振り返って内を眺むれば如何でありましょうか。わが干光山清澄寺はもとこれ伝教大師の流れを汲んで、法華經を正意として創建せられたのであります。しかるに中頃世の弊に洩れず、慈覚大師の大日經をもつて法華經よりすぐれたりとなす邪法邪義に迷惑せられて、今や殆ど真言宗と申してもさしつかえない程の乱脈振りであります。

星は多けれども大海を照らさず、草は多けれども大内の桂とならず、念仏は多けれども、仏となるべき道ではありません。しかも東方の仏たる大日如来を安置して、その仏前に、西方有縁の弥陀の名号を唱える、一山の大衆もおそらくその心中に、この一大矛盾を不審となす方が、多々あるうと思うものであります。はからざりき蓮長十五か年の仏法研鑽の結果は、中興開基と言ひ伝えられるわが山の慈覚大師の邪法邪義を悉く捨て去って干光山清澄寺を創立の古に復し、伝教大師の精神を生かすとともに、諸經中王法華經最為第一の積尊の金言を如実に実行することでありました」

……この時である。

蓮長の講座近くに座っていた円智房は、つと講座の前に立ちふさがると、

「誰かと思えば善日鷹とんでもないことを吠えたておるわ」

蓮長の面上に、唾を吐きかけたかと思う程の冷罵を放ったのである。これに機を得た地頭の東

条左衛門尉景信、最前より日頃わが口唱する念仏を悪口されて、ぢりぢりして、身体をこゆるぎさせておったが、

「無礼なり、売僧っ！」

と憤然立上ると、刀に手をかけて、蓮長法師をはったと睨みつけた。景信の従者四、五名も主人の激叱とみてとると、ばらばらとこれも立上って、蓮長のがすまじの態勢をとって、講座近くに立ち進んだ。

静粛だった持仏堂の内部は忽ちに騒然となり、場内の聴者は皆な腰を浮き上らした。

「待たれい、待たれい」

蓮長法師の師匠たる道善御房のみが、座を崩さずして声を放った。

「ここは尊い霊所でございますぞ、血をもつて汚すなどとはもつての沙汰、お静かに……お静かに……蓮長つ座を下りて、座を……」

言いながらじいっと蓮長の眼をみつめた。悲痛な眼、師匠の意をその眼中に汲みとると、蓮長は一礼をして、静かに講座を下りて、悠然とこの場を去ったのである。

この蓮長の落着いた態度が却って、場内の奮激を爆発させる結果になった。

「蓮長を逃がすな」

「仏敵を葬むれ……」

且信徒までが口々にど鳴つて一勢に立ち上つたのである。

怒りの吐け口に究した景信の従者達は、蓮長を蹴倒すがごとき勢で、今まで蓮長が登っていた講座を足げりにして、踏みこわしてしまつたのである。

「やれやれつ……」

喊声が誰からともなく湧き上つて、正に喧々轟々たるものがあつた。

この騒ぎの中で、道善房をとりまいて、円智房、実成房等々塔中の住職は何事か言い争つておつたとみえたが、急に円智房が大声でど鳴つた。

「蓮長は破門したと、たつた今師匠の道善房が言われたぞ、よつて只今より蓮長はこの山の僧侶でもなんでもないぞ」

これを聞くと地頭の東条左衛門尉景信はにたりと笑つて、従者に耳打ちをするとこの場の騒ぎをよそにして、さつと場外へ身はずしたのである。続く従者は各々刀の柄をむんずとつかんで、ばらばらつと持仏堂を駆け出した。

この一瞬、さすがに場内は水を打った如くしずまつた。

初の受難

「おうい、おうい」

自分を呼ぶような気がするので、蓮長は思わず足をとめた。

それだけでなく、別れたくはない思い出の山である。

師匠道善御房の温顔、

なつかしい兄弟子の顔、

この山道は二十年前には稚子まげ姿で、父親につれられて、出家得度するために登った道である。

しかるに今のわが身は、師匠から破門されて山を下りる身である。

「仏法を習い極めんと思わば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらんと思わば、父母師匠国主等に随いては叶うべからず。是非につけて出離の道をわきまえざらんほどは、父母師匠等の心に随うべからず」の気持である。

自分の破門は塔中住職の腹立ちまぎれの意志であろう。師たる道善御房は、破門というような重大なことを軽々に口にする筈がない。たとえ破門するにしても将来への戒めの言葉なぞも言いたかつたであろう。

がその暇もなく、早々立退くようにとの塔中住職からのきつい命令であった。

正午には持仏堂の講座に登って説法した身か四五時間後の今は、破門されて清澄山を下る身となつている。

「恩ヲステテ無為ニ入ルハ真実ノ報恩ノ者ナリ」

「悉達太子ハ浄飯大王ニ背キテ三界第一ノ孝子トナレリ」

口ずさみながら山を下りる自分であった。

言うべきことを言うべき場所で十分に述べ終つた。十二歳より三十二歳に至る二十年間、夢裡にも忘れたことのない干光山清澄寺において、仏法研鑽の極地を卒直に述べたのである。しかも師匠先輩の面前において堂々と発表したのである。蓮長狂せりと思う者もあるう、恐らく聴者中一人と雖も蓮長の言葉を首肯したものはあるまい。だがそれで結構である。

ただ仏恩を報ぜんがため、道善御房を導き奉らんがために、申し述べたまでである。

師匠道善御房にも理解ができなかつたであろう、ただその心田に、末法流布の法華經の題目を下種したのである。それだけでよい。今はそれ以上望むべくもないのだ。

「ばたばたと足音が近ずいてきた。」

「蓮長っ」

「おう……」

振り返ってみると兄弟子の義浄房が息せききつて立っていた。

「この道をいつてはならんぞ、危ぶない」

義浄房の言葉である。

「さては……」

と蓮長が義浄房の顔を見ると、

「そうなんだ」

と義浄房がうなずきながら言葉が続けた。

「蓮長、敵もいるが味方もおるんじや。下僕が知らせてくれた。麓の辻堂に地頭の東条殿が、お手前の来るのを待ち構えておるといふのだ。この道を往つてはならぬぞ」

「法華経の為の難ならばこの蓮長が願うところです。御心配は有難いが……」

「何んにも言わずにこのわしに任せておきなさい。お主の考えは、おそらく、これから小湊に往つて、御両親に逢い、それからいずれかへ行こうと言う考えであろうが、それが最早かなわぬぞ」

「両親にも逢えぬとは」

「地頭の威力を軽くみてはならぬ。下僕の口ぶりでは小湊の御両親の家の方にも、それとなく捕方が手配してあるらしいという。それで浄頭房とも相談して、わしがあわてて追いかけてきたのだ。道はないが此処から崖を左に下りてゆけば裏道に出る、裏道の大きな柏の樹の許に、浄頭房が先にいってお手前のくるのを待っているのだ。そしてそこから西条の華房に出よう。西条は東条の領地外だからまさか東条左衛門も手は出せまいと思っている。地頭の東条左衛門は清澄寺の飼鹿と知りながらも、これを平気で射殺して従者にもつてゆかせると云う人間だ。」

お寺参りに来るのか鹿狩りにくるのかわからんと言うやり方、今日来たのもお主の説法を聴きに来たのか、帰りの鹿狩りが目的なのかわかったものではない。そんな人間が今日はお主の説法でおこったのだから、どんなことを仕出かすかもわからない。鹿の代りに今日はお手前を射殺すと、麓の辻堂では待ち遠しくてその辺までもでばつてきておるかも知れん。浄頭房は、東条殿が今日持仏堂で抜刀せぬのは近頃殊勝事だと言つておつた。おやつ、麓の方から人声がきこえる、蓮長「こつちだこつちだ」

と義浄房が蓮長の法衣の袖を掴むが早いか、ころがり込むように、山の傾斜の灌木の木影に身をかくした。

義浄房は押しかくれた時の草の葉の動きに不安な眼をやりながら、ぢっと耳をすましました。

「山の一本道、この道しか通る所がないのだから、可哀想だが、あの坊主、逃がしっこはないぞ」

「先刻の知らせでは山を下りたと言うのにまだ来ぬのは不思議だ」

「地頭様のきつい御立腹、鹿の代りに今日は坊主を射とめてみせるといわれておったが、どうなることか」

と銘々に勝手なことを言いながら、山道を登っていくのだった。

「蓮長、聞いたか、今のは東条左衛門尉の従者たちだ。貴公が山を下るのがおそいので、さがしに来たのだろう。最早この道は危ぶなくて行けぬ。さあ、この崖を下りて裏道へ行こう、東条の領地外の華房の村へ行こう、浄願房も心配して待っているだろう。さあ、この崖を飛び下りろ」

そう言うとき浄房は先に立って崖を飛び下りた。

建長五年四月二十八日という、蓮長にとって大切な陽が今沈まうとしている時刻であった。



小湊の教化

「磨が帰って参りました」

「磨とは……蓮長のことか」

「はい」

「清澄山を追われて、西条の華房におるとか人の噂できいておったが、つつがないか」

「元氣のようでございます。何か急用あつて私どもに逢いたい様子……」

「師匠道善御坊に詫びを入れて、清澄山に帰りたいたいと言うのなら、わしの願いも叶うと言うものじゃ」

「他人の眼につかぬよう、この早朝に参ったのでございましょう。奥の部屋に通しておきましたから、早く逢つてやつて下され……」

「暫く待て、いま日天様が昇る処じゃ、二人してわが子の行く末を祈つてからでも遅くはあるまい」

わが子蓮長が、清澄寺に意外な説法をして、師匠道善御房と地頭の東条左衛門尉との激怒を受けたと聞いてからここ十数日来、早朝の浜辺に出て、朝日を待つて何事かを祈願するのが貫名次郎重忠の日課になっていた。

やがて、梅菊女が夫重忠の側に立つて静かに昇ってくる朝日を一心に拝むのであった。

「日出でて、まず高山を照らす」

兩人して拝むこの日輪の光芒は、既に房総の山々を照らし、否、遙かなる駿河の富士の頂きを照らしておるのであったが、この兩人には、朝陽が海面におもてを出して、その黄金の波が渚に寄せてきた時に始めて、それと知れるのであった。

「お主よう尋ねてくれた、清澄山での説法のことを聞いて案じてはおったが、わしはお前を信じ
ておったぞ」

「曆よ、早よう父上とともにもう一度清澄寺に帰つて、道善御房様に入れて下され、地頭様へは御房様からよしなに取計らつて下されるでしょう。よかつた。よかつた。よくここを尋ねる決心がつきましたなあ。母は今日の日をどれほど待つていたことか……」

両親とも交々に、奥座敷に招じた蓮長に語る言葉である。

「実は蓮長も、そのことで夜の明けやらぬ中に、ここを尋ねたのでございます」

「そうであらうとも」

梅菊女はにつこり笑つて膝を乗り出した。

「これから鎌倉へ行こうと思います」

「……」

両親の顔色はさつと変つた。蓮長それに動ずる気色もなく言葉が続けた。

「父母報恩経には「若し父母信なくば、教えて信ぜしめよ、戒なくば戒を与えよ、聞かずんば聞かしめよ、智慧なくば智慧を教えよ、而して安穩ならしめよ」とあります。私こと本来ならば故郷に錦をきて帰るのが世の常でありましょう。しかるに帰山の説法に先ず塔寺を追放されたことは、只々遺憾至極と思し召すでありましょうが、実はこれこそ仏の思召しであり、わが信ずる法華経、わが行ぜんとする法華経の説相なのであります。

母上、善日鷹は十二歳にして出家し、清澄山に登りましたが、その間、一山の掟として、女人禁制の故に、母上は一度といえど清澄山には登られませなんだ。これ何故でありましょうか、女人には五障三従ありとなしてこれを嫌う故であります。清澄山山門より八丁の所には、牛馬女人結界と石標がありまして、女人を牛馬に同じて、門前払いを食わしておるではありませんか。これが大慈大悲平等の仏の教えでありましょうか。……蓮長これに不審を感じて経文を案じました所、華嚴経には、「女人ハ地獄ノ使ナリ、能ク仏ノ種子ヲ断ズ外面ハ菩薩ニ似テ内心ハ夜叉ノ如シ」とあり銀色女経には「三世ノ諸仏ノ眼ハ抜ケテ大地ニオツトモ法界ノ女人ハ永ク成仏スベ

カラズ」とあつて女人の成仏を許しておりません。天台大師も「他経ハ但男二記シテ女二記セズ」と云つておられます。しかるに法華経においては、八歳の童女が畜生道の衆生として、姿を改めずして即ち成仏しております。釈尊の母マカハヂヤハダイ比丘尼は一切衆生喜見如来、ラゴラの母は具足千万光相如来等、凡て女人が成仏しております。

これは法華経以外にはない未曾有の出来事であります。されば法華経以外の経文においては、女人の成仏を許しません故、出家においては、法華経を信ぜずんば、恩愛は天地にも比すべき自分の母を救ふことが出来ません。

蓮長のこの身は天より降れるものにも非ず、地より湧き出でたるにも非ず、父母の肉身を分けたる身であります。我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口、この口より只今申すこと神仏も照覧あれ、仏すらこの法華経を説くに、「四十余年未顕真実」といわれております。法華経には、末代女人成仏の証として八歳の童女の得説あり、末代男子成仏の証として、ダイバダッタの得道があります。男女を等しく救う経典こそ、一切衆生を化導する経典であり、蓮長にとつても父母孝養の経典であります。

清澄山における説法は恩師道善御房を導き奉らんがための法門でありましたが、実に、また父母に孝養を致さんがための報恩でもありました。……されば清澄の山を追われたのも、仏の御遺言を実行せんがため、はたまた、父母に孝養を致さんがためなりと感ずる時、難の来たるをもつ

て、大いなる喜びと致しておるものでございます」

蓮長法師の前に座した両親は、不審の色より謹聴の面持となり、果ては感激の涙を頬に浮べるのであった。

この世の中に生ける仏かおるとしたならば、わが子ではあるが、このような人を云うのではなからうか。

折柄、座敷一杯に照りこんだ朝陽の裡に、端然と座した蓮長法師の姿は、わが生んだ子ではない、後光さすが如き仏の姿ではなからうか。

母たる梅菊女は、いつしか、合掌して聴聞しておるのだった。

法華経の諸経中における最為第一の由縁を説き、今こそ法華経の流布すべき時機であり、法華経をもって一切衆生を導くべき時節なることを、仏説を引いて語りこの法華経の大施をかかげて、仏教流布の中心地である都鎌倉に、今日只今より旅立たんとする決意を披瀝した蓮長は、おもむろに最後につけ加えた。

「蓮長兼ねて期する処あって、今後より日蓮と名乗ります。日は法華経第二十二如来神力品に「如日月光明、能除諸幽冥」とあり、蓮は法華経第十五湧出品に「不染世間法、如蓮華在水」とあるに縁由いたします。

しかれば何故に日蓮と名乗るか、これひとえに、法華経を世間に行ずる人、必ず末法において

現われるという仏陀の予言仏記に従うが故であります……」

言葉はとぎれた。

座に沈黙があった。

「合点が参ったぞ、お主の説法、清澄山へ帰ることは要らぬ、行け、鎌倉へ」

父重忠の声に力があつた。

「もう、梅菊、そうではないか、磨の話をきけば」

「さようでございます。女人と生まれて罪深いものよと、仏様の前に気兼ねをいたしておつたこの妻の身が、磨の説法を聴聞して、何かすうつといたしました。その法華経をもつて、余経において鬼とのしられた女人を救つて下され、いや、一切の人々を導いて上げて下され」

「では、母上も納得が参られましたか」

蓮長法師の頬にも法悦の涙が流れていた。

「最早今日より念仏は申さぬぞ、磨の唱える南無妙法蓮華経を唱えよう」

「今鎌倉に行けば、何時帰えるとも知れぬ、磨の身の上、磨の名を呼ぶと思つて、今からは南無妙法蓮華経と朝な夕なに唱えましょう」

「では御両親とも改宗なされますか、嗚呼有難や……日蓮今後鎌倉の法戦に如何なる大敵が来ようとも断じて臆するものでありません。」

御両親を導びき得ずして法華經の功力なし、生みの親を改宗させ得ずして、わが口に題目を唱えましようやと心得ておりましたのに、唯今の御言葉、日蓮今生の喜び、之れに過ぐるものがありません。

父上、改宗のしるしとして今後は妙日と名乗り給え。母上は妙蓮と法号をお授け申しませう。父母となり子となるも宿習のいたすところ、日蓮が法華經のお使いならば釈迦多宝の二仏、さだめし父母と変じ給うたのでありませう。その大果報に因んで、妙日、妙蓮と名乗り給え」

「有難や——」

期せずして、重忠、梅菊の二人の口より出た声は、何時しか三人唱和する唱題の声に変わっていた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

(注 今回まで、善日鷹連長法師の名を用いたが、今後は単に聖人と申し上げることを読者了されたし)

聖人鎌倉へ行く

「きた……来たぞ」

「蓮長がきたか、ここでわれわれも網をはっておるとも知らず、やって来おったか」

「今度こそは逃がすな、この間はしてやられて、うまく他領の西条に逃げられたが、今日は手捕り足捕りというところだ」

東条左衛門尉の家来十名程が、清澄山の裏路を通つて久留里に通ずる山路に見張っているのだつた。

久留里から木更津へ、これが武州へ行く順路である。聖人が清澄寺の説法で地頭の東条左衛門尉の激怒をかってから、秘かに西条華房の青蓮房に逃がれていることは、東条方でも分っていたのである。

なんとかして聖人を捕えようとする東条左衛門の苦心は、家人を四方に派して、その動勢をさぐらせておつたが、数旬の後、聖人が小湊の生家を尋ねたことが分ると、最早東条方では少しも

あわてなかった。網にかかったも同様と感じたのである。

しかし人目の多い村の中では、まさか捕えることも出来ぬので、今日の日を待っていたのである。

まさか弁々と生家にとじこもっておるまい。いずれは鎌倉にでも登るであろうから、その街道を見張っていて、人目につかぬ所でこれを亡き者にしてしまえというのが、東条左衛門の下知であつた。

そして今、四万木と黄和田畑の中間の山路に、東条の配下、十名程が物々しい支度で待ち構えていたのである。

物見をするには、究竟の山路である。時は五月の中旬、藤の花は咲き終つたが、山つつじの花が真赤に咲いて処々に百合の花が白い。

こんな荒くれ武者が、ひそんでおろうとは思えぬ静かな山道であつた。

網代笠に手甲脚絆の僧がすたすたと歩いて行くと、ばさつと矢が一本、路の真中に突きささつた。余程近い所から放つたとみえてすさまじい音であつた。

僧はすばやく路の木陰に身を寄せた。何処かで蝉の鳴く声がきこえ、木陰の木の枝に蟻の行列がせわしかつた。

しかし路の真中には依然として先刻の矢が立っているのだ。

動けば二の矢が飛んでくるに相違ない。

網代笠がゆれたのは、僧が四辺を見廻したためであろうか……。

「坊主、驚いたか」

その声と共に、二、三間先きの草むらから、ばらばらと東条の輩下が飛び出してきた。

「もう逃げられんぞ、背後をしろ」

背後にも何時の間にか四、五人並んでいた。

余り驚いた様子もなく、僧は静かな口調で、

「出家に向かつて無礼な振舞い、掟をわきまえぬか……」

「掟によつて待つていたのだ。地頭東条様の下知では仕様があるまい」

「自分は干光山清澄寺の僧侶、間違いなぞして御主人よりお叱りを受けるなよ」

「お叱言どころか、捕えて行けば御褒美が待つているのだ。但し手にあまればどのように処分し

てもよいとの殿の御命令……」

「日頃わが清澄寺に帰依の深い大檀那の東条様が、そのような無体をいう筈がない。恐らく、名を地頭に借りて不埒を致す山賊の類であろう。御覧の通り樹下石上を宿とたのむ僧形のもの、本来無一物、このままで置いてもらいたい」

「わし等だつて、満更信心気のないものでもない、坊主に頼まれてはいたし方もないが、お殿様

の命令ではそうもゆかぬ。坊さん、お前を許したのではこっちの首が危ない。泣く子と地頭には何とかいう奴、静かにしておくんさいよ」

前後から捕りかこんで押問答をしておる時、弓を下げて山の木陰から道に飛び下りて来た一人の武士、どうやら一同の采配格らしい。

「何をぐずぐずしておる。問答無用。早く縄をかけぬか」

路につき立った矢を抜きながらいい続けた。

「たった一矢で、猪なみに仕止めてもよかったが、わざと的をはずしたのだ。御慈悲と思えよ。

者ども、縄かけい！」

命令にさつと、三、四人で縄をかけた。

「蓮長、案外にたわいないではないか。清澄山の説法大高言の手前もあろう。少しは、じたばたしてもよかったのに」

縄を打つてから、網代笠の下をのぞきこんだその武士が、あつと思わず驚きの声を放った。

「こりや、義浄房殿ではないか……」

「如何にも義浄だ、お手前は長森殿……」

「こりや飛んだことをした、あわてものめ……」この方は清澄寺の義浄房殿だ。手前の日頃から親しい方、早く縄をとかぬか……」

義浄房は縄付きのまま四、五間さつと逃げ出した。

「どっこい、そうやすやすとこの縄はとかせぬぞ。長森殿、お手前はわしの寺の檀家惣代だが、日頃から武士に似合わぬあわてもの、こういう時に戒めてやらねばならぬ」

「義浄房殿、あやまる、勘弁勘弁……しても不思議だ。御房がこの道を通るとは」

「何の不思議があるうか、足があれば何処へでもゆく、今日はお経に久留里の檀家まで行くところさ」

「さては御房は、われ等の手配を知つて蓮長に代つてまぎらわしい姿で、わざわざこの路を来たものと思へる」

「そんなことこの義浄の知ることか、なつかしい弟子の蓮長は、お手前の主人から痛く叱られて、清澄の山を下つてからは、その後は消息不明だ。今日この辺でも通ると云うのなら一目でもよい会わせてくれぬか」

「おうい皆んな。早く捕かまえて義浄房殿の縄をといてくれ、勿体ないやら口惜しいやらで、あれはわしの檀那寺の和尚じゃ」

鬼ごっこでもするかのように、東条の家来達は義漁房を追いかけ始めた。皮肉なことにその義浄房が仲々つかまつてはくれないのである。その頃聖人は、兄弟子の浄頭房、義浄房のたつてのすすめに従つて、路を全く逆にとつて賀茂川を過ぎ、仁右衛門島を遙かに眺めながら江見に向か

つていたのである。さすがにこの道には、追手の影はみえなかった。かくて、和田より船形へ。

富浦の南無谷に便船を得て一路海上の旅に出たのである。

目指すは無論、鎌倉である。

名越の庵室

一

「精を出して……しっかり働かぬと、お前達はあの砂浜に寝そべっておる牛どもに負けてしまふぞ」

稲村ヶ崎を真向こうにみる飯島の浜辺である。材木の筏を引いてきた船が二・三隻岸について大賑いである。

子供がいる。大人がいる。旅姿の人達もこれに混じって見物している。その見物人を邪魔もの扱いにして人足達が岸辺から材木を運んでいるのだ。

建長三年十一月に工事を起した建長寺を、今年（建長五年）中には完成させようとして、普請場に運ぶ材木の積み込みである。

建長寺から差し向けられた、禅宗の坊主らしい筋骨の逞しい僧侶が人夫を叱りつけて督促して

いる。

「いいかなあ、昔或るところで寺を建てたんだ。寺が建った後で、誰が一番果報を得たかと云うと、驚くなかれ、人間様でなくて、材木を運んだ牛どもであったという話がある。牛は慾をはなれて黙々と尻を叩かれながら材木を運んでおる。

ところがどうじゃ、人間は皆欲のために働いて居る。ここが果報のある無しのわかれめというところだ。お前達に慾をはなれて働けとは無理だろうからそこまでは注文せぬが、怠けずに、精だけ出して、まあ働いて貰いたい」

材木を運ぶために、連れてこられた数匹の牛が砂浜に寝そべって口を動かしている。その口辺の泡に五月の陽がちかちかと照り返されていた。騒がしい人の動きをよそにして、ねむたそうに一しきり牛がうなりたてた。

「みい……。畜生の牛どもにも拙僧の話が合点いったとみえて、返事をしておるではないか」
「坊さんだけに、説教にはそつがねえなあ」

人足どもは蔭口をききながら、牛車に材木を積むのに忙がしかった。

何処の遠い山から切り出したのか知らないが、一本の材木を運ぶために、牛が五、六匹も要るといふ程の大きな材木が去年あたりは、どしどし運ばれたものである。このために滑川にかけた橋が落ちたことさえあった。

音にきく支那杭州経山寺の模様を本朝に移そうとする、執権北条時頼の空想は、偏門、総門、山門、仏殿、法堂、方丈、鐘樓、禪堂、食堂、照堂、祖師堂、経藏、塔中は八か寺という鎌倉小袋坂の建長寺となったのである。

「相州様（北条時頼）の御威光はたいしたものさ、去年は長谷の近くに大仏様をこしらえた。案内坊主のせりふじやないが、御丈は三丈三尺五寸、面の長さが八尺、眼の長さが四尺、お耳は六尺五寸、親指の周りが三尺余りで、口は三尺三寸、このほかでかい口で毎日飯を食われたんでは、鎌倉中の人間が乾し上つちまう」

「おいおい、後の方はお前のつけ足したろう。だが、それでも足らぬとみえて、今年の十一月迄には建長寺をでつち上げようというのだから豪勢なものさ」

「噂にきけば、その建長寺に座わる坊さまは、日本の坊主では光り方が足らないと見えて、あち
らの方から呼ぶという話だ」

「呼ぶどころか、もうとつくにお着きになっているよ。道隆大覚禅師、宋の国から来た本場もの
さ」

がやがやと騒ぎ立てながら建長寺の普請場へ材木を運ぶ人足達の囁き話である。

「俺達人足どもにとつちや、仕事にありついて食うにことかかぬから、相州様は仏様よりもっと有難いお方で、あんまり蔭口もきけないが、ここ数年來、飢饉だ、疫病だ、地震だ、大暴風雨だ

と、ひっきりなしに打ち続くご時勢に、どうしてこう寺ばかり建てるんだらう。年貢のとりたてで、諸国の百姓は青息吐息だ」

「苦しい時の神だのみというかんじや」

「俺の考えは違うよ。これは相州様が勘考されたものだと思う。なますが暴れるので近年地震がつづく、これは一つ大きな重しを鎌倉中の要所要所に置こうと考えたのだ。だから大仏さまの目方が二万五千貫だ。たいした重しだぞ。長谷の観音が三丈三尺でこれもちよつと重しになる。建長寺になると数でこいだ、丈六の地藏菩薩が一千体という大変なものだ。これでもなますの野郎も少しはおとなしくなるうじやないか」

建長寺御用と制札を立てた材木を積んで、延々と続く牛車、往還の諸人は路がせまいので、これが通りすぎるまで、田甫の中を歩くか立ち止って見送るより外に仕様がなない。人足どもは勝手なことをしゃべりながらこれらの立止っておる人々の顔を得意そうに見廻しておるのだった。

監督の目のとどかぬ最後の牛車に腰掛けていた人足が、車について歩いてくる人足に声をかけた。

「おやおや。あんなところから煙が上がつておるぞ、炭焼き小屋でもあるのかな」と名越の山麓を指さした。

「どれどれ、あそこか……ありや炭焼き小屋じゃない。何処から来たか知らないが、近頃坊さまが住んでおるんだ。俺はあの辺には猿が出て来るというので、黒焼きでもこしらえようと思つて

何時だったか、弓を持ってあの辺をぶらついた。すんでのことで大きな奴を一匹ものにしようとしたら「おいおいわしの可愛い弟子達をいじめては困るなあ」と、六尺もあるうか大きな坊さまがいつの間にかそばに立っていたんでびっくりしたよ。

とどのつまりは猿の代りに俺の方がつかまって、粗茶一服進ぜようかとかなんと云われて、あそこに案内されたんだ。

こちとら建長寺の人足から見たら、乞食小屋同然のところにゆうゆうと座して、粗茶だといって進められた時には、ちよつと妙な気がしたよ。

同じ鎌倉の町中でもこうも違うものかなあ。坊さまといえば、金襴の法衣に包まれておる方達ばかりと思つたのに、破れた薄墨の衣一つ、座敷の中には経机に経文らしいものが飾つてあるほか、鐘もなければ木魚もない。夜はどうして寝ることやら、樹下石上とはいいいながら、人のことだが気もめた。

そうして暫くは、鎌倉の町中の出来市をいろいろと尋ねられたことがあつた。あんまり気安いので話の終りに坊さまあんたは、お寺はお持ちでないかと伺つたら、自分の身体をぽんと叩かれて、これがわしの寺じゃといわれたよ。頭の辺が本堂なら首から下が庫裡と方丈じゃといつて笑つたつけ。帰り道でお百姓に逢つたから、あれは何処の坊さまかと尋ねたら、何処からきたか知らないが、毎日のように彼処で南無妙法蓮華経と唱えている不思議な坊さまだといったが、なあ

「オイ、南無妙法蓮華經という唱えごとはあんまり聴いたことがねえなあ」

「南無妙法蓮華經か……南無……妙法蓮華經……こいつは俺も初耳だ」

「コラコラ！眼が届かぬと思つて車に腰掛けてる奴かおるか、勿体ない」
人足は警護の役人に叱られて、あわてて車から飛びおりた。

一一

今日も富士が見える。

ここ名越の庵室から見る富士は、虚空に浮かんだ富士である。無論箱根伊豆の連山は雲に隠れてみえない。真昼の月を見るような、雲の上に富士の頂きがぼうつと浮いてみえる。銀盤のような鎌倉の海、飛ぶ鳥の影さえ映るような気があるのである。

先刻から、裏山に野猿の叫び声が聞えておつたが少しは静かになった。

名越から半里程東南の久木の辺に、すみかのあるらしい野猿が、名越迄は本を伝わって遊びに来るが、名越で山がとぎれるので、ここまできると、またもとへ帰つて行くのであった。

野猿達は名越の庵室に一人の大きな坊様がいて、何事かを一生懸命に唱えておることを鎌倉の町の人達よりも早く知っていた。

動物の本能でこの人は自分達に危害を加えないと直感すると、あきれる程になつくものである。この野猿達は庵の主人である聖人の御題目の声を聞くのが日ならずして日課のようになってしまった。聖人が読経唱題中には、縁側のあたりまで近づくのさえあった。

この野猿達も帰ってしまった。建長五年十一月の初旬、静かな秋の日も暮れようとしている。この月の二十五日には建長寺の落慶式が予想されて、鎌倉の町には、当日の出入をあてこんでの、いろいろな噂話がいつぱいであった。

建長寺の落成、これによって禅宗は、一つの新しい勢力を鎌倉に加えることが出来るのである。源氏山の麓、寿福寺には悲願朗誉上人があつて禅宗を弘めておつたが、建長寺には遠く宋の国より道隆上人をよんで、その住職と仰ぐというのだから、建立主北条時頼殿の信仰の程も察せられる訳である。

この禅宗に対して念仏宗は、材木座に光明寺（鎌倉の大仏はこの寺の末寺広徳院にある。大仏の建立者は北条時頼）の然阿上人、新善光寺には、道教上人、長楽寺には隆観上人、ともに法然上人の法孫として、大いに浄土念仏宗を弘めて、禅宗が武士の階級に弘教をつとめれば、念仏は商人農民の一般階級に布教宣伝を試みていたのである。

これに対して真言宗は、依然たるころの勢力を握ぎつてゆらぐことがなかった。

鎌倉八幡宮の別当職には僧正隆弁上人、大蔵阿弥陀堂には加賀法印定清等があつて、病氣、出

産、災難、合戦ともなれば、真言秘密の祈禱師に依頼せざるを得ないのが当時の鎌倉の人心であった。

北条の天下となつて僅々三十年を出ずして、鎌倉は日本の中心となり、文化の中心となり、又活気の点においては仏教の東京都をもしのぐ、仏教の中心地鎌倉ともなつていたのである。

だが、これは表面のことであつた。

大仏様、長谷の観音様、建長寺、寿福寺、光明寺等々如何にも仏法は興隆したかにみえているが、考えて見れば、此等の寺々は時の為政者が、民の膏血をしぼつて建立した寺であり、都の体裁を整えるため、人心を安定させるため、自己の権力を誇示するため等々の故に建立された寺であつた。

庶民の信心が凝つて建立されたというような寺は一箇寺もなかつた。寺は為政者が建立すべきものであつたのである。故にこの寺に入る僧侶は、為政者にとりいらねば、生涯住職の地位に登ることは出来なかつたのも無理がない。

念仏の寺も禅宗の寺も真言の寺も律宗の寺も、その建立者は同一人であり、大檀那は一人であり、その為政者の一家一門であつた。だから、立派な寺におさまつた住職は、常に現状維持を願つていた。従つて念禅真言律と宗旨は異なつていても大檀那は同一人であるから互いに援助し合ひ、その寺を維持しようと務めていたのである。

真言の僧侶も禅宗の僧侶も念仏を唱える。

武士の精神修養には禅宗がよいが、病気災難出産等の御祈禱は真言宗が受けもつ、道路普請や橋をかける民生の方面は律宗が引き受ける、さて臨終となれば、念仏の僧侶が、いよいよ私の番が来ましたと引取るといった具合で、職場を守って万事が仲よく寺々の興行にいそしんでいたのである。

大寺に入れば妻妾を蓄えること、魚鳥を服することなど公然の秘密で、むしろ現代の人々が、知らな過ぎる程である。

このような状態であるから、僧侶は自分の宗門の研究すら、思いもよらぬ状態であった。

人の性質によって、人の好みによって、仏の教えは違うものである。その故に六万の法蔵という位に、沢山のお経があるのだ。いずれも仏説であつて、自分の好みによってどれを執つてもよろしいのであると僧侶が思っていたのである。

武士はいざ合戦ともなれば、何時如何なる所でも命を捨てなければならぬ。それには空だ空だと教えておけばよろしい。

商人百姓にはこの世の中は仮りの世の中である。お前達はこの世の中にお客さんで来たと思つから腹がたつのだ。お客さんではないぞ。働け働け、そして後生安樂を願え、後生を願うことのみにお前達は、この世の中に生れて来たのである。

後生を願うにはどうしたらよいか、信心をしなさい。この世の中にお客さんできたのではないから、一生懸命働きなさい、そしてうんと功德をつみなさい。かくすれば後生安樂疑いなしと庶民には教えたのである。

全くここ三十年來、打ち続く大地震、大暴風雨、飢饉、疫病の中に生きておれば、この世は仮の世の中で、何処かに本当に住む世の中がおるような気がするのも無理はなかった。

この気持をよく擱んだのが念仏の教であった。法義とか仏の教とかが、いずれが真であるかなどとは鎌倉の寺々の僧侶は考えていなかった。強いていえば、流行するということ事実が真であった。流行しないものは、たとえ仏の教であっても真実ではないのだと考えていたのである。

人が変り世の中が変ればそれに相応して、仏の教えも変えてゆかねばならないと考えていた。

人の心を先きにしてそれに仏の教えが追隨してゆくのなら、それは仏の教えでは毛頭ない。むしろ仏の教えは、ゆがんだ人の心を正しくするもので、或る時には、時代に受け入れられないような姿さえとることがあることを鎌倉の寺々の僧侶は一向に知らなかった。これが聖人が名越の庵室の主人となつた当初の鎌倉の仏教界であつた。

訪ねる人もない聖人の庵室に今日は一人の僧が訪れて来た。

自身の口から、叡山から参つた成弁と申す僧侶であるといひながら笠をぬいだ。

南無妙法蓮華經

六尺余の長い白い布の上に書かれた題目、聖人が丹誠をこめて書かれた題目である。筆勢は正に竜虎相打つの気概がある。後世の人はこれを目蓮が発明した髭題目なぞというが、それは転宗転派を禁ぜられた徳川時代の気概のなくなつた日蓮宗派の僧侶の書いたお題目をみてから、そんな悪口をいいだしたのであろう。今ここに書かれた聖人のお題目はそんなものではない。

伸び伸びとした雄渾な筆法、南無妙法蓮華經こそ、宇宙法界、不変の哲理、万物を育成してやまぬ大光明、大慈悲の象徴であつた。そうしてその哲理は、不変に正しいものであつた。国が亡びようが、世の中が変ろうが、永遠に正しいものであつた。だがその正は、いつの世にでも、邪とともに存することを許さない。故に今静かに布にしみこんでゆく南無妙法蓮華經の文字は慈悲の象徴ではあるが、一度邪に対しては、断じてそれを破折して止まぬものである。さればこそ純白の布に書かれた伸び伸びとした七字の筆法は、一切の邪なるものを切断する長い剣の如き風格があつたのである。

書き終つた聖人は、側に墨をすつていた日昭を御覧になつて、にっこりと微笑せられた。日昭

とは過ぐる年の十一月、「叡山から参った成弁と申す僧でございます」と、この草庵を訪れた僧侶である。聖人よりは一歳の年長者であるが、叡山において当時の蓮長である聖人の法話を聞いて、深く聖人の法義に感服し、聖人が叡山を下りて一宗を開けば、必ず自分は第一の弟子として給仕奉公いたしたいと約束した人である。

叡山における権律師という僧位を潔よく返上して、今は名も聖人より日昭と賜わって、一所化として聖人に仕える身であった。

「あれなる旗竿に打ち樹てましょう」

「さよう……」

日昭の言葉に聖人は答えられた。

広いといえば名越の山全体が庭である。せまいといえば軒下より三尺程が庭であろう。

その庭に題目を書いた布が、青竹の旗竿によつてかかげられた。鎌倉の海を渡つてきた冷たい風が、名越の山肌に温められた空気にぶつかるせいであろう。題目の旗は急に生氣を得て踊り跳ねる、竜の如くに突如空にかけり始めるのであった。

お題目の長い筆法は旗のはためきに調和していた。題目は生きているのだ。

「日昭、あれが明日からの日蓮の姿だ」

「いざましこいどびいざいます」

師弟ともに庭の旗の自由奔放な動きを、草庵の中から、じつと眺めていた。

「明日からわしは鎌倉の街頭に立つ、あれなる旗が日蓮の唯一つの旗標じゃ」

「いよいよ法戦の時期が到来いたしましたか、お目出度うございます……この日昭も非力ながら共々お伴をして随力演説をいたしとう存じます」

「……そのことだが、実は申しにくいが日昭おん身には、これからずうつと留守を頼みたい」

「えっ」

日昭は驚きの声を放つと思わず庵室の中を見廻した。

「これこれ皮肉に部屋の中なぞ見廻さんでもよい。何一つないこの庵室の留守番と思われては困る」

聖人はこういつてから、静かに語調を改めて語り出した。

「仏の精神は法華経なり、これを知れる者は日本国に但日蓮一人である。この一言を申し出すならば、父母兄弟師匠に国主の王難必ず来たることは経文に明らかである。

さりとて仏道を求めてここに二十年、これを知つて黙せば慈悲なき者となり果てねばならぬ。

いおうかいうまいかこの二言、日頃月頃念じておつたが、法華経、涅槃経等によつてこのことを考えてみると、いわずば今生はことなかるうが後世は無間地獄疑いなし、いうならば三障四魔必ずきそい起るべしとあつた。わが身に難の来たることは敢て意とせぬが、国主の王難が大恩ある

両親師匠にまで及んだ時、日蓮の信念が退転するようならば言い出すことは思い止むべしとまで考えたのであるが、法華経の宝塔品に六難九易の譬がある。即ち我等程の小力の者が須彌山をなげるとも、我等程の無神通力の者がかれ草を負うて大火に焼けずとも、我等程の無智の者が何億巻の経々を読み覚えようとも、法華経は一句一偈末代には保ちがたしとあった。法華経は必ず末法の世の中に流布すべしとは仏の遺言である。

だが、これを弘むる者には大難必ず来たと仏は繰り返し、繰り返し戒められておる。生々流転の法界を観ずれば、我等三界に生を受けし骨は山と積まれよう。その間、妻や子のために流した涙は河と流れよう。だが未だ一滴の涙も法華経のために流さず、一骨と雖も未だ仏に捧げたことがない。日蓮今度強盛の菩提心を起こして退転せじと大願を立てたのである」

この言葉をきく日昭の顔には、感激の色がありありとあらわれてきた。

「そこで日昭おん身には後を頼むぞ。この日蓮は明日よりは流罪死罪の的となることを覚悟して、鎌倉の辻々に南無妙法蓮華経と唱えるのだ。石が飛び瓦が飛び、刀が杖が我が身に加えられることは経文に明らかである。

だがこの難が来れば、きたる程、法華経は必ず弘まって行く、これまた法華経に説くところである。さればおん身は宜しく内にあつて、やがてはわが弟子わが檀那となるべきものをひきいてわが法義を守らねば。たとえ法華経の正義が弘まっても、その草創の間に、和党ども一族が

法敵によつて亡ぼされたのでは、弘教もその効果がない。

万が一日蓮が迫害によつて倒された時は、日昭おん身が始めて立つ時だ。その時までおん身は留守番じゃ、いいかな、日蓮が鎌倉の辻々に南無妙法蓮華経と唱えておる間は、おん身はいよいよ内にひそんで全くの影の人となつてわが後継者を養つて下され、決して日蓮と同罪となることのないよう大いに用心して貰わねばならない。

守るも攻めるもみな法華経のため、国のため、神のため、一切衆生のためである。いなおん身の守り堅ければこそ、この日蓮法華経の大利剣ひっさげあの題目を旗標として、法戦に後顧の患いなく打つて出ることが出来るのだ。鎌倉の覇者北条殿を背景として大伽藍を誇り錦欄の法衣を着て、我こそ仏弟子也と称する念禪真言の魔作沙門が東海の海人の子日蓮が敵手かと思えば、日昭、面白いではないか……」



小町の辻

一

「二十数年来、大風大雨大地震、或いは飢饉或いは疫病等々、こうも天変地異が打ち続いたことは我国開闢以来全くないことである。

ここに集つておる人々の中にも、父母を失つた者、或いは夫を妻を子供を失くした人々は多々あるであらう。人の生を営むことは斯くも悲惨なものであり、痛ましいものであらうか。

だが、あれ……あの路傍に咲く雑草の花をみよ、与えられた生命を楽しく保つて、小さしといえ綺麗な花を咲かせておるではないか、また仰いで鎌倉山の樹々を望め、青空に今も亭々と聳えて、人の世の哀れな歴史を傍観しておるではないか。山川草木のみが天地の生を悠々楽しんで、人の命だけが、打ち続く天変地天にあえぎあえぐ、かくもはかないものであらうか。これは不思議と申さねばならない。各々方はこれは如何なる原因によるものであらうかと考えたことが

あるか。

天変地異はこれ天然の現象であつて、人間には毛頭関係のないことであると、各々方は思案するであろうが、それこそとんでもない間違ひである。自然と云うものは無慈悲ではない。万物を育成してゆくこの自然がそれ程無慈悲であるならば、人類などはとつくの昔に滅亡しておつたであらう。しからば何故、かくも悲惨な世相が続くのであらうか、親が子の物を奪つて食い、子が親を殺してその物を食らい、尼憎が人肉を喰つたと噂される今の世の中である。何人も神も仏も無い世の中と思つておる。

しかるに今この鎌倉には鶴ヶ岡に八幡宮社があつて世の人々の信仰をあつめておる。建長寺も昨年万貫の金を投じて建立され、わざわざ宋の国より道隆を呼んでこれを生き仏と崇めておる。五万五千貫の大仏が莫大な金子を投じて造立された。長谷には利益広大と云われる観音がある。その他寿福寺、光明寺、新善光寺、大倉の阿弥陀堂等々仏閣は薨を連らねて建ち並び、災を除かんとして国主は民の膏血をしぼつて仏のすみかを造立するに騒がしいが果してそこに仏がおるのであらうか。天変地天のある毎に、幕府は莫大な施物をこれ等の寺々宮々に寄進して御祈禱をしておるが、火に油をそそぐが如く、年々その災害はいやましてゆくのは如何なる故であらうか。由来わが国は神国といわれ、その神々が昼夜にこの日本国を守護するをもつて役目としておる。その八百八万の神々が守護の役目を怠つておるのであらうか……仏は常住といわれておるの

に、その仏が慈悲化導をおしまれておるのか、或は威光勢力を減じたのであろうか。各々方もこれ等を不審としておるであらう。寺々の造立は皆幕府のすることであつて見れば、各々方が疑いを起す余地もないのも無理はない。相手が神仏であつてみれば不審のたてようもないであらう。

今ここに日蓮は断言する。たとえ幕府が己れが政所を残して鎌倉中の民家を取り払い、そこに千の神社、万の寺塔を造立して御祈禱を行うとも、天変地天は必ず打ち続くであらう。何故か、この鎌倉には神や仏はましまさぬのだ、否只今の日本国には諸天善神諸仏諸菩薩がましまさぬのである。しかるが故に近年の天変地天が打ち続くのである。では何故諸天善神諸仏諸菩薩がこの国を捨てさつたのか、世を挙げて皆正にそむき人悉く悪に帰するが故である。日蓮すこしも自己の才覚知弁をもつてこれを断言するのではない。日蓮は法華経という明鏡をもつてこの暗冥の世相を照破してかく断言するのである。

人の行いは心の現われである。故にその心が曲つておれば世の中も曲るであらう。曲つておる世の中に諸天善神諸仏諸菩薩がどうしてましますであらうか。天変地天飢饉疫癘が打ち続くのは当然である。曲つておる人心を正しくすれば世も正しくなり天下泰平の国土となることはこれまた当然である。人心を正しくするものはなにか。それは正しい教である。正しい教とはなにか。曰く法華経である。

法華経こそ仏説中の極説である。仏自らが諸経中王最為第一と云われておる。仏説の如くん

ば、過去の七仏千仏遠々劫の諸仏の所説現在十方の諸仏の諸経も皆法華経の経の一字の眷属である。凡そ僧たるものは仏弟子也と任ずる以上は、仏の金言を最も重しとせねばならない。仏説以外に己義を構え自己の所見をもつて立つ者はまさしく魔作沙門である。いかに今の世の中にこの魔作沙門の多きことか、鎌倉の七堂伽藍にこの魔作沙門達が錦欄の法衣を身に纏って魔道を興行し、民の血肉をあつめた国主の施物を貪り喰らって、その身肥大すれば、やせる者は民百姓ばかりである。さればこそ鎌倉の海水は変色し、八月に雪降り六字に結氷をみるのも敢て不思議とせぬ。

これ等魔作沙門が興行する宗旨は如何なる宗旨であろうか、日蓮をしていわしむれば、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道墮地獄の根源、法華経ひとり成仏の法なりと叫ばざるを得ないのである。

応う各々方、惑耳驚心する勿れ。

これがこれ、今日、法華経の旗標たる

南無妙法蓮華経

の大旆を政所に程近きこの鎌倉の小町の辻に打ち樹てた由縁である……

「念仏無間、禪天魔、宣言亡国、律国賊だつて、ひどい坊主が現われたもんだ。坊主が坊主の悪口をいうようじゃ、世も末だよ」

「それがねえ、あんたきいてわり合いに理屈が通つてはいるんですから不思議ですよ」

「いくら理屈が通つていたつて、他人の悪口を言うのはよくないよ。まして坊さんなら、そんなこと位は知つている筈だ」

「ところが面白いことをいうんですよ。今日蓮が云うところは、敢て自説に非ず、経文に則つてこそ念仏無間禪天魔真言亡国律国賊というのだと、意気込んでおるんですぜ」

「とんでもない話だ、なんで仏様が天魔の教や、無間地獄へ行くような教なんかを説くものか。律を説いたのも真言を説いたのも、皆同じ一人のお釈迦様がお説きになつたのだ、馬鹿馬鹿しいにも程がある。大体仏様が沢山の御経を説いたのはこういう訳さ。世の中には甘いものの好きな奴もあれば、辛いものが好いと云う奴もおる。それと同様さ。」

禅の好きな奴もおれば、念仏か大好きという奴もおる。まあまあ好きずきにやれというので沢山のお経があるのだ。性欲不同なるが故に種々の経を説くとある。そんなに効力のないものなら

ば、北条時頼公という程の名君が、わざわざ宋の国から道隆上人をお呼びして、建長寺という禅寺を建てる筈もないし、念仏が無間ならば、莫大な費用をかけて、長谷にあんなでつかい仏様をつくる訳がない。まあまあ私は小町の辻に、その日蓮とかいう坊さんの話をききにゆくひまはないねえ、あんた一人で行きなさい」

「仏法と萱の雨は外へ出てきけということがありますよ。家の中に引つ込んでいたんでは、萱葺き屋根にふる雨はわからない。仏法の話も自分の家で自分の頭で考えていたって訳の分るもんじやありませんよ。一つ出かけて行つて小町の辻であの坊さんの話をきいてみましょうよ。」

五、六十年前までは、仏教の中心地は京都であつたかも知れないが、今では大きな寺かつぎつぎに建立されて、この鎌倉こそ、仏教の中心地になつてきておる。その中心地でしかも政所の目と鼻との間の小町の辻で幕府の御帰依最も深い、念禅真言を罵倒して、諸宗無得道墮地獄の根拠とやっておるんですから、勇気だけはたいしたものですよ。私は丁度承久元年の生れで四十六歳だが、その四十六年間に、天変は百八十回、地震は百四回、大風雨七十八回、洪水十九回、火災五十四回、炎旱六回、飢饉七回、疫病十六回、騒乱三十六回というんじや、こりや全く生きながら無間地獄におるようなものですよ。生きておるのが不思議みたいなものさ。

ああ、世の中には神も仏もないものかと常日頃思つておつたんですが、この間、小町の辻で、日蓮という坊さんのお説教を聞いて驚いた。

経本を引いて今の世相を論じておるんですよ。驚いた坊さんが世の中に生れたもんだ。政治を論じ天下国家を論じておるんだから、一寸驚かされたです。坊さんというものは出家という名に隠れて、世俗のことは一向に我れ関せずえんというのが先ず相場……禅宗では承陽大師の道元禪師が、承久の乱の時に御年二十二歳で一切経を京都建仁寺で閲覽中であつたことを自慢すれば、念仏では木曾義仲が京都に攻めいつた時、その戦争を知らん顔で、黒谷で源空法然上人が念仏を唱えておつたことを有難がつている。ところがどうです。日蓮と云う坊さんは凄いことをいいますぜ。

大集経と云うお経を引き、大集経の三災の中二災早く顕われ一災未だ起らずいわゆる兵革の災なり、とか言つて、疫病と飢饉の大災害がかく年々相い続いたから、これで終りと思つたら大間違いで、こんどは兵革の災というのが後に来るんだというんです。

兵革の災いというのは、国の中に同志討ちが起り、やがては他国侵逼の難といつてよその国がこの日本国を攻めてくるというんだから驚いた。飢饉、疫病が続いた後で、よその国が攻めて来たんではたまらない。

「そんな馬鹿なことがあるか」と思わず誰かがど鳴つたら、その時日蓮という坊さんにはっこり笑つて言われた。

「そうだ貴公の言う通りだ。そんな馬鹿なことがあつてたまるものか、国の亡びるは大事の中の

大事である。その大事をば未然に防がんがためにこそ、今この日蓮がこの鎌倉の小町の辻に立つておるのだ。薬師経の五難は各々方が、現に自分達の眼でみたが、残る所の後の二難、他国侵逼の難、自界叛逆の難がまだまだ来るぞ、金光明経や仁王経に説くところの他方の怨賊来たつてこの国を侵すの難が残つておる。国をうしない家を滅せば、汝等何れの所に世を逃れようと思うのか……」温顔に似合ず、すさまじい弁舌だった。もしこれが本当なら大変なことだが、嘘だったらもつと大変なことだ。こんな人騒がせの話を幕府のお役人が黙つておる筈がない。どうです。小町の辻にいつてみようじゃありませんか」

「行きましょう。たかが坊さんの有難がらせのお説教かと思つておつたが、話の案配では大分様子が違う。さあさあ一緒に行きましょう」

「話がそうきまれば誘つた甲斐がある……さあ出掛けましょう。なにしろ坊さんが人馬の往来のげしい道端でお説教をするというだけでも前代未聞なことなのに、その話の内容が變つてるんだからききものさ。日蓮さんに言わせると、他国侵逼だ自界叛逆だという大難の來たる原因は、皆悪法のとかに因ると言うのだ。その悪法とは今流行の念禪真言だと言うのだから變つてゐる。お前さんもさつき言ったが、そんな悪法をお釈迦様がお説きになるはずがないじゃないか、私だつてそう思つておるんですよ。ほうら御覽なさい。あそこだ、あそこだ！

おやつ、石を投げつけてる奴がありますぜ。無理もない。あんな悪口を言つて、今日まで生き

ておる方が余程不思議な位ですよ。お前さんなどは、すぐ喝つとなる方だから、手廻しのいい所で路々石の二つ三つは拾つていった方がいいですよ」

鎌倉の小町の辻、時は建長六年の春、

人々の集まる迄、音吐朗々と題目を唱えておつた聖人は、時分はよしと思われたか、

「国難来たる！」

国難来たる！王土に生まれ誰か国を思わざる者があるうか。国を思うものは暫く歩をとどめてこの日蓮がいうところをきけ……

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

聴衆に向つて先ず放つは四箇の格言であつた。

三

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

今日もまた、小町の辻に聖人の四箇の格言の声が聞える。大名小路とも武者小路ともいわれる

諸役所中の真中にある鎌倉の小町の辻である。西の方には將軍の館があり、二丁とは離れておらぬ所に執権職の屋根が見える。聖人の唱える四箇の格言も、風に乗って執権等の耳に這入ることもあろう。

その執権職は大の念仏者であり、禪の擁護者であり、一たび戦争病氣出産等々が起れば真言の力を借り、律僧はまた国師としてこれを仰ぐという、なんでも屋であるから面白い。

上の行う処、下これを習うで、民百姓は、執権職国主の御帰依深い法であるといつて、各人各説、てんでに信仰しておるのがこれ等の宗旨である。この宗旨に対する聖人の断案は、

諸宗無得道 墮地獄の根源

法華経独り成仏の法

であった。当時の鎌倉の人口は現在我々が想像するより遙かに多かつたに違いない。(昭和二十六年十一月二十一日鎌倉遊覧バスガールの説明は当時の人口二十四万と称す。現在同市の人口八万五千、筆者註) 人が騒ぐのも無理はないが、人が集つて来るのも無理はない。

南無妙法蓮華経の旗を背後にたて、前に負笈を置き、その上には法華経八軸の経巻がのつてゐる。聴衆の集りをみて、時分はよしと思われたか、聖人は温顔をたたえて口を開かれた。

「……無間地獄は死んでから後のことではない。今の世相が即ち地獄の世の中ではないか。打ち続く天変地夭の姿を何とみる。これは一体どうしたことか、日蓮は十数年来これを不思議とし

て、これを糺明するために經文に眼をさらした。

しかるにかくなることが当然な証拠を經文に見出したから、これを公言するのだ。法華經に今この三界は皆わが有なり、その中の衆生は悉くわが子なりといわれたこの娑婆世界の本師たる教主釈尊を全く忘れて他方無縁の阿弥陀仏を信仰するところより起つておるのである。娑婆世界以外の仏を頼んで、この世の中は仮りの世であるとし、弥陀の世界に生れてゆくことを念願としておる。いわばこの世の中は一夜の宿にすぎないという考え方である。これではどうして日本守護の諸天善神がこの土を守護してくれようか。われ等はこの土を去つて西方安樂浄土の世界に行くものでもなく、東方淨瑠璃世界にゆくものでもない。

では一体われ等は何処に行くのか。東西南北何処にもゆかぬ。この大地に今日蓮が立つが如く、この土に永遠に住するものである。この世の中が、余りにも悲惨な世の中だから早くよその世の中に生れたいと考える。一応もつともだ。だが、自分の子供は自分の孫達は、やはりこの土に生れ、この世の中に棲んでおるではないか。何故悲惨な世の中ならばそれをもつとよい世の中にしようと考えないのか。努力しようと思まないのか。仏は常住此娑婆世界といつて、永遠不變にこの娑婆世界に住されて、わが子たるわれわれ一切衆生に慈悲化導をたてられておられる。しかるにその仏をないがしろにして、娑婆世界の一切衆生には、全く縁もゆかりもない他方の阿弥陀仏を拜んでおるのが現状である。日本国の一切は釈迦の仏像の指をきつて弥陀の手相にこしら

えなおしておるのが今の世の中である。これは信仰の上からいえば、仏に背くものであり、実生活の上からいえば、主君に背くものであり、親に背く者である。

このような人々の集りを地獄の世の中というのである。衆生の心けがるれば土もけがれる、常寂光土なるべきこの上が、無間地獄の世の中ともなるのである。頻々たる天変地天は実にこの悪法のとがによつて競い来るといわなければならない。

そもそも念仏の法門は唐山楊州の善導和尚にことはじまる。その善導は一天四海善導和尚をもつて念仏の善知識と仰ぐといわれ、毎日の所作には阿弥陀経六十卷念仏十万辺と云い、称名念仏一辺毎に三体の仏を口より出すと云い伝えられたる人である。だがその善導和尚の臨終はどうであつたか。善導和尚最後臨終の言葉に「此の身諸苦に責められていとうべし、暫くも休息することなし」即ち所居の寺の前の柳の木に登りて西に向いて願つて曰く「仏の威神以て我を取り観音勢至来て又我を助け玉え」と唱え終つて青柳の上より身を投げて自絶す、とあつて、三月十七日に頸をくくつたが、縄でも切れたのであろう。どさつと堅い土の上におちて、二十四日に至る七日七夜うめき叫んで死んでおる。

これがこれ、念仏の法門を最初にいい出した善導和尚の臨終である。念仏は無間地獄の業とは、日蓮が発明ではないぞ開祖御自身が証明しておるのだ。流れを汲む者はその源を忘れず、法を行ずる者はその師の跡を踏むべしとあれば、皆の衆の中で念仏を唱うる人ならば、すべから

く、師の跡を踏んで臨終の時に善導の如く頰をくくらねば師匠に背く咎があるであろう。どうじや、御返答は如何。

涅槃經に「若し仏の所説に順わざる者あらば当に知るべし、是の人は是れ魔の眷属なり」とあるが、仏の所説に従わず、經文も不用と叫びながら、しかもこれ仏説なりと自語相違の仏教を興行するものありとせば正しくこれこそ涅槃經に説く所の魔の眷属であり、天魔の教えといわざるを得ない。

今の執權職北条時頼公の帰依する所の禪がそれだ。宋の国より態々道隆を招いて建長寺を地獄谷の刑場の跡に創建したが、建長寺こそ正しく名の示すが如く地獄谷の魔城である。彼等は教外別伝、不立文字、仏祖不伝と称するが、これこそ天魔の声である。教外別伝、不立文字とは何処の經文にあるやといえ、大梵天王問仏決疑經にあると答えるが、残念ながらその様な經文は貞元開元の經録にもない、全く跡形もない偽文である。

經文不用といひながら金剛經、円覺經を誦誦し、祖師不用と云いながら達摩大師を本尊とする。經文は月をさす指の如し、月を眺むれば指は不用也といひ、仏像を焼いて尻をあぶつて大悟徹底すと独悟す、これ天魔の所業に非ずしてなんぞ、すべてが目的のための手段也といわば、父母は生れる迄の手段か、天の三光地の五穀も、我れが生きるための手段か、これ理性の仏を尊んでわれに均しと思ふ増上慢の天魔の所業である。

止観に云く「これ即ち法滅の天怪、時代の天怪」と喝破しておるが、正しくこれ鎌倉時代の天怪であり、禅こそ天魔天怪の悟りと言わねばならぬ……」

四 条 金 吾

一

由比が浜の朝である。砂地の小高い丘に腰かけて、二人の若い侍が話し合っている。

飯島の辺りに大きな船が着いておるが朝が早いので人影は一人もみえない。

二人とも、建長寺に昨夜は参籠しての帰り路、八幡宮より十八丁の参道をぶらりぶらり話をしながら、とうとうこの浜辺にきてしまった。

一人は家が長谷にあるからよいが、一人の家は比企谷にあるので大分廻り路である。

この辺で別れねばならぬので、暫くの間ここに腰かけて話をしているのであった。

「鎌倉は幕府の所在地としては、何んと言つてもせまい。近頃のように、こう家が建てこんでは益々狭くなる一方だ。ここに来て大きな海をみると、いつも俺はそう思うのだが貴公そう思わないか」

「だが、この鎌倉こそ天下の要害だ、無双の要害たる碓氷と箱根をとりでとなし、関八洲はその内城で、この鎌倉こそその牙城だ、そう思ってみよつ、鎌倉は小さくないぞ大きいぞ」

「三方は山で、一方が海、いかにも要害は堅固にみえる。要害堅固なだけに却つて外の状勢が分らぬ、この小さな所において天下の形勢が分るかなあ。

貴公は直参だから、そう思つてもよいかもしれないが、攻める方から言えば、またそれ相
当の弱点はあるものだ、鎌倉七口の中では先ず第一が稲村が崎だ、ああ干満の度合が著るしくて
攻手には究竟な大手と行く処だなあ」

「止せ止せそんな話は、止めておけ、時に話は違うが、近頃評判の小町の辻の日蓮、貴公はなん
と思う。あの禅天魔と言う叫び声、お互いに建長寺に参禅しておる手前、ききずてならん話では
ないか、貴公程の短気者が黙つてきいておる筈がない。どう思う、一度貴公に聞いてみたいと思
つていたのだ」

「その事よつ、実は拙者の方から先きに貴公に聞いてみようと思つておつたのだが、言い出し
かねておつたのだ。本当のことを言うとおの聖人の辻説法は、拙者は実は心服しておるのだ」

「ええつ心服つ」

「そうだ心服しておる。だが、それが言い出せなかつたのだ。貴公だから、打ち明けるが本当な
のだ。建長寺の唐風づくりの金殿玉楼の贅を極めた仏殿になくて、仏法の真理はあの小町の辻の

薄鼠白五条の塵にまみれた聖人の説法の中にあるような気がするのだ。拙者はそれを求めたいと、実はひそかに願っておるのだが、まだぶつかってゆく勇気がないのだ。何処かで疑っておるのかわからんが」

「おいおい貴公の方が、俺を建長寺の参禅へすすめた位でいながら、今更、そんなことを言う奴がおるか、それこそ天魔の声だぞ」

「だから、仲々、言い出さないでおったのだ。貴公が口を切ってくれたので、実は有難いと思っておる」

「貴公も代々江馬家に仕えるれっきとした医者だ。学問識見その医術、友人ではあるが拙者は貴公を尊敬しておるのだぞ。それがそのようなことを言い出すには根拠があるろう、それを聴かせろ、ただ、日蓮が諸宗を罵倒しておる勇氣に感心したなぞとは言わせぬぞ、どうだ。きこう」

「待て待て、拙者は貴公の言われる通り、医術を業とするものだ。常日頃、真の医術は人の肉体のみを救うものではなくて、魂を救うものだと思っておる。現在の医術は草根木皮を煎じて、人の肉体を治療しておるが、これで医術はよいのだろうか、それだけが、医術の全部なのだろうかと考えたのだ。そう思ってみると、患者に投薬するのが恐ろしくなってきた。禅にこったのも実はそれが動機だったのだ。その悩みは解決できなかった。和尚の提示してくれる公案を、あつちをひっくり返し、こつちを突ついて、想を練った。その間中は実に面白い。生活から遊離した公

案だから想を練るには面白い。たまにわかったような気がすれば悟ったような気持にもなる。だが悩みは解決されぬ。禅宗の悟りとは悩みを悩やまぬことだとわかった。だが、それでは医者として患者に接してゆけぬ。医者とは患者とともに悩んでやらなければならない。莫妄想とは簡単にやってゆけぬところに患者のいたみがひそんでおるのだ。坐禅一方では拙者の悩みは解消せんぞと思つた時分に、あの聖人の説法を小町の辻で聞いたのだ。だから、口には出さぬが、あの辻説法には感心させられたのだ。そして或る日、あの聖人を名越の草庵に尋ねた」

「ええつ」

相手はさすがに驚いた。

「驚くだろう。だがまだこの珠数は切つてはおらない、そこ迄はいいくないのだ。昨夜貴公とともに建長寺に参籠して大臣山になく鼻の声を一晚中きいておつたが、頭の裡では名越の草庵を始めて訪うた時のことばかりで一杯だった。昨夜の公案などは実はそつちのけで、貴公にはすまぬと思つていたよ」

「こいつめ、ひどい奴だ、俺の顔が阿呆にみえたことだろう。禅宗は坐禅がすむと蚤をとるではないかなあ」

「そう迄言うな。小町の街頭で質問するのも礼を失すると思つて、或る日、あの聖人を訪ねたのだ。ところが最初から一撃をくつたぞ」

「今日本国の人是一人もなく重大病人であることを医者たる貴公は知らないか、とやられた。禅宗の公案よりはすごい勢いだ。拙者が当惑しておると「所謂、大謗法の重病である」と言われ「今の禅宗念仏宗真言宗等は余りに病重きが故に、わが身に覚えず人も知らぬ病である」と喝破されたのだ。更に語をついで聖人は語られた。浄名経、涅槃経には病いある人仏になるべしとある、それは病によつて道心を起すが故である、してみるならば病も仏のお計いと思わねばならない。故に病の原因を知らんと思わば、先ず仏のおぼしめしを知らなければ、人の病など治るものではないぞとさとされた。草根木皮を煎じて人の病の根本が治るものか、されば仏をば大医王とも名ずけるのだ。仏の良薬こと南無妙法蓮華経であると言われた。

進士殿、一度貴公とともに名越の聖人を尋ねてみようではないか、若しかしたら、拙者はこの禅宗の珠数をきるかも知れんぞ」

四条金吾と言われる若い侍は、進士太郎の眼前に、腕の念珠を示してみせた。

一一

聖人の名越の庵室に今宵は珍しく客人があつた。それは四条金吾という、今年二十六歳の若い侍である。名越家の江馬入道光時に代々医術をもつて仕える侍で、くわしく言えば、四条頼基通

称は三郎、金吾は役名で佐衛門の尉の唐名である。

時折、海の潮鳴りが、松風にまじつてきこえる静かな宵であった。

鎌倉の小町の辻で、聖人の大獅子吼を耳にした四条金吾は、己が帰依するところの禅宗を強く破折されて、始めはいきどおつだが、冷静になつて考えてみると、何か心に引かれるものを感じて、路傍で詰問するような、はしたない真似はせず、堂々と聖人の庵を尋ねたのであった。その訪問は無論聖人から歓迎された。

小町の辻でみた聖人は巍然として、とりつく術もないような、所謂秋霜烈日といったような観があつたが、庵室の聖人は、それとは全く異なつて、春風駘蕩たるの感じであつた。客に接する態度ではなくて、家人に面するような安易さがあつた。

「四条殿つ」

聖人は言葉をつづけた。

「仏法はもともと唐来ものだと思つておるであらうが、そろそろその考えを捨てねばならん時期が来ておるのだ。大体がこの国の仏教はすべて唐来ものであつた。某の僧侶が支那へ留学したら念仏が流行しておつた、それでその流行しておつた念仏をこの国に流行させた。その次に某の法師が支那へ渡つたら、念仏の宗旨はとつくにすたれて、禅宗が大流行であつた。それで、今度は禅宗をもつてきてこの日本国に流行させる。すべてがこの調子であつた。遠い昔に三論法相等

の宗旨が弘まったのもこの轍であった。

しかしこれではいかん。彼の国に流行した法が必ずこの国によしという法はない。時と処とが異なれば、必ず人の心は異なるものだ。さりとて人心にのみ迎合する教であつてはならぬが、それを全く無視した教であつてもならない。

ここをよく考えねばならない。日蓮は私の心を去つてこのことを考えた。私心を去るとは仏の説の如く仏教を考えることだ。

仏の教とそれをきく人の心、所謂機と時代と国家と、仏教の流布の前後即ち序の五つの方面から仏の教えを考えてみることだ。これを教機時国序と一口に言う。この五つの面から考えれば今は一体いかなる時代であるか、仏教から申せば今の時代は末法と言う時代だ。

日蓮がいうのではない。仏自らが白法隱没といわれて、仏の正しい法が失われる時代であるといわれておる。仏の滅後、正法千年、像法千年をすぎて今は末法の時代、末とは無の意味で、仏の正しい法は無いという時代に入つておるのだ。

いま日本国の人々は、われわれこの娑婆世界にすむ人間には、全く無縁無関係の西方の弥陀の称号を異口同音に唱えて、一向に釈迦如来の名号を唱える人は全く一人もおらない。

釈迦如来の教えが正しく行われておるならば、誰が念仏を唱えるものであろうか。誰が觀世音の名号を唱えようか。すでに釈迦の教が、末法にはいつて、行われておらないと言う証拠は歴然

としておるではないか。

しからは末法たる今の世は、仏もなければ法もないのであるうか。否、仏はこの時代を予見せられて、その末法、その白法隱没の時代に流布すべき大法を残されておるのだ。

今末法に入つてやや二百歳、日蓮は仏滅後二千七百七十一年に生まれて本年三十二歳、この大法を弘むるの人なりと覚悟し、仏の予言に従つてこの土に生を受けたりと確信して、小町の辻に立つたのである。その大法とは法華經であり南無妙法蓮華經なること勿論である。四条殿、日本国の一切衆生は、今日蓮によつて始めて、末法における大法たる南無妙法蓮華經の声を耳にするのである。釈尊もその心中にはあれど、時ならざるが故に秘し給うた南無妙法蓮華經を五濁悪世の末法なるが故に、今日蓮が南無妙法蓮華經は声をおします唱えるのである。

五濁悪世の末法なるが故に、日蓮が振舞は仏の久遠の時代の如くあらねばならない。日蓮がこの大法を説くに殿堂に住せず、塵、埃りにまみれて鎌倉の辻々にたつ因縁もここにある。仏が始めに法を説かれた久遠の時代の任務はなんであつたか、下種結縁である。末法の振舞も久遠の振舞も同じである。末法即久遠、久遠即末法である。

末法なるが故に今は下種結縁の時代である。南無妙法蓮華經をもつて日本国の一切衆生に下種結縁するの時代である。

法華經は八か年にわたつて釈尊が説かれた法であるが、この法華經の付属が舍利弗、目連等々

の仏在世の弟子達に何故なかつたかを考えてみなければならぬ。また、迹化の菩薩方がわれこそ末法において法華経を弘むるの人たらんと仏前に誓言を立てたのにもかかわらず、仏はこれを退ぞけて、なに故に地涌の上行菩薩に末法における法華経流布の任務を与えたか。

仏は悪世末法の世の中が、仏の滅後、二千年たてば必ず来たと予見されて、その時まで、この大法を上行菩薩に付属されて、秘しおかれたのである。

末法においてこの菩薩がこの土に出現することは仏の予言であり、この菩薩の出現がもしなければ、仏の一切の所説は皆偽妄となり果てるのである。四条殿っ」

聖人はにっこり笑つて言葉をきつたが、更に強く言われた。

「御貴殿もこの日蓮を詰問にきたのであろうが、先ず釈尊を否定せねば、この日蓮は否定できぬぞ……」

「仏法が唐来ものであると言う時代がすぎさつたと言われるならば、聖人の唱える南無妙法蓮華経と言う仏法は、いずれの国の仏法でございませうか」

四条金吾は聖人に問うた。

「南無妙法蓮華経はいずれの国の仏法かと問われるか、四条殿、御貴殿はいずれの国の人かと問われて何んと答える……」

「……」

四条金吾は聖人に答えるすべがなかった。

「余りわかりきったことで返答につまるであろう、ははは……四条殿、御貴殿は日本の国の人じゃ、日蓮の南無妙法蓮華経と唱える教は、日本の国の教だ。経文に明示されたる如く、仏滅後二千五百年中に日本において始めて唱えられたる南無妙法蓮華経という日本の仏法だ」

「日本の仏法！これはこれは珍しいことをうけ給まわります。仏法は既に印度に起り支那朝鮮を経て我が国に渡来いたしたものの、これに日本の仏法などと称するものが果たしてありましようか、ちつと疑問にございます」

四条金吾思わず言葉に力をいれて聖人にせまつた。

「四条殿つ、御貴殿は太陽を拜んで、あれを日本の太陽とみられるか、或は隣国支那の太陽とみるか、遠くは天竺国の太陽であると考えられるか。まさか、そんな愚かな考え方はいたすまい。仏の教もその日輪の如きものだ。どこの国の太陽でもない、と同時に、またどこの国の太陽でもある。仏法もまた、その通りである。釈尊は印度に出現して一切経を説かれた。但し法華経の流布は悪世末法の時代とし仏の滅後二千年と時代を断定され、しかもその流布者を法華経に指定されておる。法華経こそ釈尊の滅後における生命である。この生命も流布すべき時代が来なかつた故、二千年という長い間いたずらに経蔵に埋もれて、文字のみの法華経であつた。しかしながら、釈尊の教が滅亡し仏教という仏教が、その経文を説いた釈尊を全く軽侮して、大日如来を信じ阿弥

陀仏を礼拝するといった悪世の末法において、始めて法華經の生命は脈うつてくるのである。

この法華經は伝来の当初より東方の国に縁ありとされて、東へ東へと渡つてきたのである。法華經寿命品に如是東行とあるが如く、この法華經も東へ東へと招来されてきた。東の果なる国の日本の国へと法華經は如是東行してきたのである。日本の国において法華經の東行はきわまつた。もののきわまる所はものの始まりである。

日本国を中心として法華經が世界中に弘まつてゆく証拠はここにある。

釈尊の仏法は東漸して日本に来たつたが今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は、日本国を中心にして却つて西漸すべき仏法である。

なんとすれば、既に印度支那においてすら釈尊の教えは經文の千言の如く行われずしていたずらに仏を誹誇する教のみが行われておる。

四条殿つ、南無妙法蓮華經とは仏の名号ではない。仏は何処より生まれてきたのかを考えたことがござるか。仏は何によつて悟りを得たかを思ったことがござるか。今日木国の人々は仏は拝むべきものと思つて、自分達よりも遠い所に仏を置いておる。所が仏はただ拝むべきものではなくて、実は自分達が到達すべき境地なのだ。法華經の自我偈の末文には速かに仏身を成就することを得せしめんとあるが、これが仏の衆生に対する願望である。では、何んによつて、その仏身を成就することが出来るであらうか。ただ仏を拝むことのみによつてはその境地には達せられな

い。

仏が仏になったのは南無妙法蓮華經の力である。故に南無妙法蓮華經は三世十方諸仏の御師とも称し、三世十方諸仏の父なりとも言うのである。

釈尊すら南無妙法蓮華經即ち法華經を師匠としてその悟りを得たのである。この南無妙法蓮華經が、今日本国を中心としてこの日蓮によつて一閻浮提に弘まつてゆく。印度支那に起つた仏法は、二千年前の過去の仏法であつて、当今の如き惡世末法の衆生は到底救うことも出来ぬ教である、釈尊すら南無妙法蓮華經とは唱えられてはおらない。しかるに日蓮が只今南無妙法蓮華經と大声に叱陀する由縁は、これこそ新しき時代の、新しき仏教として、しかも日本国を中心にして月支漢土にも弘まるべき仏の教なりと、經文によつて判断するが故である……」

天 災

聖人が鎌倉の小町の辻で説法を開始せられてから、三年目の建長八年の二月に暴風雨洪水があり、八月には風雨の大害があり、九月に入ると、赤疱瘡の流行があつた。年号を改めたらなんとかならうと十月五目に改元されて康元元年となつたが、翌康元二年の二月十日に太政官庁が火災にあつたので再び改元して正嘉元年となつた。

正嘉元年の五月十八日に関東地方、殊に鎌倉に大地震があつた。

五月から六月にかけて大旱魃、加うるに、日蝕月蝕が引続いて人心の不安が打ちつづいた。

しかるに八月二十三日の戌亥（午後九時すぎ）の刻に轟然たる地なりがしたかと思つたと、前代未聞の大地震が襲来した（聖人は立正安国論の奥書に、去ぬる正嘉元年戌亥の刻の大地震を見て之れを勘う、と言われておる程の大地震である）当時の記録によれば、神社仏閣のごとき大建築物で転倒倒壊せざるものなしとある。民家はすべてぺちゃんこにつぶれ、山丘は崩れ井水はかれ、大地の裂け目から水が噴き出るかと思つと、中下馬橋の辺りでは数十尺の穴が大地にあり

て、中から青い焰が舌をはくという凄まじきであった。夜中の一瞬の出来事なので、死傷の多いのは想像を絶するものがあつて、鎌倉だけでも死者の数は二万人といわれておる。

余震はその後も引続き起つて、二十五日には余震とはいえぬ、大きなゆりかえしが五、六度も一日中にあつて、鎌倉中の人々は生きた気持もなかつた。

九月四日又々申の刻（午後四時すぎ）に地震。

十月十三日には雷電へきれきの音が終夜やまず、いなずまのはためきの裡に、鎌倉の海や山が不気味に終夜明滅されていた。

十五日、夕刻には大雨があつて驚かされたが丑の刻（午後二時すぎ）には又々地震があつた。

十一月八日には前述の八月二十三日の程度の大地震が又々あつて、この世の終りかと思わせた。

「国土乱れん時は、先ず鬼神乱る、鬼神乱れるが故に万民乱る」とは仁王経に示すところであるが、これ等の天災は何を意味するかと聖人は経文によつて考えたのである。

大集経と言う経文には三つの不詳事をあげておる。一には穀貴、二には兵革、三には疫病をいうのである。穀貴とは食料の騰貴で飢饉である。兵革とは、兵乱の絶え間のないこと、疫病とは悪病の流行をいう。これ等の不詳事がここ三十年來打ち続いて絶え間がない、加うるに薬師経には七難と言ふことが説かれてある。

七難とは何か

- (一) 人衆疾疫之難
- (二) 他国侵逼之難
- (三) 自界叛逆之難
- (四) 星宿變怪之難
- (五) 日月薄蝕之難
- (六) 非時風雨之難
- (七) 過時不雨之難

をいうのである。

聖人の生年たる貞応元年より立正安国論を述作された三十九年間に天災の度数は、ほぼ天変百八十回、地震百四回、大風雨七十八回、洪水十九回、火災五十四回、炎旱六回、飢饉七回、疫病十六回、騒乱三十六回という数である。

さて経文にはこれ等の天災地異はすべて正しき法に人がそむくことによつて起ると明示されている。

国主が正法に帰依しなければ国は謗法の国となる。諸民が謗法ならば天下もまた謗法の国である。所詮天下をあげて誇法の国となれば諸天は国をすて、善神はすみかを加えて他にうつつてし

まう。この故に魔来たり鬼来たり、災起り難起る。天変地異の起るのも正に当然と申さればならない。

天変地異によつて起るところの原因が誇法にあるとすれば、その退治の方法は明々たるものがある。即ち、正法の興隆である。正法とは何か、法華経である。法華経こそ正に鎮護国家の宝典であり、衆生導利の明経である。法華経の理想とするところは、全世界を通じて一仏乗となす寂光土を、このわれわれのすんでおる土地に建設しようというのである。

すべての人々が法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱えるならば、この世の中は仏土となるであらう。仏国土には天変地異もなく、飢饉疫癘もない。万民一同に南無妙法蓮華経と唱えて、妙法独り繁盛せん時には、吹く風も枝をならさず、雨つちくれをくだかず、世は義農の国となり、民は堯舜の民となるであらう。法華経の理想境はここにある。しからばこの理想境に到達する方法は如何。法華経以外の諸経による宗旨を破折せねばならない。天変地異をなくし、飢饉疫癘をこの世からなくすには、法華経以外の諸宗を破折せねばならないという結論に達するのである。

岩本の実相寺

一

岩本の実相寺は（東海道線富士駅よりバスにて約十分、富士川の辺にある）岩本山実相寺と称して、人皇七十四代鳥羽法皇の命を受けて久安年間（八百年前）に比叡山横川の知印法師が建立した勅願寺である。

寺の背後の岩本山に登れば、富士天子嶽は北にそばだち、東には愛鷹の連峰がつらなり富士川の漫々たる水勢は、松野岩淵の山勢に随いつつ北より南に走つて、西方山の麓をめぐつて南海に入る。虚空の大きさをまだ小さしとして映し出す蒼海、それをいやくような伊豆の海辺の連山。まことにこゝは山と海と川との眺望を恣にする東海の一勝地である。

その昔智証大師が入唐の砌り伝来の唐本の大蔵経二本があつたが、一本を江州三井寺に蔵め、一本を実相寺創立の時山上に安置したと伝えておる。実相寺は当時の境内地一里四方七堂伽藍は

いふもおろか、五百の僧堂薨をならぶと、文久元年実相寺発行の寺歴に伝えておる。今は史実の証をしておる暇はないが往年の実相寺はまことに荘麗なものであつたらしい。この壮大な建物も、永禄十一年甲斐国武田信玄によつて焼失され、現在の建築物はその後のものである。

正嘉二年の正月、岳麓の春は日中は三月位のあたたかさである。

実相寺寺主嚴蒼の部屋に聖人は相對座しておつた。

「ここ数年来の天変地異に対して、御貴職は如何にお考えでございますか」

聖人は嚴蒼に先ず問うた。

「まことに民のなげきこれより甚しいものはないとひそかに憂れえております」

「ではそれに対する救済の方法はないものでございましょうか」

「拙僧も畏しくも勅願寺たる岩本実相寺の住職でござる。日夜肝胆をくだく思いで、天下泰平の御祈念をいたしております」

「僧侶は天下の公器、所化小僧にいたる迄、天下泰平五穀豊穰は日夜祈らぬ者としては一人もおりません。しかるに、何故その祈りが達せられず、かくも数年来、天変地夭が打ち続き飢饉疫癘のたえまがないのでしょうか、この辺の消息を如何にお考えでしょうか……」

こう、つっこまれて問われては実相寺の住職嚴蒼も返答をいたし兼ねた。返答がないので聖人は更に言葉を続ける。

「去年の六月には加賀法師が雨乞いをいたし、七月には鶴が岡の隆弁僧正が雨乞いをなされたが、一向にその験がなかった。莫大な費用施物をつぎこんでの雨乞いの大法要も、祈禱をいたす僧侶の身になってみれば同情をいたすところもあるが、肝心な験が一向になくては、却って仏法を傷つけるものと、いわなければなりませんまい」

「免下さい……」

この時、挨拶をしながら、部屋に入って来た僧侶があつた。これは実相寺の学頭職にある智海法印である。

聖人は智海法印の顔をみると思わずにつこりとせられ、学頭もつりこまれて微笑をした。この兩人の無言の挨拶は住職嚴蒼には気に喰わなかつたようであつた。

「御両所ともお知り合いでござるか」

「いいや一向に」

と聖人は静かに答えたが智海法印は、

「鎌倉でのお噂をかねがね街道筋で伺っておりますので、愚僧には只今始めて拝顔をしたような気がいたしません」

なつかしゅうございます。さすがに、口の中でいったと思えるような学頭智海法印の返答であつた。法縁深厚と言うべきか、この学頭智海法印は後年名を日源と改めて上人の弟子になつた方

である。聖人が実相寺滞在中に摩訶止観の講義をされたのも、この学頭智海法印の請いに応じたのであった。思えば、後年結ばれた師弟のえにしの糸は、両者が言葉をかわさず微笑した瞬間に結ばれていたのであった。

「何か、お調べものでもあつて当寺へ参られたように伺っておりますが、不肖もふつつかながら一山の学頭職にあります。何なりと仰せつけ下されば、如何ようなる御便宜でも取りはからいます」

聖人が答えるよりも早く住職の厳誉が答えた。

「打ち続く天変地天について諸宗の祈禱が一向にきかぬ、よつて当山秘蔵の一切経を閲覽されて、何か新しい祈禱の秘法でも求めようと……まあ言うのかなあ。近頃御奇特なお考えだが、この実相寺の厳誉のみるところでは祈禱の秘法も先ず先ず出つくして、そうそう目新しいものはないと考えるが、学頭殿、如何なものであろうかなあ」

学頭智海法印は聖人を前にして、自分の意見を吐くのに躊躇したが、厳誉の言葉に促されて、仕方なく返答をした。

「我が天台宗のことはともかくとして、真言宗においては、祈禱秘法の種は最早出つくしてしまつたと申しても差しつかえないように思われます。というのが、去年（正嘉元年）より北条時頼殿に抜擢されて奉行職になられた青砥佐衛門藤綱は、もと真言宗の僧侶でしたが、真言秘密の秘

法も祈禱も一向に験がなくて、天変地天が打ち続くばかりなのに腹をたてて還俗された方だと言われております。よって真言宗の御祈禱は必ず重くは用いられますまい。じゃと言うたとて、他の宗旨の御祈禱も、奉行のお人柄からみて、さほど重要視はいたしませんまい、余程漸新奇抜なものでない限りは……」

智海法印が話した青砥藤綱は鎌倉の滑川に落した銭を人夫を雇って拾わせたという話で有名な人である。妾腹に生れた末子であったために十一歳の時に、真言宗の僧侶になったが、後ち還俗をして二十八歳の折、北条時頼入道が三島明神に参詣した時、忍んでその供行列に加わった。その帰途、江之島近くの片瀬川を渡る時に、牛が尿を川中にしたので「時頼殿の仏事のまねをする牛め」と牛を罵った。それが上役の耳に這入り、如何なる所存かと問われた時に、おくする気色もなく「ここ数十日来雨がふらず、御覽の通り田畑の葉が枯れておる。この牛も川の中に小使せず田畑の近くで小使したら、その尿が役にたつて諸民の憂いは幾分でも救うことが出来たであつたらうに、もつたいないことをしたものだ。それは丁度、時頼入道殿がなさつておる仏事に全く似ておる。何度も何度も莫大な費用をかけて諸宗の僧侶に御祈禱を頼んでおられるが、その莫大な費用を飢に泣く民百姓に直接施した方が遙かにに衆生を救う道である。しかも施物を受ける僧侶といえ、殆ど北条氏一族の末子か、評定衆の末子ばかり、財宝に不足しておらないところに財宝を施しておる。これこそ早魃に牛が川中に尿をするようなものである」と答えたのである。こ

のことをきいた二階堂信濃入道が時頼入道の耳にこれを入れたので、時頼も大いに反省し、一躍青砥藤綱を抜擢して善政を布き当代の名奉行と言われたことは北条九代記に載せるところである。

「日蓮も奉行青砥佐衛門藤綱殿の話は聞いております。理財経済こそ人を救う道なりと考えられた奉行藤綱殿は、朝夕の膳部には乾した魚と焼塩のみしかつけないと言われる程の質素を旨とし、善を賞し悪をこらし、全国に渡って正邪を訊すこと三百人と言われる一代の善政を布かれたが、それでも天の御気色は一向に変わることなく、天変地天は続いて、都大路に飢え死んだ人々の骸骨が累々と横たわる仕末であります。これは一体如何なることでありましょうか。藤綱殿も祈禱では一向にきかぬからと還俗されて、今度は精神よりは物であると、諸民の救済を心がけられて一生懸命であるが、一向にきかぬことは真言宗の祈禱と五十歩百歩であると悟られて、今こそ思い悩んでおられるだろうとこの日蓮も同情に堪えません。そもそも、天変地天を退治しようと祈禱の熱汗が流がすより、何故、近年より近日に至る天変地天飢饉疫癘が起るかと思えばなりません。因を探ぐらずして果を語るなかれ、天変地異のよつてもつて起る原因がわかれば、退治の秘術を探り得たと同然です。「三界は我が有なり」と仏は言われた。しからば、この三界に起つた天変地天もまた、所作仏事と考えねばなりません。よつて日蓮は、五度目の一切経閲覧を当山実相寺の経蔵において企て、この天災地天に対する仏の御声をきこうと思つて鎌倉より来たのでございます」

「では御伺いたしますが、経文の中に、これを信ずれば天変地夭が絶対に起らないぞと説くような経典がありませんか」

実相寺の裏山、岩本山の中腹にある経蔵の前で、十四、五歳の小僧が真剣な顔をして聖人に質問をしている。

「それはある。法華経の経文の中に、この法華経のような尊い教が世の中に行われれば、天上界のものがみなこれを守護して、百由旬というような広い間に、災難もなく、人が病気にかかったりすることがないとある。また涅槃経の中にも同様なことが書かれてある。この大涅槃微妙の経典が世の中に行われておれば、その世の中は安全である、その地は金剛である。その地が金剛であれば、そこにすんでいる人間もまた金剛の如く、極めて安全で何等の禍を受けない。また仁王経の中には、仏のお説きになる大乘の教というものは、千の光を放って、千里の内には七難の起らないように護るだけの力があると書かれてある」

「法華経や涅槃経、仁王経等にそのような仏のお言葉があるにもかかわらず、ここ数年来、大地震、非時大風、大飢饉、大疫病等々の種々の災難が連綿として今にたえないのは、その仏のお言

葉が、どうしても木当とは思われませぬがいかがでしょうか」

「法華經、涅槃經等々の經々が国土にありながら、仏の金言が虚しくなつて災難の起きるのには、それ相当の理由がある。金光明經には「その国土においてこの經ありと雖も未だ嘗て流布せず、捨離の心を生じて聴聞せんことをねがわず……その国に当に種々の災いあるべし」とある。大集經、仁王經にも同様なことが書かれておる。これ等の經文をもつて考えると、法華經のような大乘經典が国中にあつても、世間の人がすててこれを聴聞し供養するの志を起さなければ、国中の守護の善神や一切の仏様もこの国を捨て去つてしまふ。守護の善神や聖人がない故種々の災難が起つてくるのである」

「ではそのような尊い法華經を一切世間の人が捨て去つてしまつて、聴聞をしないと云うのは何か原因がある筈ですが、その原因は一体なんでしょうか……」

「名利を求める僧侶が出るといふことが根本の原因であると仁王經には説いておる。

仏様の教えを弘める者は、一切の煩惱をはなれ、名誉も要らなければ利益も要らないというよくな心持てなければならぬのに、その反対で、専ら名利を求めて、国王とか太子という人達の前へいつて、その人達の意を迎えて間違つた教を説き、国を破壊するような教を説く、国王や太子もついにはこれに迷わされて間違つた教を信ずるようになって、その間違つた教を本にして国の法律や制度を立てるようになる。従つて国の一切の事侍か間違つてくるからその国が破れた

り、また仏法がほろびたりする様になる。こういうことが仁王経の中に説いてある。また法華経の勸持品の中にもそのことが説いてある。世の中が末になると、僧侶の中にも心がよこしまで、仏の精神がよく解りもしなくせに解つたような氣持になり、非常に慢心を起す者がある。そういうものが自分の地位を保ち自分の勢力を維持する為、法華経を弘める者を敵にしてこれに迫害を加えることを計画する。法華経を弘める正しい人を陥れようと思つて国王や大臣その他の世間の有力者また同心の僧侶に向つて「あれは邪見の者である、あの者の説くことは仏法ではない。外道の説を仏法であると偽つて説いているのである」と法華経を弘める人の悪口を放つのである。以上は勸持品に説くところである。現在打続くところの災難の原因が実はこのようなどこにあるのを誰一人として知るものはないのである」

「仏教以外の者が仏法を破ぶる説をなすのならば承知が出来ますが、僧侶の中から仏法を破ぶる異説を吐く者があらわれてくるなどとは一寸合点が出来ませんが、それも経文に証拠がありますか」

「仁王経には「三宝を護る者にしてうたた三宝を滅破せんこと、獅子の身中の虫が自ら獅子を食うが如し」とあり、又法華経の中にも、仏の方便や手段のための説を知らないで、この法華経を弘むる者を悪口したり迫害を加えたりするとある。涅槃経には、はっきりと仏様が予言をしておる『我が涅槃の後、まさに百千無量の衆生あつて、誹勝して此の大涅槃を信ぜざるべし』以上は

すべて仏の説を破る者は、すべて自ら仏弟子と称する仲間から出ると言う經文の証拠である」
「それならば、打ち続く天災は眼前の事実であるから、そのような仏弟子は誰でありますか、その証拠はどんなものですか」

「法然上人つくるところの撰択集がその証拠である。最後にあげた經文に照らし合せて、その由縁を明らかにしてみよう、日本中の上より下に至る迄、すべての人が法然上人を信じて、この撰択集をもてはやし、争ってこれを読み念仏以外のものは「捨てなければならぬ、閉じなければならぬ」、さしおかなければならぬ、なげうたなければならぬ」と称して「捨閉闍拠」といつておる。唐の貞元年中の經典の目録によれば、大槃若經六百卷から始めて、法常住經に至る、大乘の諸經総て六百三十七部、二千八百八十三卷もあるが、法然上人は弥陀の三部經以外はこれを用いてはならぬと撰択集で言われておる。三界は我が有なりと言われた釈迦如来を全くさしおいて他方無縁の阿弥陀仏のみを禮拜致しておる、これが即ち近年の大災の根本なのである」

三

「あめつちの、分れし時の、神さびて、高く貴き駿河なる、富士のたかねを、あまの原ふりさけ見れば、渡る日の光もみえず、白雲も、い行きはばかり、時じくぞ、雪は、ふりける、語りつ

ぎ、言ひつぎゆかむ、富士のたかねは、

反 歌

田子の浦ゆ、打ち出でみれば、真白にぞ、富士の高ねに、雪は降りける」

これは、山部赤人が富士山を望んで詠じた歌としては余りにも有名な歌である。

実相寺の裏山岩本山の頂上に登った聖人は先程から、小僧を相手にして、万葉集を引いて富士を語っているのだった。

岩本山から望んだ富士もまた見事である。脚下には富士川の奔流をみて、遙かに雄大な富士に對する。急流奔流干のほこをつくが如しと聖人が形容した富士川のはては、静かな駿河の海に這入って静もりかえるが、万代に動かざる静かな富士の山は頂上に東西南北に去来する雲を得て却つて動的であることもまた妙である。富士に對すれば、天子嶽はその名前に似合わず、ごくささやかな山である。

聖人はこの風景を前にして、今日も一切経閲覽の労を慰やしなから、この寺の小僧と仲よく話されていた。話題が眼前にある富士山になることも当然である。

「小僧、歌は詠んでもよいが、富士山の歌だけはよまぬがよいというぞ」

「それはいかなる訳でございますか」

「先程申したなあ、あの山部の赤人の田子の浦の歌、あれ以上のものは如何なる歌人が詠んで

も、それ以上に詠めぬと言う話があるのだ。そう思つて歌つてみよ、よい歌ではないか、どうだなあ

「小僧もそう思います。お聖人様は歌をお詠みになりますか」

「私は歌よみではない。しかし京都で十八年程以前になくなられた、あの有名な藤原定家卿に京都でお逢いたして、いろいろと歌道のことは伺つたことがある。定家卿の富士を歌つたものとしては、

なかなか雲より上はいざ知らず

みえぬ程も高き山哉

というのがある、定家卿が亡くなつた年より（仁治二年八月）四年程前になくなつた家隆の歌として、

余の山の高根高根をつたひ来て

富士の裾野にかかる白雲

というのがある。家隆の歌もよい。ああやつて今富士の裾野にかかつておる白雲も、よの群山の高根をつたわつてきたのだが、富士山にきてみれば、その高さは裾野をめぐる白雲にすぎぬという意味であろう。歌そのものもよいがなかなか寓意のある歌といふべきだ。私は富士が大好きだ。法華経と富士、どこかに似たところがある。法華経は八軸、富士は八朶の霊峰、法華経は於

一切諸經中最為第一、富士は本邦一の高山、法華經は一切衆生のたましいであるが、富士は日本国一切衆生の心の故郷といつてもよい。富士は人の世の姿とも言うが、法華經は三界の実相でもある。私はだから何時でも富士の見えるところに棲みたいと願つておる。今すんでおる松葉が谷の名越の草庵からは富士が毎日のようにみえる。だが名越の草庵からみた富士の姿は、まるで雲の一部分のようだ。空にうかんでみえるのだ、ここでみるように富士のあしもとがみえない。ここでみる富士は、大地にしつかりと根ざして大空に立上つておるようみえる。私の母親がいつも私に言つておつたことがある。それは、私を産む前にみた夢の話だよ。なんでもある夜、比叡山の頂きに腰をかけて、近江の湖水で手を洗い、富士山から出る日輪を、だいたと思つた不思議な夢をみたそうである。私が自ら日蓮と名乗り、生れながらに富士がすきだということも次第因縁の故であらう。

そして今法華經の内容たる南無妙法蓮華經を四天下にこれを弘通しようとしている。小僧わかるかなあ私の心持が」

「はい、その気概はわかります。私どもも毎日のようにこの富士を眺めて心を清くしておりますが、大切なのは人の心で、いくらこの富士をみておりましたも、邪しまな心のもは一向にその邪しまな心がなおりません」

「田子の浦の逆さ富士も、影をおしむ訳ではあるまいが、波風の立つ日はその富士の姿もうつる

筈がない訳だ」

「お聖人様は、鎌倉にも一切経所蔵の寺々がある筈でしょうに、何故にこんな都に程遠い、実相寺などに閲経にいらつしやつたんでございますか」

「鎌倉には鶴が岡の八幡宮に一切経を所蔵しておるが、富士がみえない、富士がみえないからここに閲経に参つたのだよ、理由はそれだけじゃ。智者大師は天台山をひらき、伝教大師は比叡山をひらく、今日蓮も法華経をもつてこの富士山をひらこうかと思つておるのじゃよ、わあつはは……」

師弟のちぎり

海を人がみている、人を富士がみている、というのがこの辺の風景である。車返し（静岡県駿東郡沼津町字三枚橋附近の昔の地名）の官道。

正嘉二年の一月六日に岩本の実相寺に入蔵した聖人は、いま鎌倉をさしての帰り道である。

入蔵して一か月後の二月十四日に、聖人の御父妙日御逝去の報が到来したが「棄恩人無為真実報恩者」の言葉に従って、聖人は帰郷なさらなかったのであるから、その御心中は如何ばかりであつたろう。使いの者の口から、まだまだ東条左衛門尉の怒りはとけず、聖人が生家に帰れば御命のあぶないことを告げ、大事な仕事の途中であるから、帰郷は暫時延ばされよとの御母梅菊女からの言葉が告げられたのであつた。

——一説には岩本入蔵を正元元年（正嘉二年の次の年）とするのがある。即ち帰郷後岩本に入蔵とする。次ぎに入蔵中帰郷してまた入蔵したという説もある。筆者注——

岩本実相寺の閲経中に聖人は「一代聖教大意」「一念三千法門」「守護国家論」「災難対治

抄」等々の十篇の著作をなされ、また実相寺の学頭智海法印の請いによって、天台大師の三大部（摩訶止観、法華玄義、法華文句）の講義をなされたのであった。まる二か年あしかけ三年の岩本実相寺滞在中の閲経は立正安国論の一大雄篇となつて聖人の生涯を支配したが、三大部御講義といひ御事蹟も後年偉大な実を結んだのである。

即ち、岩本実相寺の学頭智海は後に宗旨を改めて日源（中老の一人）となり、またあしかけ三年の間、聖人の身の廻りを、学頭の命令によつてお世話申した小僧は、後年「日蓮一期之弘法白蓮阿開梨日興に之れを附嘱す」といわれた日興上人である。そして日興上人の化導は日秀日弁日賢日位等々の英才を輩出し、日蓮正宗信徒たるものの忘れてはならぬ熱原の三烈士もここから出たのである。その他南条次郎時光を始め富士山麓にすむ諸豪族の信仰帰依は特筆すべきものがある。

今日においても、富士山大石寺、北山の本門寺、西山の本門寺、妙蓮寺、小泉の久遠寺等これを富士五か本山と通称するが、これ等の寺々はその創立の功績は日興上人の御感化にゆづつても、その源は聖人の岩本実相寺閲経にあつたことは勿論である。

一切経は鎌倉には鶴が岡の八幡宮に所蔵されておるが、鎌倉で閲経されずに岩本に來られたことは、鶴が岡の別当隆弁僧正は三井の園城寺学派の人であり、聖人は叡山学派の人であるから、同じ横川の流れをくむ岩本の実相寺に閲経されたといわれておる。

しかしながら「富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」との日興上人への御相承に現われた所謂富士戒壇の理想は聖人の胸中に早くも蔵されて、富士山麓地帯の地理的研究や信仰状態の調査もあつて、この岩本の実相寺に來られたと筆者は拝察いたしたい。

聖人の御理想は一天四海皆帰妙法広宣流布にある、よつてその立教開宗もその御理想にふさわしく、一天を照破する旭が森の大日輪を証人としての開宗の事実を思うならば、富士山に本門寺建立の富士戒壇はその結論である。岩本の実相寺閱経は、その結論を産み出すべき下檢分と申したいところである。又実相寺はその後聖人が身延入山の砌り、この寺を訪れた時改宗して日蓮門下に投じた。

さて車返しの街道をゆく聖人を、最前から追いかけている小僧があつた。年令は十四、五歳ぐらいである。

「お聖人さま」

「おう」

聖人は声とともに振り向いた。

「これは甲斐房ではないか」

「はい、岩木実相寺の甲斐房であります」

「そなたには滞在中いろいろとお世話になったが、してまた、どうしてここへ」

「実はお願いの筋がございまして、今日は一日中お聖人さまの後を追いかけておりました。お聖人さまの足の早いこと」

額の汗をふきふき甲斐房はいった。甲斐房の額にはぬぐうてもおちぬ七つのほくろがある。このほくろがこの少年を出家にしたようなものである。そのほくろの形が北斗七星に似ている。北斗七星は常に天のいただきにあつて、我が罪科を少しもかくすことなしとの意味があるという。

生れた時にこの少年の父は、額のほくろをみて、

「この子奇相あり、若し出家すれば、天晴れ名僧智識となるであらう」と叫んだといわれておる。

少年は山梨県南巨摩郡大井の人で、父を大井橋六といい、母は由井氏という。母は一夜身に日光を浴び、腹に白蓮を生じた夢をみてただならぬ身となり、寛元四年（聖人二十五歳叡山遊学時代）三月八日この少年を生んだのである。

しかるに不幸にして早く父を失い、母もまた綱島九郎太郎（現在の神奈川県東横沿線の綱島）に再婚したので八歳の時、外戚の駿州河合入道に伴われて、岩本実相寺に至り、住職播磨律師に謁してその弟子となり、木年十五歳で、甲州の産なるが故に甲斐房といわれておった。

「願とは何事だな」

聖人は脚をとどめて、慈愛の眼差しを甲斐房にむけた。

「お聖人様のお弟子になりとうございます、私を鎌倉につれて行って下さいまし」

甲斐房は必死の眼差を聖人に向ける。

「そなたの御師匠は承知かなあ」

「学頭様のお言葉によって御師匠様には相談はいたしませんでしたが、学頭様のすすめでござい
ます」

「学頭智海法印のすすめによるというか」

「はい。学頭さまも内心は御聖人さまのお弟子になりたいが、学頭職の手前、軽々しく振舞う訳にはゆかぬ。お前はなんと言うてもまだまだ若い、お聖人さまのお弟子に加えて貰いなさい、といわれました」

「それでこれまで追いかけてまいったのか」

「はい、御聖人さまに御給仕を申し上げておる中に、自分の心に私の御師匠様はお聖人さまとひとかにきめておりましたが、学頭様が私の心の中をみぬかれまして、お聖人さまのお弟子になるようすすめて下さったので御座います。だが、実相寺の中でお願い申すことは出来ませんので、今日の御出発の日を心まちに待っております」

「さようか、年に似合ぬ勇猛な沙弥じゃなあ、よろし鎌倉につれてゆくぞ」

「有難うございます」

聖人のこの時の一言から、鎌倉に到着すると

「汝は勇猛である、精進である、能く大信心に住して、我が法門を興せ」と言われてこの少年の名を日興と賜ったのである。

立正安国論

一

「おうい水を一杯くれないか」

鎌倉の村岡の街道で、一人の侍が、家とは名のみ、ぶっこわれかかった農家の入り口に声をかけた。

正嘉二年の大地震後、余震が毎日のように続くので、家は修繕してもしようとなないと、人々をあきらめさせてしまったとみえて、鎌倉の街中にもこわれかかった家は処々方々にあつた。況わんや街はずれの農家などはまともに建っている家の方が珍しい程度である。

侍は声をかけても、返事がないので、一段と大きな声でど鳴った。

「おういつ、誰もおらんのか、水が一杯所望というのだ」

「……………」

相変わらず返事がない。

「おらんのだなあ、誰も、おらんければ仕方がないなあ」

侍は独りごとをいいながら、農家の裏手に廻った。谷の多い鎌倉では大抵の農家の裏手には綺麗なかけひの水があるのが普通である。

「おやつ」

侍は驚いたような声をした。

かけひはある。だが水が一滴も流れておらない。かけひや水桶につく青苔が、どす黒くひからびて、ぼろぼろになり、これが呑み水をためて置く水桶かと疑う程の、あわれな残骸であった。

「打ち続く地震のために、水脈が変って、水が出なくなつたとみえる。水が出んようでは、棲む人もこの家にはおらんのだろう」

余程喉がかわいているとみえて、侍は失望した顔をしながら、足を早めて農家の入口まできたが、空き屋になつた家に、二度までも声をかけた、自分の用心の悪さを苦笑しておる様子であった。

「拙者の勘は、そんなににぶくなつたのかなあ、空き屋に案内の声をかける程に……信じられんことだ……」

素晴らしいながら、家の中へはいり込んだ。

甕瓦破ぶれて霧不断の香を焚くという形容があるが、そんな風流とはおよそ縁遠い光景である。

破れた屋根からは、外の陽が方々に直射して家の中は明暗の縞模様が入り乱れている。侍は茫然として暫くつったつた。

一つの直射光を浴びて、五十歳位の百姓が壁によりかかって、うつろな眼を開いている。出山の釈迦という有名な絵があるがまさしくあの形相である。

顔の中にあるものは、にぶい光を放つ両の眼だけで、鼻も口もなくなつたといつてもよい。申し訳にまとつた着物の下は、骨と皮だけであることが恰好で知れる。生きるということは食うことなのだ。どんなえらそうなことをいつたつて食わなければ死んでしまう。偉いと他人からいわれる人間は、必ずうまいものを沢山食っている。世の中の下積みになつて毎日毎日あくせくと働かなければならない者が、まずい物さえ腹一杯食えないでいる。これが人の世の生きるということの約束なのであるか。そして飢饉は直接に食い物をつくつておる百姓に一番早くやつて来るという矛盾が世の中にあるのだ。働かない者には、直接生産にたずさわつておらない者には飢餓が一番おそくやつてくる。何時の世とても同じといえよう。

「どうしたつ……」

侍は慈愛の言葉をかけた。

「……………」

返事がない。百姓は口とおぼしきあたりから何かを、おびただしく喝つと吐いた。土だ、壁の土だ。なる程、百姓の膝許には沢山な壁土がおかれてあった。この百姓は食う物がなくて、部屋の壁土をくつているのだった。

「どうだ……」それを食べないか」

侍は腰の包みに手をやると、握り飯を手早く取り出し、百姓にみせた。

「めし………」

百姓は思ったより、大きな声でいった。まだどこかに生きる気力が残っているらしい。

「めし……めしが、まだあったのか」

百姓はいった。恨みをこめた声であった。壁土を皆んなが食べていると思っただのに、飯を食つてゐる奴が、まだ世の中におつたのかと憤つておるのであった。

「くれ、めしをくれ」

両の手を打ち震わして握り飯の方へ身体をすりよせようともがいている。

「お食べなさい」

侍は握り飯をもつたま、床の上に土足で上つていった。得て0知れない臭いが部中に漂つてゐる。

「おあがりっ」

と握り飯を差し出したが、百姓の拝むような両の手には、侍は握り飯をのせてはやらなかった。生き埋めにされたものが、急に陽の目をみると盲目になるという。長い間食わないでいる者に、米の飯を食わずと、一辺に死ぬという話を侍は知っていたのだろう。

「百姓、どうしたというのだ……何かいうことはないのか」

百姓の顔には死相が漂っているのを侍は見とつた。

「はいっ」

地獄の底から響いてくるといってもよい返事であつた。そして次のように、とぎれとぎれに仔細を語つた。

打ち続く飢饉のために食い物は全くなり糠にわらをまぜて食べておつたが、その糠もわらも遂になくなり、野山に草をさがす氣力もつきはてて、一家五人壁土を食うような仕末になつてしまつた。

妻はこの十日程前になくなつて、この筵の下にあるのがその死骸であるという。なる程膝許のこぼれた壁土の下に一枚の筵がある。筵の下に人間の死骸があるうとは思えぬ程。ぺしやんこである。ひものように、からからになつて死んでしまつて、小さく縮んでしまつたのであろうか。

自分の弟の死骸も土間の隅にありますと力なく顎で示してみせた。余りのことに侍は思わず足

許に力が入って、床の板をふみしめた。ぼきんと割れるような音がしたが、この音に百姓の傍にあった古つづらの隅から、大きな鼠が五、六匹、きいきい啼きたてながら逃げ出していったのである。その古つづらは荒縄でしばられていた。

つづらの中は何かと問えば、百姓は自分の子供が入れてありますという。妻は二人の男の子に食べさせるために、自分が食わなかったので早く死んだ。妻がなくなると二人の男の子はひもじさにお母さんと呼び、食い物をくれと、母親の死んだことも知らずに、死骸に毎日とりすがって喚めいていたが、聽て余りの空腹にたえかねたとみえて、二人の子供はお互いに相手の手足を自の口に入れて、血みどろになって噛み合うという始末であった。この二人の子供の畜生道さながらの行状に、たまりかね、一人は櫃の中へ、一人はこのつづらの中へ入れて荷縄をかけ早く死ぬことを願っておりましたが、どうやら、兩人とも死んだようでございますと語るのだった。

百姓はこれだけの話をやっと話すと、握り飯をくれという元気もなくなつて、がつくりと前へのめつてしまった。死んだのだ。

侍は百姓の前に握り飯を置いた。

南無妙法蓮華經

.....

「名越のお聖人さまにこの百姓の話をしよう、そしてこの苦しみはどこから来るかを聞こう。そして解決して貰うぞ」

侍は合掌を終えたと農家からとび出した。足は名越の聖人の草庵に向かっていた。

一一

「打ち続く天変地天、飢饉疫癘、今日もまたお聖人様のところに来る途中で、餓死してゆく親子をまのあたりにみて参りました。ああ堪えられないことです。お聖人様、この世の中はどうかってゆくのでしょうか。これを救うということは出来ないものなのでしょうか、お教え下さい……」

荏原義宗という若い武士が聖人の前に必至な顔をして問うのであった。

「今、この三界はわが有なり、その中の衆生は悉くわが子なり、と仏は法華経にいわれておる。天変地天飢饉疫癘も三界の中の出来事であり、餓死し、夭折する人々もまた仏の子である。どうしてこれを救い得ないことがあるのか。先ず仏の言葉を崇むべきであり、仏の言葉を信ずべきである」

聖人は厳然と答えて言葉を続ける。

「だが、仏の言葉といつても、仏の本当の言葉を崇めなければならぬ。仏が方便のためにいわれたような言葉を基としてはならぬことは勿論である。法華経以外の諸経はその经文自身が明らかに示しておるが如く方便の教である。しかるに今の世の中はどうか、法華経以外の諸経を基として、この天変地天を退治しようとしておる。即ち弥陀の名号を唱えたり薬師如来を頼んだり、仁王経の講座を設ければ七難が七福となるぞと教えたり、或いは真言秘密の祈禱にのつとつて、五瓶の水をそそいだりするの類である。だがしかしこれ等は世の中を救済するどころか、益々世の中を混乱させておるようなものである。或る者は現世に仏の救済がないところから、後生などないものだ、未来などはないもんだと、却つて恨みをふくんで天を仰ぎ地に伏して悶絶するといった態である。

災難の因つて来たる原因を除けば災難はなくなる訳である。光明最勝王経には、正しい法があつても、その国に流布しないようならば四天は国を守らないとある。四天王の守護しない国には必ず、天変地天飢饉疫癘があるのは当然なことである。しかしこれ等の災難にもまして最も恐るべきことがこれから起るのだと覚悟せねばならぬことがあるのだ。

それはなにかと言えば、薬師経の中の日月薄蝕之難、非時風雨之難、過時不雨之難等々の天変地天に属する五難は今眼前に起つておるが未だ起らざる二難がある。经文に示す五難がここ数年來、頻々として相連続して惹起しておるのであるから、必ずや残るところの二難が起り来たること

は理の当然である。而してその残る所の二難とは、外国がこの日国に攻めいつて来るといふ他國侵逼之難と、自国中に同志討ちが始まるという自界叛逆之難とである。

國が亡びるといふことは大事の中の大事であり、國を失い家を滅したならば何処に世を逃れようとするのか、すべからく仏者たるもの出家たるものはここに留意しなければならない。

天変の地天のと騒ぎたてて、眼前の事実に心を奪われ、この災難を退治しようとのみ心をくだいて、あらゆる祈禱をあらそつて諸宗の僧侶はいたしておるが、國家が滅亡しようという、この來たるべき未曾有の國難に対しては、まだ誰一人としてこれを憂い、これを論じたものがないのが現状である。

しかしここに誤つてはならぬ一事がある。それは、先ず國家を祈つて佛法を立つべしとのみいつて、國家の安泰を願ふことのみに力をいれすぎて、法の邪正を吟味するということを忘れてはならぬのである。國は法によつて榮えるのであるが、邪法によつて榮えるものではなく正法によつてのみ國は榮えるのである。今日本國の一切の寺塔の佛像等は形は仏に似ておるが、心は仏ではなく、九界の衆生、迷える凡夫の心そのものである。國費の無駄な消費であつて一向に祈とはならず、還つて變じて魔となり鬼となり、國主及び萬民をわすらわすのである。これはひとえに邪法によつて國家を祈るが故である。

「人王八十一代をば安徳天皇と申す。父は高倉院の長子母は太政入道の女建礼門院なり、此の王

は元暦元年三月二十四日八歳にして海中に崩じ給いき、此の王は源頼朝將軍にせめられて海中の
いろくずの食となり給う。人王八十二代は隱岐の法皇と申す。高倉院の第三の王子、文治元年御
即位、八十三代には阿波の院、隱岐の法皇の長子建仁二年位につき給う、八十四代には佐渡の院
隱岐の法皇の第二の王子、承久三年二月二十六日に王位につき給う、同じく七月に佐渡の島にう
つされ給う」この承久の乱の事実が「日本国の王となる人は天照太神の御魂が入りかわらせ給う
王なり」という立派な方々に起つたのである。

この事実から押して、大集経にある「隣国の為に侵入せられん」金光明経に言う「他方の怨賊
国内を侵掠す」仁王経に示す「四方の賊来たりて国を侵す」という経文の事実がこの日本国に惹
起してもけつして不思議ではないのである。日蓮がこれをいえば世を騒がすものと人々はい
うが、経文の示すところなればいかんともしがたいのである」

三

「聖人！文章家をもつて任じ、文章家をもつて北条家に宮仕えするこの比企大学三郎が、このた
びほど、己れの無力さをひしひしと感じたことはございません」

「それはどういう意味ですか、大学殿」

「……立正安国論の草稿を拝見させていただいて、感じたことです。京都時代の御交友の誼をもつて遠慮なく申し上げますが、先ず最初に無礼をお赦し下さい。実は、これは立正安国論の草稿で、執権職北条時頼殿へ献策いたすから、文章の悪いところを訂正してほしいと、過日拙宅をわざわざお尋ね下さって拙者に申されました時は、拙者も当代の文章家をもつて任ずる手前、聖人の前に先生のような気持でおりました。しかるに一読ただだ茫然自失の態です。大空に輝く日輪に向かつて誰が善意の批評をいたしましたでしょう。批評するものありとすれば、それは、個人の環境の相違個人の心柄の問題であつて、あく迄も日輪の批評にはなりません。世の中には批評を絶たか文章というものがあります。立正安国論がそれです。これは文章を通り越して魂そのものです。打ち続く天変地天に打ちひしがれた人々を何とかして救つてやりたいという仏の魂を紙につらねたものです。この文章こそ永遠に死ぬことのない文章です。立正安国論は文章の豪華壮麗さをもつて人を驚かすのを目的とする文章では勿論ありませんが、たくまらずしてそれになりきつておるといふことも見逃してはならないと思います。お聞き下さい。あの松籟の音を」

大学三郎は言葉をやめて、聖人と顔を見合わせた。開けはなされた座敷、一しきり松風の音が、二人の間をさおつと、かけぬけてゆく。文応元年の五月である。鎌倉の滑川を左におれると小さな谷がある。ここを比企谷という、このあたりは松の樹が多い。

「自然はたくまらずして一つの格調をもつております。松籟の音も、大洋の濤の音も、さては小河

のささやきも、一つの妙なるしらべを自らもっておりませぬ。偉大なる魂の文学はこれまた、たくまずして一つの雄大なる格調をもっておりませぬ。立正安国論の文章はそれに到達しておりませぬ。さて以上は文章上のことですが、それ以上に私を驚かしたのは勿論その内容です。立正安国論を拝読して私は始めて、七月八月の盛夏に雪のふつたという未曾有の出来事の原因がわかりました。鎌倉の海の水が変色しておびただしく死魚のあつた原因が、或は京都では灰がふつたということもあります。そのいわれがわかつたような気がいたします。天変地天は故なくして来た訳ではなく、飢饉疫病はよつて来たるべき原因があつたことをようやく立正安国論によつて了解いたしました。聖人、この上は一刻も早くこの立正安国論を北条時頼殿に献策いたすことです。これが、この立正安国論の文章を添作せよと忽体なくも聖人よりのまれました大学三郎がいろいろたつた一つの言葉です。学者というものはつまらないものだと思つておりました。ただものを覚えておるだけです。記憶しておるだけです。そしてそれを粉飾して文字につらねておるのが文章家でしょうが、近年より近日に至るこの天変地天をただ紙の上に記録するだけで、その原因を究めようともせずにおりました。よつて来たる由縁を漠然とは考へてみたこともありません。一向他人に語つてきかず程のしつかりしたものには困んでおりませぬ。聖人、私を今後とも御指導下さいまし、立正安国論の草稿を先ず最初に拝読させてください。この比企大学三郎、まことに仏縁の深いことと感銘にたえないものがあります。今後とも信心を怠るものではあ

りません」

——この比企大学三郎は後年、大聖人の池上における葬儀の列中に大切な役割を担当しておることをみても、以上の言葉がむなしくなかつたことを証明しておる——

「いやいや過分なお言葉を賜わつて、恐縮いたしております。日蓮も早速にこの立正安国論を宿屋佐衛門尉光則殿を通じて北条時頼殿に献上いたす所存であります。その砌り殿中において朗読申し上げて下さる役目は、とりもなおさず貴公大学三郎殿です。その貴公にはこの日蓮、京都において遊学の砌りにいろいろと御指導を賜わつた不思議な仏縁、ただ有難く思っております」

「聖人、立正安国論を殿中において時頼殿の御前に朗読いたすのは勿論私の役目でございますが、往時を懐古すれば涙滂沱たるものがあります。父の比企能員は鎌倉二代將軍頼家公の恩寵を受けた若狭局の父として鎌倉幕府に時を得ておりましたが、北条時政によつて亡ぼされ、私は兵火の京都に逃がれて今日にいたつたものでございます。大学三郎は北条方にいわせれば、いわば謀叛人の子供であります。その謀叛人の子供が、聖人の立正安国論を殿中において朗読いたすのでございます。感なきを得ないではありませんか。父は自分の孫一幡公をもつて將軍にしようとし、北条時政はその孫千幡公をもつて將軍にたてようとして、時利あらずして父は時政に亡ぼされたのでございます。父も正義と思ひ北条時政も自分を正義と思つておつたことでしよう。だが果していずれが正義であつたのでしょうか、そのようなどちでもよいような正義をもつて国

を治められたのでは人民こそたまりません。自分だけに都合のよい正義が横行する。これでは天も怒るでしょう。地も激怒する筈です。何をもつて人民を治むべきか。人の世の口にする正義などの外に正法というものが厳として存在することを知らなければなりません。正法に住してこそ国は安泰であると聖人の立正安国論は教えております。立正安国論に「汝早く信仰の寸心を改めて速かに実乗の一善に帰せよ。然らば則ち三界は仏国なり仏国それおとろえんや。十方は悉く宝土なり。宝土なんぞやぶれんや。国に衰微なく土に破壊なくんば身はこれ安全にして心はこれ禪定ならん。此のことば此のことば信ずべく崇むべし」とは、仏者たる聖人が天下国家のために北条時頼殿に進言せんとするところでありましょう。しかるに私の父比企能員が謀叛人の汚名をきて北条時政に殺されてより建仁三年から本年五十七年、父の敵たる時政の末孫北条時頼殿に、謀叛人の子といわれたこの大学三郎が、殿中において、時頼殿に眞の政治のありかたを示し、天下泰平国土安穩の秘術を説く聖人の立正安国論を朗読いたすのです。私は今こそ過去の怨讐のきずなをたちきつて聖人の心境に徹底し、この立正安国論という魂の文字を執権北条時頼殿の面前に朗読致す決心をいたしております。聖人一日も早くこの立正安国論を幕府に御進覧下さい。私大学三郎は故郷忘じがたくこの鎌倉に帰りきたつて父の墓近くのこの比企谷にすんで謀叛人の子孫たる汚名を甘受しながら、心淋しくも北条家に宮仕えいたしておりますが、立正安国論を殿中に朗読致す日こそ、亡父比企判官能員の霊が成仏する日であるとただ嬉し涙にくれるばかりで

「ごやいます」

大学三郎の感激の言葉は仲々つきない。

——比企大学三郎に対する一説を参考までにかかげる。大学三郎能本という。父は比企能員、父能員が罰せられた時はまだ幼少であったので当時京都の東寺にあつた伯父にあたる伯耆の法師が三郎を出家せしめ、後に文士となり、順徳上皇に従つて佐渡にお伴申し上げていたが、頼経將軍の奥方が姻戚になるその関係から許されて後鎌倉に帰り幕府に仕えておつた。後には篤く聖人に帰依して本行院日学と名乗り、その邸宅を寺とした。これが現在の比企谷の妙本寺である

四

文応元年七月十六日聖人は立正安国論をたずさえて、長谷の観音とは小山一つでへだたつておる宿屋衛左門尉光則の屋敷を訪うた。

宿屋左衛門尉は寺社の事務をつかさどる奉行であつたから、聖人の訪問となつたのである。

宿屋左衛門尉も小町の辻説法で有名な日蓮聖人のことは知つておつた。七年程前から小町の辻に南無妙法蓮華経という旗がたち南無妙法蓮華経という声が毎日のように続いた。石がとび瓦が

とぶことも毎日のようにつづいた。他人が耳を傾けようが傾けまいが、そんなことは、てんで気にしておらないように南無妙法蓮華經の声がつづいた。鎌倉の人達は仏様に向かえば南無阿弥陀仏としか唱えごとをしらなかつたのに、何時の間にか南無妙法蓮華經という唱えごともあるということを知つたのであつた。このようにして七年前から小町の辻に起つた、南無妙法蓮華經の聲が、三年前に急にきこえなくなつたのである。五年も続けば結構名物になつてしまふ。小町の辻の南無妙法蓮華經も鎌倉の大仏様なみに名物になつたのが、急にきこえなくなつたので、鎌倉の人達も、悪口はいつてもなんだか淋しいものを感じていた。

但し鎌倉中の僧侶達は胸をなでおろした。

念仏無間

禅天魔

真言亡国

律国賊

この叫びが鎌倉からきこえなくなつたからだ。何故聖人が小町の辻から見えなくなつたか鎌倉の人達は知らなかつた。おくそくする理由は教えきれない程あつた。実は聖人は正嘉二年、正元元年と二か年間駿州岩本の実相等に入蔵して立正安国論の構想をねつておられたのであるが、鎌倉の人々は知る由もなく、自分勝手な理由をつけておつたのである。宿屋左衛門尉光則も、自分が寺社の事務をつかさどる奉行であつた関係上、小町の辻に聖人が現われると同時にその囁きは耳にしておつたのである。しかし念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊の格言をとなえるからと

いってもこれを取りしまる術もなく、又とりしまる気にもなれなかった。法然上人ですら、阿弥陀仏の外は如何なる仏も神も絶対におがんではいけなさと大変に強くいつておる。礼拝雑行といつて、阿弥陀仏以外のものを拜むと地獄に行くといつておる。日蓮の四箇の格言の取締りを鎌倉の僧侶が宿屋左衛門尉にたのんでも、取締りをする事が出来ない要素を、仏教自身がつておったのである。

だが、三年前に小町の辻から急に聖人の姿が消えた時、いろいろな世間の風評もあつたので、聖人の身边をさぐつてみたのである。すると世評とは反対に、聖人の身边には仲々有力な信者が出来て、教団は除々にあなどれぬ力をもちはじめたのであつた。聖人の信者の主なる者の名をあげると、四条頼基、進士吉春、工藤義隆、荏原義宗、池上宗仲、波木井実長等々鎌倉武士の範たるべき人々が南無妙法蓮華経と力強く唱えているのだつた。七年前の鎌倉には南無妙法蓮華経と唱える人は聖人たった一人であつたことを忘れてはならない。また聖人のおそばには、日昭、日明、日興と三人の御弟子達が給仕奉公をしておるのであつた。

文応元年の聖人はもはや鎌倉の街頭に四箇の格言を叫ぶ一快僧ではなく、弟子もあれば信者檀越のある、堂々たる鎌倉新仏教の一勢力を代表する僧侶であつた。

宿屋左衛門尉光則とてもこの辺の消息を知つておつたので、聖人を扱ふことは丁重であつた。

(筆者注、宿屋左衛門は聖人の滝ノ口法難後改宗して自らの屋敷を寺とした。現在の光則寺がそ

れである）聖人は宿屋佐衛門尉を前にしてたずさえきたった立正安国論の要旨を説明された。「ここ数年來打続く、天変、地天、飢饉、疫病は如何なる原因によつて來たるものと考えられますか、為政者としての御貴殿も種々苦慮されておることでございます。日蓮もこの原因をさぐるうと五度目の一切経閲讀を駿州岩本の実相寺に二か年間こころみましたが、その因つて來たる原因をこの立正安国論に申し述べてございます。

災難の原因を一言にして申すならば、天下の人々悉く正しき法にそむいて、よこしまの教を信じ、万民すべてが誇法の罪をおかすことによるのでございます。正法を信ぜざれば、ここ数年來の災難は益々やまず、邪教を禁ぜざれば、ここ数年來の災難をもしのぐ驚天動地の出來事が起るであります。速かに邪教たる禪宗、誇法たる念仏をとどめ給え、この重大なる提議を用いずして日を過せば、天下の兵馬の權を握られておる北条一門には同志討ちの騒亂が起り、ひいてはこの日本国がよその国から攻められるという、開闢以來未曾有の出來事が起るでしょう。幾多の經文を例証してこれを申し述べております。日蓮が嚴罰をかえりみず、敢えて不敬をも辞せずしてこのことを申すのは、ただ君のためであり國のためであり、神のため仏のためにこれを申すので、一言も邪心はないのでございます。貴公は執權職北条時頼殿の近臣でもあり、寺社の事務を司る御奉行であります。何卒、この立正安国論を殿中に披露して、執權職北条時頼殿のお耳に達するよう御努力をお願いいたします」

文応元年（六百九十余年前）七月十六日、宿屋佐衛門尉の屋敷における聖人の立正安国論上奏の言葉である。



夜討ち

一

「念仏を唱えようと、よその国がこの日本の国に攻めてくるというのか」

北条重時が馬鹿ばかしいといった口調で執事の藤次左衛門に問い正した。

「御意っ」

「念仏をやめなければ、われわれ北条氏一門に同志討が起ると日蓮はいつたのだなあ」

「御意にございます。立正安国論の中においては、薬師経と仁王経を引いて、他国侵逼難と自界叛逆難の来たることを明言いたしておりますが、なおこれが上書を頼んだ宿屋左衛門に、特に言葉を変えて、禅宗と念仏宗とをとどめ給え、この事用いなき時は、北条一門よりこと起つて、他国のためにせめられると申したそうでございます」

「ううむ、まことに狂気な揚言、さりとて捨てておけば大事を招来しよう」

「御意つ御意つ、しかも日蓮、最明寺殿（北条氏五代目の執権職時頼のこと）がこの上申に返答なく、何の御汰汰もないところより、再び小町の辻にたつて、他国侵逼、自国叛逆の二難きたると毎日のように吠えたてておるとのことにございます。打続く天変地夭に動揺した民の心が、たとえ始めはそらごととわきまえておつても、度重さなつてきくうちには本当のように思いこむであります。鎌倉御所ののきばに近い小町の辻に立つて、自界叛逆の難きたるなどと叫ぶは、ただ氣違いの沙汰と申す外はございません」

「わが朝に仏教渡来後、僧は出家遁世と申して世上のことは口にすることすら嫌つたものである。故に寺々は多くの山中に建立されて俗塵を遠のけ、世に毅然とするところがあつた。しかるに彼の日蓮と称する僧侶はこれと全くあべこべである。市中の往来にたつて、諸宗の悪口をいふらし、果ては政道の上にもで口を出して他国侵逼、自界叛逆近しと叫ぶ、これはまさしく魔作沙門である、氣違ひ坊主であるところの北条重時はみる」

「御意、御意、御意、氣違ひ坊主なればこそ建長寺の道隆上人も、光明寺の然阿上人も、長楽寺の隆観上人も、寿福寺の朗誉上人も、浄光明寺の行敏上人も、極楽寺の良観上人も、皆様がすべて相手にせずにおるのでございませう。鎌倉当代のかかる名僧智識が日蓮を正氣な僧侶とみれば、なんで捨ておくことがございませう」

「藤次左衛門、もそつと近くよれ」

北条重時は執事に声を改めていい出した。

「いいかなあ、最明寺殿が殿中において寺社奉行宿屋左衛門尉光則の手を経て、上書された日蓮が立正安国論を、比企大学三郎によって朗読されたのを、最後まで耳を傾けておられたことは事実だ。だがしかし事実はそれだけだ。それだけが事実で、後には何等の御沙汰がない。いいかなあ、最明寺殿は念仏のためには長谷に大仏殿（阿弥陀の像。与謝野晶子が、鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな、と詠じたのは有名、但しこれはお釈迦様の像ではなく阿弥陀の像の誤）を建立した御仁であり、禅宗のためには道隆上人をわざわざ支那よりお呼びして建長寺を建立された御仁である。しかるに日蓮はその最明寺殿に向かって、念仏と禅宗をすてなければ、他国侵逼と自界叛逆とが起きてくるぞといっておるのだ。日蓮に向かって何等御沙汰がないということは実は御沙汰があつたのと同様だ。この辺が政治じゃよ。御政道の妙味というのはこのことをいうのじゃ、わかるかなあ」

「御沙汰のないが御沙汰でございますか」

「左様じゃ」

北条重時は宝治元年七月より康元元年三月までの約十年間、執権最明寺（北条時頼）の連署であつた。（連署というのは連判とも加判ともいって、執権と共に公文書を署判したためにこの名称がある。執権を助けるとともに、政務の裁断、理非の判決は執権と同様に執行したのである。よ

つて北条重時が如何なる人物であるかがわかるであろう) しかも大の念仏の信者であり聖人が立正安国論を提出した文応元年の前年正元元年に自ら極楽寺を創建した。極楽寺は終生聖人の敵であった良観が住職した寺で有名である。北条重時は極楽寺を創建した故をもつて自ら極楽寺入道と称し、しかも法然上人の孫弟子修観から一字を貰つて観覚とさえ道号を名のる念仏の信者である。さて、聖人が文応元年に立正安国論を提出した時の執権職北条長時は重時の子供である。

(最明寺時頼は建長七年に執権職をしりぞき前執権として職務をとつておつた) そしてその連署政村は重時の弟であり、評定の筆頭は重時の従弟であり、次席は重時の甥である。

従弟は法然上人の高弟隆覚より受法し、甥は法然上人の孫弟子道阿弥の弟子になつておるといふ、一門が悉く念仏のパリパリの信者である。この北条重時が執事に向かつて、御汰沙のないのが沙汰であると今断言したのである。

「では、如何なることになるのでございますか、お伺いいたしますが」
執事の藤次左衛門が重時に訊ねた。

「藤次、貴殿は何年わが家の執事をしておるのだ。少し考えてみよ。御政道の妙味を展開するのだ。如何なることになるのでございますか、お伺いいたしますなどといつておつてはならんのだ」

「はあ……」

「如何なることになるのではなくして、如何なることにするのじゃ、わかつたか」

「……ではやりませうか」

藤次左衛門は人をあやめる格好をしてみせた。

「恐ろしくはつきりものをいう男じやなあその方は。気違い坊主とはいえ、立正安国論の上書の手続き順序に一つの狂いもなく、まことに堂々たるものじや、軽々しくことをはこんではならぬい」

「では如何いたしましょうか」

「いいかなあ、これは指図ではないぞ、よく聞けよ。鎌倉に念仏を唱えるのはわれら北条一門のみではない。市中には無名のやからが念仏を朝夕一生懸命に唱えておるのだ。この人々は、常日頃念仏無間と悪口を言う日蓮のことを、くやくしく思っておるのだ。心から憎んでおるのだ。誰かが一寸でも日蓮をやれといえ、殺しもしよう、名越の草庵に火も放とうとさえ思っておるのだ。このことを今日までさせずにおつたのは一重に御政道の力があつたからだ。今その御政道の力がゆるんだとしたら如何なるか、今夜でも名越の方に当って火の手があがる。それも不思議ではない、誰れでもよろしい日蓮をやれと声をかけてみよ、おそらく数百人、いや数千人の念仏を唱える人々が、日頃の怒りに燃えて、たちどころに集まるであろう」

「殿、わかりました。わかりました。手前も念仏の信者でございます。黙って終りまで聞いておる訳にはまいりません。日蓮が小町の辻にあらわれてから今年が丁度七年目、念仏の信者も地獄

行きとの悪口を七年間指をくわえて聞いておりましたが、どちらが先に地獄にゆくかためしてみよう。よい時機がまいりました」

一一

聖人が座を立つた。草庵の居間の方からは弟子の日昭、日興をかこんで能登房や進士太郎善春等の信者達が互いに話合っている声がしておつた。

文応元年八月二十七日の鎌倉名越の聖人の草庵の夕方である。

法話を終つた聖人は、たそがれ時の草庵の庭に、なにげなく佇立せられた。秋をつげる山萩がこぼれるように咲いて、もう虫の音がその根もとにきこえておる。音もない聖人の足音をききわけ、この辺に多い、真赤な山の小がにが、さあつと逃げてゆくのであつた。きやつきやつという声に、聖人は崖の上を眺められた。それには何時ものように、夕方になると大勢でやってくる猿の群がいた。山猿の群があつまつて遊ぶさまをみたことのある人ならば、子猿が馬に乗つた若武者のように威張つた格好をして、母猿の尻の近くの上に乗つておるのをみて、微笑したことを忘れないと思つた。

母猿は自分の背中に子猿が乗つておるといふようなことには少しも頓着なく、自分の好むがま

まにさあと樹にとびつく、その瞬間子猿は小さな手を伸ばして母猿のお腹を抱いて急に母猿の背中に消えたかと思うほど、すいついてしまふ。その仕草の巧妙なことは思わず、あつと叫びたい程である。

さて名越の山にむれ集つた猿達は、崖の上から聖人の姿を眺めていたが、やがて立ち上ると両手を合せた。毎日のように草庵の近くに遊ぶうちに合掌するしぐさを覚えたのであろうか。

合掌の手をほどくと、きやあつきやあつと叫びながら、互いに手をつなぎ合せて、所謂猿真似の鎖をつくつたが、その端の猿は聖人の前に現われて手を差し出した。

なにげなく聖人が手を出すと、思つたよりも力づくよく、ぐんぐんと上に引つぱる。崖はゆるやかな傾斜なので猿真似の鎖が、思いの外たよりになる杖となつて聖人は崖の上に登つてしまつたのである。

昔越後の乙寺に法華経をたもつ僧があつて朝夕法華経を読んでおつたが、毎日のように、二匹の猿がきてはお経を聞いておつた。そこで或る日、僧が猿に向つて「お前達はお経をききにきておるが、お経を書いてやろうか」といつた。ところが猿は合掌して僧侶を拜んだ。僧はあわれ不思議と思つておつたが、五、六日すると数百匹の猿どもが椿の皮を銘々に背負つて僧侶の前に積んで帰つていつたのである。僧侶はそれを紙にすかせて、これに法華経の経文を書きつらねたが、その間二匹の猿は毎日いろいろな果物を運んできては僧を供養したのである。

こうして僧が法華經の第五の巻を書く頃になった時、二匹の猿の姿がみえなくなったのである。怪しく思ったが僧が山へ入って探すと、ある山の奥に、山芋をもったまま、頭を穴の中に入れて、逆さまになって二匹とも死んでおったのである。山芋を深く掘って、穴に落ちてあがることが出来ず死んだのであろう。僧は深く悲しみ、猿のかばねを埋めて法華經を讀誦して帰って来たのである。僧はその後写經を終らないで、寺の仏前の柱をほってその中にかきかけの法華經を奉納してその寺を去ったのである。その後四十余年をへて、紀躬高朝臣が当国の国守になってきたが、この乙寺に参詣して、その住僧に尋ねて「もしこの寺に書き終らない經がないであろうか」と問うた。すると昔の住僧がまだ生きておることがわかり既に八十歳ではあったが、そのお經のあることを語り、その由来を話したので国守は大いに歡喜して「自分はこの願を果さんがために、今当国の国守に任じられたのである。昔の猿は自分である。法華經の力によつて人身を得たのである」と語り、三千部の法華經を書いて寺に奉納したということである（この話は事実で、寺も現存すると、建長六年（文応元年をさかのぼる七年前）脱稿の古今著聞集に載せてある）

猿は仁獣ともいわれる。前述の話にも猿と法華經の話載せておる程だから、今名越の猿どもが、聖人の手を引いて崖の上へ登らせたからとて敢て不思議ではない。

やがてのことに聖人を中心にして、樹の上からも、聖人の右にも左にも、むれ集まった猿ども

は、けたたましい声をたてながら山奥へ山奥へと聖人をいぎなつてゆくのであった。

十町程も聖人が猿に誘われるままに山路をきた時である。背後の草庵の方角にあたつておびた
だしい人の騒ぎ声と馬の嘶きがきこえたのである。

それを聞くと、猿の叫び声はなお更に大きくなり大勢でがさがさと樹の枝をふるわせたが、聖
人が通られた路あとに沢山の枯れ枝を落して路をかくすようであった。

この時分、聖人の居られた草庵には、

「日蓮を殺せ」

「気違い坊主を逃すな」

「念仏門徒の仇を討て」

と口々に口汚く罵つて、てんでに松明、得物を手にしながら数百人の群勢が、草庵めがけて殺到
しておつた。

指揮をとるのは覆面をした馬上の武士であつた。草庵の四方から馬をすすめて、手綱さばきも
見事に、暴徒が草庵中に走りこまねばならんように馬を止動するのだった。勢あまつた暴徒は草
庵の中に松明を投げこんだ。

一瞬にして草庵は火に包まれた。

能登房、進士太郎善春等は、よく奮戦したが、これとても、弟子の日昭、日興を逃すために時

をかせぐ奮戦で、やがて時を見て二人とも暴徒から身をひいた。

暴徒は明らかに聖人一人を目的にしてきたらしく、弟子や信徒達の退散には手も出さなかった。みるみる草庵は焼け落ちた。聖人は出てこない。聖人は焼死したと思ったか、馬上の武者の合図に暴徒は風の如く去っていった。

やがて暴徒が襲来したことも、草庵が焼け落ちたことも、嘘ではなかったかと思うような、静寂があとを支配していた。

三

「日蓮という坊さんは殺されたそうだ」

「ええつ本当ですかそれは」

「しかも焼き殺されたという話ですよ」

「いつです」

「一昨日の晩ですよ、四、五百人の人数で名越の草庵を取りかこんで、火を放って嚴重に見張ると、弟子や信者の逃げ出すには眼もくれず、それまで草庵で説法をしておった日蓮坊主の出て来るのをまっつておったが、火が消えてもとうとう出て来なかったそうです。おそらく、あんな気

性のはげしい人だから見苦しいところを見られなくなかったので、火の中で死んだのでしょ

「そうですか、そりやあよかった。あんなに念仏の悪口をいったんですから、その位の往生をしなくても不思議はないさ」

「まったくねえ。天下の鎌倉、しかも執権職の屋敷ののき端に声がとどきそうな小町の辻で、念仏無間、禅天魔とくるんですからまあまあ普通じゃないですよ、よく今まで命がありましたねえ、何年つづいたかな」

「そうですねえ、忘れもしない、真夜中に逗子葉山の辺の東の方にあたって、大きな真白い虹がでた年でした。如何なる前兆かと思ったら、その年に日蓮坊主が小町の辻にたつて真言亡国、律国賊をはじめたのですよ」

「そりや、あんた、建長六年の年ですよ。してみると、今年で丁度七年間続いた」

「七年の間も念仏無間、禅天魔をやったことになるなあ、鎌倉には南には念仏の二万五千貫の大仏さま、北には有名な支那の杭州経山寺を本朝に移したといわれる禅宗の建長寺がある。これが二つとも今を時めく北条時頼公の建立だ。この方のお屋敷の近くにたつて、その念禅の悪口を七年間もたてつづけにいったんだから、考えようによっちゃ、大した坊主だが……」

「気違いですよ。気違いならなんとだつていえますよ、日蓮という坊さんは可哀想だが気違いですよ、私はそう思ってるんだ」

「ところが気違いなら往来でたんと悪口をいったって取締りようもなかるうが、日蓮という坊さんは気違いじゃなかったんだ。医者に聞いた話だけれど気違いの話は筋が通っていないというが、日蓮さんは筋が通っている。日蓮さんは立正安国論という書物を書いて前の執権職時頼殿に献上したんだ。しかもその書物の中でも、念仏や禪者の悪口をいうばかりか、禪宗や念仏を信仰しておると、北条一門に同志討ちが起り、や、がてはよその国がこの日本の国を攻めてくるぞ、といったようなことを書いたんだそう……」

「そんなだいたいそれたことを書いて、よくもお咎めがないもんですねえ」

「のんきなことをいつてるよ、この人は、日蓮という坊さんは、そのために焼き殺されたんだと話の最初にいつてるじゃあないかい、しつかりしなさいよ」

「ああそうか、本当、本当」

「これで鎌倉の名物が一つなくなつた訳か。南無妙法蓮華経。ちよつとといひ好い口調だねえ。しかし、家ごと焼き殺しちまうとは恐ろしく威勢のいいやり口だが、誰かの指金だろう。まさか執権職じきじきの御命令ではあるまいが……」

「それが執権職じきじきの口ききらしい、まさか前の御執権職時頼さまでは、式目（鎌倉時代の法律）の手前もあつて、そんな無茶なことはすまいが、今の御執権職は前の御連署重時さまの子供の長時さまだ。重時さまは極楽寺を建立されて、御自分のことを極楽寺入道観覚とさえいつて

おる程の大念仏者、その子供が執権職になったんだもの、念仏の悪口をいわれておって、黙っておるものか、重時さまがそれとなく匂わすれば子供だもの執権職も黙つてはおれませうまい」

「そうだそうだ、まったくだ。大体北条さまは代々が本家は禅宗、分家は御念仏と相場がきまっているんだ。悪口をいわれて念仏や禅宗の信者達が怒り出して火を草庵につけたというのは表面のことで、御指図はお上から出たのに違いない、そうでなけりや、名越には北条一門の屋敷（北条義時の子朝時）があるのに、その近くで夜討ちなどというだいたいそれたことが出来る筈がない」

「ああ、これで日蓮さんもおしまいか、大きな坊さんだったから、たいそう焼けどがあつたでしようぜ。ナムアミナムアミ」

文応元年八月の三十日、聖人の名越の草庵が焼かれてから三日目である。

鎌倉中どこへいっても日蓮坊が焼け死んだという話でもちきつていた。

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

七か年も叫びつづけられた小町の辻に、焼き討ちのあつた日から、聖人の姿はみえなかつた。

「日蓮坊が焼き殺された」

鎌倉の街のうわさはいよいよ確実になった。

その頃、聖人は下総国八幡の荘若宮（千葉県市川市）の領主富木五郎胤継の屋敷に移っておつ

た。

聖人はこの屋敷で百か日の法筵を開き、太田乗明、曾谷教信、秋元太郎等々の有名な信者を得たのであった。

若宮の人々

松葉谷の草庵を焼き討もされた聖人は、富木殿及び門下のすすめに従って、千葉の若宮（今の中山）に身を逃がれたのであった。聖人の大法弘通の一日もゆるがせならざることを思つて、自分の屋敷に招いた聖人に、富木殿は百日間の御説法を願つたのである。そしてその間に、松葉谷の草庵の再建工事をすすめられたのである。

ここで、富木殿及びこの百日間の説法中にいよいよ信心を深くされた、太田乗明や曾谷教信等の御信者について略述してみよう。

富木殿は富木五郎左衛門尉胤継、字は常忍といい下総若宮の領主で後に出家して常修院日常といわれ中山法華経等を開創せられた。聖人より二つ年長で、建長六年下総より鎌倉にいたる船中で、宗祖の法話をきき入信したと伝えられておる。現在京浜電鉄金沢八景駅より五、六丁のところに船中問答の寺というのがある。その辺に富木殿の船がついたのであろう。富木常忍は聖人の俗縁があつたと伝えられておる。富木、太田、曾谷の三氏はともに鎌倉の文官で門註所出仕であ

った。

聖人が富木常忍に賜わった御書の総数は凡そ四十三編という多数にのぼり、その中には「観心本尊抄」「四信五品抄」等々重要な御書がある。母堂が九十余歳の高齢をもつて死去されその納骨のために身延に登山せられたが、この時感激法悦の余り、自分のもっていた御経を忘れて帰られてしまった。そこで幸便があつたので聖人は「忘持経事」という御書を賜わって「はんどく尊者は名を忘るこれエンブ第一の好く忘るる者也、今常忍上人は持経を忘る。日本第一の好く忘るる仁か」と戒められたことは有名なことである。

富木常忍は太田乗明の姉を妻としたが、早く死んだので後妻を貰った。後妻の連つ子に二男一女があつたが二男はともに僧侶になつた。長男は即ち六老僧の一人第五日頂上人であり次男は日向上人の弟子となつて重須談林の学頭にまでなつた日澄上人である。日頂上人は、日向上人とともに池上における宗祖日蓮大聖人の御入滅の時にその葬列に加わつておらない。日興上人の執筆した「御遷化記録」にも日昭、日朗、日興、日持の名はみえるが、日向と日頂の名はみえない。

おそらく余程遠隔の地に布教されていて、御葬送に間にあわなかつたのであろう。弘安七年十月十三日中山の富木殿の所で宗祖聖人の第三回忌が営まれた。この時日頂上人は鎌倉に布教中で、天台宗の僧侶と宗論を戦わしてようやくこれを降参させ、昼夜兼行で中山にかけつけだが、遂に第三回忌の法要におくれてしまった。この時富木殿は、宗祖聖人の葬式にも間にあわず今またこ

の第三回忌の法要にもおこなれてきたことを怒って「法論は僧侶としては日常茶飯事である。大聖人の三回忌は再びめぐってはこない。今日この悪例を残すことは、大聖人御在世中法問ふれ頭として門下の上になつておつたこの富木常忍の許さざる処である。将来法論に名をかりて大聖人の法要に欠席するという悪例を残すことのないように」

と御焼香も許さず、七年の勘当を申し渡したのである。

日頂上人はその夜より庭前の銀杏を経行して十七昼夜、深く深く懺悔の意を表して謝罪したが、富木常忍の翻意を得ることも出来ず、遂に漂然と正法弘通の旅に上られたのである。これが有名な「泣き銀杏」の話である。

連つ子の日頂が勘当の身となつてから、我が子の不首尾に責任を感じたか、富木殿の後妻は故郷である富士重須（現在の北山本門寺附近の地名）に帰られてしまった。

「入道（富木殿を指す）六十歳弘経導師の大願を企てて妻子を離別す」というのはこのことを指すのである。

日頂上人は晩年富士の日興上人の許に來られて、入滅された。日頂上人の墓は北山本門寺の本堂裏二丁余のところにある（正林寺）、土地をうず高くもり上げその上をびやくしんのような美しい樹がはつておる特別に変つたお墓である。勘当の故に石塔をたてないのだと伝えられる。

日興上人を非常に厳格の如く解しておる人もあるが「泣き銀杏」の日頂上人が富士に來て亡く

なっておりますことを考えると、弟の日澄上人がおったり母親がおったという姻戚関係以外に日興上人には、この大聖人の葬式にも不参をしましたその第三回忌の法要にも遅延して七年の勘当を受けたという日頂上人を、不幸な人として受け入れる溢れるばかりの温情があつたのであろうと思ふ。

太田乗明は問註所出仕であり、聖人と同年である。この人の姉が富木殿の妻であつた関係上、聖人の教化に浴した。一説にはその妻女は道辺右京の孫で聖人の従妹であり、この縁により聖人御遊学中の学資は太田家より支給されたとも伝えられる。

太田氏に賜つた御書は約十四編あるが、その中に「三大秘法抄」があることを忘れてはならない。賜書を通じてみて太田殿は相当に裕福であつたとみえて、聖人に資援すること多く、聖人身延入山後は、月々の糧米を奉納した程である。

太田氏の子息は聖人の弟子となり、日高上人という。現在中山法華経寺のある所は太田殿の屋敷跡である。富木殿の屋敷は若宮戸にあり、のち寺になるに及んでこれを法華寺といい、中山のを本妙寺といつたが、後両寺統合して本妙法華寺と称したと伝えておる。太田殿の子息はこの中山法華経寺の第二代となつた方である。

曾谷入道は下総の曾谷に住したので曾谷姓を名乗り、諱は教信、二郎兵衛尉と称し、聖人とは従兄弟の関係があつて御遊学の資を奉つたという説もある。太田氏とともに入道して法蓮日礼と

いい弟も出家して大進房三位房となり、子供も出家して日進、日源といった。いかに曾谷氏が信仰に熱心であったかがわかるであろう。

首題房日唱のこと。中山の近くの柏井村に鐘阿弥という人があつた。当時近村にも聞えた念仏者であつたが、この頃日蓮法師という人が近くの中山にきて、念仏は無間地獄の業なりと誹謗すると聞いて、憎き坊主めと口に念仏を唱えながら聖人の法席にきて問答を試みんとしたが、一言のもとに口を閉じて捨邪帰正し、今後は念仏を全く申さじと誓い、これまで念仏口唱の罪業を滅せんとて一心不乱強情に題目を唱えた。その声昼夜村内に響き渡り聖人の弟子となり首題房日唱と名を賜つた。この人従来念仏を唱えるには鐘を叩いておつたが、今その念仏をすて鐘も叩かず、お題目の時にさびしいと聖人に申し上げたところ、聖人にそれでは太鼓を叩いたらよからうといわれ、この首題房が一番最初に太鼓を叩いたといわれておる。日唱の子供も弟子となり日恵と称し、父の家を転じて寺となし今嶋山唱行寺と呼ぶ。

琵琶橋

一

「驚いた驚いた」

「なにをそんなに驚いてるんだい」

「日蓮という坊さんは焼き殺されたと念仏や禅の人々が評判していたが、あれは嘘だったんだよ」

「そんなことがあるものか、松葉谷の夜討ち以来、日蓮さんの姿を、この鎌倉でみた者は一人もないよ」

「どうしてどうしてわたしは今、琵琶橋のたもとでみてきたんだ」

「かたわにでもなつて、橋のたもとで、右や左の旦那様どうか一文お恵み下さい、よその御宗旨を悪くいった罪咎で、このあわれな姿でございます、とかなんとか、いつてるのかい、そいつは

みたいもんだね」

「とんでもない、御見当はずれさ、相も変らずだ、南無妙法蓮華經という旗をたてて、

念仏無間 禪天魔

真言亡国 律国賊

と前にも増してど鳴りたてておるよ」

「おやおや死ななかつたのかい。悪蓮の強い坊さんだねえ、だが念仏宗や禪宗の人々は困るだろう。自分たちが松葉谷の夜討ちをやつて日蓮さんを殺してしまつたと、あれ以来評判をたてて威張っていたんだから、殺してもお上からお咎めのない程悪い坊主だったんだといふらして鎌倉中を歩いていったんだ。そいつが生きていたんだとするとことは面倒だよ」

「こんどは日蓮坊も命はないぞ……」

「そうだねえ、しかし命は惜しくないとみえるなあ坊さんは、不思議な人さ、何処からあんな力が湧いてくるんだろう。俺にあの万分の一の力でもあつたならばお前なんかとこんなところで無駄口を聞いておる身分ではなかつたらうになあ」

「何をいやがる、俺にあの坊主の十分の一の力があつたら、大きな声ではいえねえが、この鎌倉、谷七郷を一寸掌の上に載せてるよ、近よるな、汚れる汚れる」

「大きく出やがったなあ、なにしろ日蓮さんもえらいところがあるよ、念仏無間、禪天魔、真言

亡国、律国賊、諸宗無得道、墮地獄之根源とくるんだからはげしいねえ、諸宗は型なしだよ。俺はこれから、琵琶橋へいって日蓮さんの説教を聞いてこよう、法論の理屈なんぞはどうでもいい、何処からあの力が出てくるのかさぐりあててやろう」

「日蓮は生きておったぞ。今この琵琶橋の橋の袂に立つ日蓮は、火にも焼けなかった不思議な日蓮であるぞ。昨年文応元年八月二十七日の夜、数百人の念仏宗や禅宗の人々が、ときの声をどつとあげて仏敵日蓮を亡せと日蓮が松葉谷の草庵に火を放ったのは、鎌倉中の人々のよう知る所だ。まことに日蓮が仏敵ならばその時に死んでおるであろう。ところがどうじゃ日蓮は今この鎌倉の琵琶橋の袂にたつて、南無妙法蓮華経の旗をたて、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊と叫んでおるのだ。皆の衆の中には日蓮の草庵を焼討ったあの数百千の松明が八月二十七日の夜、名越の谷に向かつて走ったのをみた者もおるであろう。否この中にはその夜、日蓮の草庵にその松明を投げこんだ者も必ずおるであろう。だが、日蓮は死ななかつた。日蓮は焼けなかつた。数百人の念仏宗の人々、禅宗の者ども、真言宗の輩、律宗の族どもが、あのちっほけな草庵をとり囲んだのだ、蟻の這い出るすきもなくとり囲まれた中から日蓮は逃れた。これは如何なる秘術によるのであろうか不思議ではないか……。不思議とは思わないか、その秘術をここに説き明かそう。それは外でもない、日蓮が前に置いたその笈の上に安置した法華経一部八巻の中から出てお

るのだ。法華經の中には火も焼く能わず水も漂すことあたわずと書かれてあるが、日蓮が、法華經の經文を証明しただけだ。日蓮が力ではないぞ法華經の真文のしからしむるところであるのだ。法華經が日蓮を救ったればこそ日蓮は焼き殺されなかったのだ。では何故、貧道の身に生まれたこの日蓮を法華經は救ったのか、仏は日蓮を殺さなかったのか、これはこれ日蓮こそ今の世を救う仏様の使いなればこそだ。この鎌倉を否、この日本国中を救うべき仏様の声を伝える者なればこそ、仏は日蓮を生かしておいたのだ。今こそ日蓮が唱える四箇の格言、

念仏無間 禅天魔

真言亡国 律国賊

諸宗無得道 墮地獄之根源

とは仏様の声なることが証明されたのだ。何故ならば、この四箇の格言が嘘言ならば、諸宗の輩から火を放たれた日蓮が、なんでこの琵琶橋に立つてであろうか。文応元年八月二十七日の夜に死んでいなければならぬ筈だ。しかるに日蓮は死なない。皆の衆よ不思議とはかかる事柄に使う言葉だ……」

「国難きたる。国難きたる。一国を亡すような国難のきたる時は必ず前兆のあるものじゃ、突如として国難のきたるということは古今東西にない、経文によれば他国侵逼難といってよその国がこの日本国を攻めほろぼす難がくる。その前には必ず自界叛逆の難といって国の中に同志討ちが起る。自界叛逆が起れば必ず三年七年のちに他国侵逼難が来る前兆である。どうじゃ皆の衆、日蓮が天下国家のことのみ論じておると思つて上の空できいてはならぬぞ。自界叛逆というのは、お手前の家のことにたとえていえば、夫婦喧嘩のことじゃ。毎日毎日夫婦喧嘩しておれば、親戚の信用も落ちよう、隣り近所の信用も落ちる、あんなに夫婦喧嘩しておつたんでは、貸したのも返してはくれまいから、今日のうちにとつておこうと、借金とりが、わおつとおしかけて来る、これ即ち他国侵逼之難というのじゃ」

思いもかけぬ、たとえ話に、いつもは石をほうり古わらじを飛ばす聴衆が、わあつと笑つた時である。

「どけつどけつどけつ」
と声がかかった。

「真昼間、しかも鎌倉の街頭、執権様のお膝許近くにおいて御政道を云々するとは、身の程しらぬ坊主だ」

三、四十人もおったか聴衆はその声とともに、さつと道をひらいた。四、五人の間註所の役人が、その間をするすると蛇のように這り込んだが、矢庭に聖人をとりかこんだ。

「それ、天地は国の明鏡である。今この日本国に天変地夭がある。正に国主にとがあるべしと知るべきである。地神いかりをなして身をふるい、天神身より光を出してこの国をおどす。いかに諫むとも用いざれば、結局は人の身に入って自界叛逆をせしめ他国より責むべし……」

「だまれだまれ坊主つ、その口をふさぐべく召しとりに参ったぞ」

「して、いづれより参られたか」

聖人はとりかこんだ役人を見渡した。その恰好は象の前に鼠が四、五匹あつまつたような姿であった。役人はちよこまかと身体を動かしてとびつくような身がまえであるが、聖人は動ずる色もなく役人を見おろしておるのである。

「……いずこから来られたか」

聖人はにっこり笑って再び尋ねる。

「問註所から参った。執権さまの御命である。縛につかれない」

「この日蓮をしばるといふのか、ふうむ」

聖人は腹の底から感心したような声を出した。これまでなりゆきを黙ったままみておった聴衆の波はどつと動いた。わあっという声がかきこえた。拍手が鳴ったようでもあった。念仏の聲が大きくきこえ、その中に調子はずれの南無妙法蓮華經という声もまじつておつた。

矢庭に飛びかかろうとする役人に向かつて、聖人は、

「まあ待てっ」

といわれた。

「御房つ、みにくいぞ、この期に及んで待てとは」

役人は叱咤した。聖人はその役人に眼をむけると、やわらかにいった。

「これは、もののわかる御仁とみた。既に法華經に命をささげておるこの日蓮、待てと言つたのは捕縛をば待てというのではない、これじや、この袈裟のことだ……」

聖人御自分の袈裟をゆつくりと指されて一寸もちあげてみせた。

「この袈裟を着たまま捕縛したのではなにがなんでもその方どもの落度にもなろうかと思つて申したまでだ。また日蓮も袈裟をかけたまま縛につこうとも思わぬ、この袈裟をはずすまで暫くの間待たれい、後学のために袈裟のいわれを申しさかせようか」

聖人は役人を前にして、今縛につくとも思われぬ落着いたようすで、袈裟をばすしながら悠々と、袈裟のいわれを語るのであった。

「袈裟は別名を福田衣と称し、僧侶のこれを大切にすること武士の大小のごときものだ。大小を差したる武士に繩をかけぬがごとく、袈裟を着したる僧侶には繩はかけぬものじや。その方どもの落度にもなるうといったのはこの道理をいつたまでで、なおまた経文によれば「袈裟は即ち人天寶幢の相、尊重敬礼すれば梵天に生ず、袈裟を着る時宝塔の相を生ずれば、能く衆罪を滅して諸の福徳を生ずる」とある」

聖人は袈裟をはずすと右手にもつて、誰というあてもなく、ぐつと差しだした。

「南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経」

と群衆の中から、若い女が飛びだして聖人のけさを受けとった。驚かれた聖人は、

「これは御奇特、法華の衆か……」

「いいえ違います。ただ聖人のお姿が、けだかくて、思わず南無妙法蓮華経と口に出たまままでございます」

「それで結構、この袈裟をあずけますぞ」

聖人は女に袈裟を渡すと、

「さあさあお役人、日蓮只今より縛につきましよう」
はつきりした声でいわれた。

由比が浜

「日蓮房が縛られた」

「日蓮房がつかまえられた」

鎌倉の町に、日蓮捕縛の噂は一瞬地震のごとくに伝おつた。

「それっ、みに行け」

「念仏の仇敵日蓮坊主がつかまつた。さても気味のよいことだ」

「あの傲慢な面が、しばられたら、どうなるか面白いぞ」

口々に叫びながら、戸毎に飛び出して、役人に守られた聖人の後を追って、かけだしたのである。

「おやつ、こりや大変じゃ、問註所には行かんらしいぞ」

「本当だ、何処へ行くのか、面白うなってきたわい」

なる程、聖人を引き立てた役人は、若宮大路（八幡通り）に出ると道をまがることなく真直に

往った。八幡通りは十八丁余で海に出る。問註所に引きたてるのなら道を右折しなければならぬ。これは訊間もなく処断ということの意味する恐ろしい処置である。

松並樹がつきると、さあつと潮風がまともに吹きつけてきた。五月の空の下に、由比浜の海はまばゆいばかりに白く光っていた。

「舟だ、舟だ」

「遠島だ……」

群衆は先き廻りをして、浜辺に出ていた。なぎさには、余り大きくないが官船が波にもてあそばれて待っているのだ。恐ろしいことが五月の白日の許に行われていた。一回の訊間もなく直ちに流罪とは類のないことである。今まで、口々にのしりながら、ここまでついてきた人達も、眼の前に舟をみてはこの意外にあきれて静まりかえってしまった。

聖人をとりかこんだ役人達は、群衆の感情とは全く別物で静かにおそろしいことを平気でいっていた。

舟は砂地によせられた。今は召人となった聖人の乗船を促している。

聖人はおくする色もなく船にのられた。乗船と同時に縄はとかれたとみえて、聖人は舶先に立つて、くが地を屹つと御覧になった。

この時である。二人の若い僧侶が砂丘のかけから矢のごとく走ってきた。

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

血を吐く思いのこの声には、さすがに船頭も棹をさす手の力がぬけた。

二人とも、水の中を忘れて、船先にとびつくのであった。

「退け退け。召人に従者は許さぬぞ出船だ……」

船頭は棹で水面をはたいた。

「おう、日朗に日興か……」

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

「これ騒ぐな……役人のいうところによれば、日蓮只今より伊豆の伊東とやらに流される由、……既に法華経に命をささげておるこの日蓮、立正安国論を北条時頼殿に献上したからには、流罪死罪も覚悟であった。今更あわてるは、師匠の日頃の戒めが弟子に及ばぬ証拠……」

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

日朗（この時十九歳）日興（この時十六歳）の二人の弟子は、波に足をさらわれながら、あふれ出る涙を拭くおうともせず、船先にすがらんと両手をもがくのだが、波にもてあそばれた船先

は、ややもすれば兩人の頭上に落ちかかろうとするのだった。

「今日は五月十二日、日蓮は今から二十九年前の五月の十二日に房州は清澄寺に出家得道したのである。しかるにその出家得度したる日も同じ、月も同じの今日の日、仏が、今者已満足と説かれた法華経の故に流罪に処せられるとは、日蓮法華経の行者の万分の一にあたるかと思つて、ただただ法悦至極の極みじや。日朗よ日興よ、そんな陸地における人々には、この船は、世を騒がす召人を捕えたる船とみるであろうが、この日蓮が法悦の眼をもつてみる時は、法華経の行者が乗る大白牛車にもすぐれたる日本国の一切衆生を救うべき大法船と中すべきだ」

「日朗！」「はいっ」

「日興！」「はいっ」

「泣くでない、この様な時には法華経の行者と、その後につづく者は、題目を唱えるのじや。題目を……」

「南無妙法蓮華経……」

「南無妙法蓮華経……」

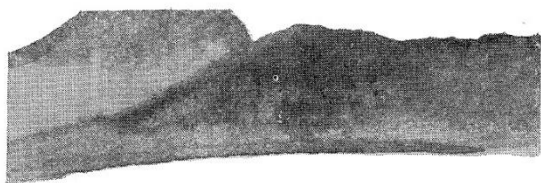
「日朗は日昭とともに日蓮なき後の鎌倉をよくく護れよ……」

「お聖人さま、私は……」

「お日興、お前はなあまだ、歳十六……」

「お聖人さま、流罪の地は伊豆の伊東と聞きました。鎌倉より伊豆の伊東は陸地つづきでござい
ます。舟が出ましたら、海上の帆をめあてにくがちより追いかけて申します。そうなしなければ
この日興がまんがなりません……」

聖人の返事を掻き消すように、出船を告げる法螺貝の音が上った。舟は聖人をのせて伊豆の伊
東へ向かった。



富 士（第一卷）

印刷 昭和四十九年五月七日

発行 昭和四十九年五月十六日

著 者 柿 沼 日 明

発行者 岩 井 福 次 郎

発行所 法華講連合会 大白法編集室

東京都墨田区吾妻橋一―四―一―

TEL〇三（622）五六四三

装幀・挿絵 落 合 歌 二 郎

地図作画 小 山 康 夫